

# 第3部

## 寄稿・インタビュー

この第3部では、90年誌の「青春の譜」に倣って、この10年での物故者への追悼、LB会員、現役有志からの寄稿などを特集しました。

特に、この10年で、須賀さん、田村さん、岡野さん、中島さん、高田さんという、ア式蹴球部にとっても、日本サッカー界にとっても有意な方々が相次いで亡くなりました。この5人の方々への追悼は、最も関係の深かった先輩方に執筆いただきました。また、若くして亡くなられたLB会員への追悼は、同期の方々をお願いしました。

LB会員と現役有志からの寄稿は、それぞれのア式蹴球部との関わり、ア式蹴球部に対する思いがうかがわれます。そして、LB会員の中で、サッカー界で活躍されている3人の方々、利重さん、久木田さん、添田さんに、その心意気を述べてもらうべくインタビューをしました。

また、今回は、かつて「部誌」として不定期に刊行され、貴重な内容が盛られている『闘魂』の全五巻について、池田さんが整理し、まとめています。たいへん興味深いものとなっています。

(武田)

# 闘魂

## 追 悼

ここに5人の偉大なLBの先輩の追悼を企画しました。この5人の方々は、それぞれの時代を生き抜いた中で、ア式蹴球部を深く愛し、この10年の間にサッカーと共にあった豊かな人生を閉じました。それぞれにゆかりの深い同期、後輩が振り返り、その人柄を偲びます。あらためて、ここに、5人の方々に深い感謝を捧げます。若いLBや現役の皆さんに偉大な先輩の足跡を知ってもらいたいと思います。(吉澤)

### 須賀敏孝

2012年、平成24年8月29日ご逝去、90歳

水戸高校を卒業し、昭和17年4月入学、昭和19年9月には繰上げで農学部を卒業。卒業後に林野庁に9年間勤務した後、上野の老舗の天ぷら料亭「山下」を経営しながら、昭和34年に転勤した大埜（水戸高の後輩）から監督を引き継ぐ。その年と昭和37年の2回2部で優勝（2回ともに入替戦で惜敗）。7年間に渡り監督を務めた。ほとんど毎日練習に顔を出し、練習や試合を厳しくも暖かく見守り続けた。昭和38年にLB若手を集め、欧州にあるような総合スポーツクラブを目指し、「御殿下クラブ」を創設し、監督・選手・スポンサーとして関東リーグで活躍するまでに育て上げた。長年にわたりLB会会長としてLB会の取りまとめに尽力し、LB会の法人化（2006年）後の初代の理事長を1年務め、2007年に浅見に後任を託した。

#### 須賀監督を偲んで

梅村 洋（昭和38年卒）

須賀さんに初めてご挨拶したのは昭和三十四年の三月末、農学部にあった合宿所の庭先であった。初めての練習の折であったと思う。自分も四十雀になったとおっしゃった。今考えると四十才前と思うが。高校の先輩と伺い心強く思ったことであった。

卒業までの四年間、お住まいが池之端としても殆どの練習に顔を出して頂いた。農学部の練習のおりには、砂場に幼い二人のお嬢さんの姿もあった。練習に参加されるのはラウンドキック。先の堅いスパイクで大きなボールを蹴られていたことが印象に残る。

当時は関東大学リーグ一部から二部になった



東早慶3大学超OB戦の写真  
(2009年5月4日撮影)  
第一生命グラウンド（相模園）にて須賀さんご夫妻（2列目左から5人目の白いスーツ姿が須賀氏、左が奥様）を囲んでのLB大集合写真。前列左から2人目が筆者の梅村氏。

(昭和三十一年) こともあり、竹腰さん、岡野さん、浅見さん他多くの先輩方が試合に練習に顔を見せて諸々のアドバイスを下さし一部復帰をとの激励や期待がありましたが、須賀さんは口になさませんでした。当時の部員は全員一部復帰を目指して練習していたので自主性を信頼して頂いたのでは。

わたしが四年で主将になり、リーグ戦での試合又優勝して臨んだ入替戦の選手起用についても先輩からご意見もありましたが事前に決めた通りのメンバーで試合が出来たこと、結果は残念ながら一部復帰は出来ませんでした。悔いは残らなかったこと、須賀さんに感謝しています。

練習以外のことで、経営なさっていた上野の「山下」の庭掃除のアルバイトを同期の門馬君と一緒にしました。アルバイト代の外食事に出された小柱のかき揚げ丼は本当においしかった。次の年次からは庭掃除の外に皿洗いの仕事もあった由。

卒業をひかえ仲間とサッカーを続けたいと思い同級生(門馬、高橋、内藤、中村、仁科、山根)と話し合い須賀さんをお願いし監督になって頂き、先輩の協力も得て東京クラブリーグに参加することにして、チーム名は当然「LB」としようと先輩に相談したところ駄目。昭和三十三年の全日本選手権で堂々三位になった「東大LB」は大切なブランドとあって、やむなくお世話になったグラウンドにあやかり「御殿下クラブ」と命名し、天狗の羽団扇を胸にデザインしたユニフォームを誂えての門出でした。社会人一年生を主体に若手先輩のチームは人集めに苦労し、須賀さんも監督兼選手として活躍して頂いた。相手チームは昔の師範学校や旧制中学のOBチームが多く我々よりは年齢が上であったので新加入にも拘わらず良く勝ち、翌年から京大、中大等の出身でボールを蹴る機会の無い人も加え安定した成績を残せる様になった。又一時期、ナイジェリアから日本の警察庁に研修に来ていた二人を加えたこともあった。昭和四十二年に前年の成績から関東社会人大会に出て、準優勝した結果、翌年関東社会人リーグに参加することになった。クラブチーム四、企業チーム四の八チームで構成されていた。この一年間は、甲府、日立、浦和、児玉等相手チームの本拠地に遠征があり、監督以下十二、三人で出かけて試合をする。試合の結果は覚えていないが、浦和での鰻、日立での那珂川の鮭など須賀さんに皆がご馳走になっ

た食べ物のことはしっかり覚えている。関東リーグにはわずか一年間だけで又、東京リーグに逆戻り。しかし、充実した一年間として御殿下クラブの記憶に残る一年でした。

昭和四十一年の京大戦は京都に遠征。その折日本海側を回って小旅行をする提案が須賀さんからあって、中村と畔柳が賛成、四人いれば麻雀も出来ると楽しみに須賀さんの愛車ベレット(エンジンはMGを搭載)で京大戦後二泊三日の小旅行に出かけた。綾部、小浜、北陸道を北上し高岡に出て、高山をめざし南下、乗鞍を経て松本、軽井沢を回り帰京した旅。生まれて初めて鮎のコース料理、今では珍しくないが甘海老(南蛮海老)を食べたこと、道なき道を須賀さんの勘を頼りに山道を走ったこと等だけ覚えている。須賀さんも若かった。

蹴球を離れた御殿下クラブの仲間達は、次にゴルフをするようになった。初めは須賀さんが会員だった富士桜、箱根、習志野等々で二、三組で楽しんでいたが、同期の高橋君がゴルフを始めるや熱中し、須賀さんを囲む会を定期的に行う様になった。足を悪くされてからは須賀さんが歩かないでプレイ出来る様にとカート乗り入れ可のコースを見つけて会を催すことになった。須賀さんが参加なさった最後は平成二十二年のプレステージカントリークラブの会であった。この御殿下クラブゴルフ会は今も高橋君の世話で続いているが、この会にも参加出来なくなった方がばつばつ居るのは残念なことだ。須賀夫人から、努力賞の差し入れを頂き、該当者は必ずお礼の手紙を差上げることにしている。

須賀さんが亡くなられて八月で六年になるが、監督時代のチームがずっと仲間として須賀さんを中心に交遊を続けていることになる。暖かいお人柄でご自分が体験なさった厳しくも良き時代の雰囲気私共後輩に行動で教えて頂いたことに感謝致します。

食べ物の事ばかりが記憶にあることお許しく下さい、須賀さん。

## 田村三郎



日本農芸化学会誌に掲載された写真

2015年、平成27年12月4日ご逝去、98歳

武蔵高校を卒業し、昭和11年4月に農学部農芸化学科に入学、昭和14年3月卒業。昭和20年8月に復員後農学部の助手として奉職。昭和37年に教授になり、昭和51年に日本学士院賞、平成11年に文化勲章を受章。

昭和30年に、関東リーグ1部からの降格を心配したOBから依頼され、当時の農学部助教授であった田村先生が、特別に監督に就任。自らの研究生活を犠牲にして、毎日の練習や夏の合宿に参加し、文字通り「前例のない献身的な指導をされた」ことは、90年誌に詳しい。

弟子の方が書いた文章によると「先生ご自身の話によりますと、サッカーをするために、東大に入られたそうで、それほどサッカーが大好きでした。当時の東大サッカー部は全盛期であり、先生のポジションはセンターフォワードでした。教授になられてからは、昭和47、48年にサッカー部の部長を務められました。その影響もあってか、サッカーを愛する学生が多数研究室に入ってきました。先生のサッカー好きは生涯続き、私が学生の頃は先生も参加されてほかの研究室や朝鮮大学の先生方と親善試合を行ったりしました。定年後もOBのチームに参加されてある会社の女子チームと試合されたことを楽しそうに話をされました。」

### 田村三郎監督を偲ぶ

小山富士夫（昭和35年卒）

昭和31年の関東大学1部リーグは、監督田村三郎助教授、キャプテン原靖二郎という陣容でスタートした。田村監督は当時農学部の助教授で、新進気鋭の研究者であられたが東大劣勢が伝えられたなかを、敢えてお引き請けくださったと聞いている。東大の劣勢は数年前から顕著で、現に29年には初めての入れ替え戦を経験していた。

31年度の相手は早稲田、慶應、教育、立教、明治、中央、農大の7校。10月に始まったリーグ戦ではこの何れにも勝てなかった。そして12月6日法政との入れ替え戦にのぞむ事となった。この日御殿下グラウンドは雲低く垂れこめ師走の寒さが身に沁みた。試合は前半リードしたものの、後半逆転され、結局1-2で敗れた。東大サッカー部が初めて2部リーグを経験する瞬間だった。試合後、部室の前あたりで田村監督、原キャプテンを中心に円陣をくんだ。みんな肅然たる面持ちで立ち尽くしたが、この円陣の中で田村監督は涙を流された。私は1年生で入ったばかりだったので、当然一番外側に居たが、身ぶるいが出るような感動を覚えた。田村先生の率直で誠実なお人柄にうたれた。先生はその後本来の研究生生活に戻られ、顕著な成果を上げられたことは周知の事である。



練習を指導される田村監督

## 岡野俊一郎



2007年6月撮影

2017年、平成29年2月2日ご逝去、85歳

### 畏敬する先輩 故岡野俊一郎さんへのレクイエム

浅見俊雄

岡野俊一郎さんが2017年2月2日に肺がんで亡くなられた。私にとっては1952年に東大に入学して、入学式前からサッカー部に入り、3年生だった岡野さんに初めてお会いしてからの長いお付き合いであった。私は浦和高校で3年の時正月の高校選手権に優勝して、その年52勝無敗、国体、関東大会、選手権と3冠を達成したチームのセンターハーフだった。東大はかつては名門でもそのころは関東大学一部の下位にいることは知っていたから、まあそんなにうまい人はいないだろうと自信過剰気味で練習に参加した。

確かにその予想はそう間違っただものではなかったが、その時3年生でセンターフォワードを務めていた岡野さんのプレーの華麗さには目を奪われたものだった。練習でのフォワードとバックの1対1の攻防で、岡野さんはボールに触らせてくれない、タックルに入ろうとするとずっと抜き去ってシュートを打たれてしまうことが何度も繰り返されたものだった。それから何とか岡野さんのドリブルするボールを取ろうという挑戦が始まった。

その年の秋の関東大学リーグ一部は7校で、東大は5敗1分けで初めてリーグ最下位となったが、何とか入れ替え戦に勝って一部に残留した。その後の1953年正月に第1回の全国大学選手権大会が自由参加で開かれることになり、東大は、最下位で終るのは悔しいからこの大会に出ようと

いうことになった。

大会は正月に明治神宮競技場（のちに改修されて国立競技場となった）と絵画館前のグラウンドで行われたが、東大は初戦で負けるという新聞の予想を跳ね返して、リーグでは負けた中大、立大に勝って決勝に進み、リーグで唯一引き分けた早大との決勝戦に2-1で勝って見事に優勝した。この大会での岡野さんの活躍は目覚ましいものだった。私は左のサイドハーフで、ボールを持つとまず岡野さんの動きを見て、走り出していれば岡野さんと言いながら縦へパスを送り、岡野さんの突破でチャンスを何度も作り、得点も上げてくれた。まさにこの大会の最高殊勲選手だった。

この大会の期間、岡野さんは友人二人にスキーに誘われていて、負けたら行こうということで、友人は毎日試合を見に来ていて、遂にスキーには行きそびれてしまった。岡野さんはスキーの名手でもあった。

この大会の活躍で、岡野さんはその年に西ドイツで行われた国際学生スポーツ週間（のちのユニバーシアード大会）の日本学生代表チームのメンバーに選ばれて参加する。そこでチームメートの長沼、平木と出会い、のちの日本代表の指導陣へとつながっていくことになる。

4年生となって岡野さんはキャプテンになるべき存在だったが、この大会で長期に抜けるので、キャプテンは引き受けなかった。

岡野さんは東大では理科2類（当時は医学部や生物系の学科への進学コース）に入学し、医学部へ進学するつもりだったようだが、1年の時の蛙の解剖の実験で、自分には向かないと、3年時の進学は文学部の哲学科を選んだ。私には入学した時からいろいろ目をかけてくれて、彼の家へも何回か連れて行ってくれた。最初に行ったとき、彼の部屋に通されたが、本棚に哲学書が並んでいるのを見て、私はこれは読んだのかと聞いたら、当たり前だよ、君は読まないのか、という答えに、本はあまり読んでいない私は、サッカーに熱中するかたわら、マージャンやパチンコに興ずる遊び人の岡野さんとは違う面を知って、驚くというより、すごい人だなというむしろ畏敬の念を持ったものだった。

しかし、哲学では卒論が書けそうもないと、途



1953年に開催された第1回全国大学選手権で優勝したときの1枚。前列左端が岡野さん、後列右から3人目が筆者。

中で心理学科に転科する。そんなことで在学が5年、6年と伸びて、結局7年在学して卒業する。私も理科2類に入って医学部へ行くというのが入学した時の志だったが、入ってみたら、当時の医学部はまた入試があり、しかも全国どこからでも医学部進学に必要な単位をとってれば受験できるという制度だったので、サッカーをしてはとても無理とあきらめて、調べて見たら教育学部に体育学科という東大の教養からはほとんど進学していない学科があるのを知って、早々にそこへの進学を決めていた。まあそのおかげで今の私があるということになる。

いずれにせよ、岡野さんが私と同じ学年になって、しかも私がキャプテンになったので、岡野さんと二人の時に、今日から「さん」はつけずに「岡野」と呼ばせてもらいます、と言ったら、あっさりと「ああいよ、当然だよ。」と言ってくれた。そしてこの1年間は「岡野」と呼ばせてもらったが、卒業した後はまた「岡野さん」というようになった。

大学時代は岡野さんも私も東大のチームで、そして卒業後の数年間は、日本選手権には現役、OBの混成チームの「東大LB」で、そのほとんどの試合に岡野さんと一緒に試合に出ていたから、きちんと記録はとっていないが、岡野さんと同じチームで試合をした回数は練習試合を入れれば100は超え、たぶん私が一番多いのではないかと思っている。

その中で岡野さんに勝ったことと言えば、PKを決めた数だろう。岡野さんは技巧派だったから、PKとなると隅を狙ったりして外すことが多かつ

た。私はけたPKはすべて決めたと記憶している。OBと現役混成の東大LBで出た1958年の藤枝での天皇杯の準々決勝の東洋工業戦で岡野さんがゴール前で倒されてPKとなった時も、外からOB（それも競技役員の）に「浅見けれ」と大声がかかって、私が蹴って準決勝に進み、準決勝で八幡に1-0で惜敗して、3位決定戦では地元志太クラブに勝って3位になったのが、全国的な大会で東大が輝いた最後の試合となった。

大学時代もそのあとでも、若いころはよくバーに飲みにも連れていってくれた。銀座や新宿で、しゃれた店が多く、

一度は浦和に帰る電車がなくなって、入谷にあったご自宅に一緒に行って、彼の寝室の窓から入って寝て、翌朝お母さんに「あら浅見さん、いつ来たの」と言われたこともあった。

大学を出たすぐのころ、岡野さんは上野駅前の岡埜栄泉堂本舗（岡野さんはこの御曹司で店は父と長男に任せていたが、父の後の社長でもあった）のお店の裏にバーを作って、銀座のバーテンを引き抜いて、時に岡野さんもシェーカーを振っていたことがあった。岡野さんらしいスマートな雰囲気、女性客も多かった。私も何回かふらりと立ち寄ったことがある。菓子屋の裏にバーがあるのは如何なものか、とお父さんは渋い顔をしていたようである。

読者の皆さんの知らない岡野さんとの交遊の一部を紹介させていただいたが、その後のサッカーは勿論広くスポーツ界での、それも日本だけでなくアジア、世界での岡野さんの活躍はここに紹介するまでもないだろう。

東大卒業後、岡野さんも私も、日本サッカー協会の仕事を手伝うようになり、二人とも東京オリンピックの強化コーチになり、国際審判員の候補にもなったが、その後は岡野さんは来日したクラマー氏の通訳兼コーチとして日本代表チームに関わり、東京大会、メキシコ大会と長沼監督、岡野コーチの名コンビで、入賞、そして銅メダルに輝いたのはどなたでも知っていることだ。岡野さんなしにはクラマーの豊富な知識と勝利への強い意志は選手に伝わらなかったであろう。そして私は審判の道を進んだ。

その後も岡野さんは日本サッカー協会、体協、

JOCという日本のスポーツの中核組織の中で重要な役割を果たし続けた。特にモスクワオリンピックの不参加を契機に起きたJOCの日体協からの独立に当たっての参謀役を務めたのは岡野さんだった。そしてIOCの委員になって、サッカーだけでなくスポーツの、それも世界のスポーツのかじ取り役になった。

私もサッカー協会だけでなく日体協やJOCでもいろいろとお手伝いさせていただいたが、東大時代と同様に、岡野さんにパスを回す役（それもミスパスが多かったが）以上のことはできなかった。

岡野さんに対して私がいつも持っていた感想は、クールで決断することを恐れない人、追いつこう

としても常に先を行っている人、近しい仲でありながら、何か畏れ多さというか、近づきがたささえ感じてしまう人といったものだった。

そのうちに私もそちらへ行ったら、またサッカーでいいパスを出すからシュートを決めてください。しかしPKだけは私が蹴りますよ。

この文章は、ベースボール・マガジン社刊の月刊誌『コーチング・クリニック』に浅見が連載しているコラム「ボールが転がるままに」の2017年5月号に寄稿した表題の文章を、同社の許可を得て本誌に掲載したものである。

## 中島 裕

2016年、平成28年9月22日ご逝去、84歳

### 超OBサッカーのレジェンド 中島裕への挽歌

浅見俊雄

中島裕君、いや中島、年齢は1歳君の方が上だが、初めて会った時から君には“さん”や“くん”を付けて呼んだことはないから、この文でも中島で書かせていただく。

最初に君に会ったのは、東大に入学した1952年4月の駒場（東大教養学部）の教室であった。入学から1年半は二人とも理科2類の5組だったので、社会科学と人文科学の選択科目以外の英・独語と自然科学の授業は同じクラスで授業を受けていた。私はア式蹴球部（サッカー部）に授業の始まる前から入部したが、中島は少し遅れて入部し、それから教養学部の2年間は授業のあと多くの曜日に一緒に駒場から本郷の御殿下グラウンドに通っていた。そんなことで話す機会も多かったが、君とサッカー以外のことでどんな話をしていたかは全く覚えていない。

君は1932（昭和7）年7月27日に兵庫県の芦屋で生まれて、そこで幼少期を過ごし、父親の仕事の関係で東京都武蔵野市に小学校4年の時に転居したようだ。そして終戦の直前に都立十中に入り、学制改革でそのまま都立西高の生徒となり、

中学時代からサッカーを始めた。一浪して東大の理科2類に入り、私と同じクラス、そしてサッカー部員になった。

当時は部員数も20数人程度で1年生も10人に足らず、関東大学リーグの1部にはいたが、3年生の岡野さん以外にはうまい人は少なく、私と中島が1年生でリーグ戦の6試合全部に出場したが、1分け5敗で史上初の最下位となり、2部1位の青山学院大と入れ替え戦を行うことになった。

場所は東大の御殿下グラウンド、2年以上の学年の選手は、初めての入れ替え戦にみながちがいの状態で口数も少なく、1年生で出場した中島と二人でグラウンド下の部室からチームの最後尾でグラウンドに向かいながら、「二人でがんばらない」と言葉を交わしたのを覚えている。

そして試合では前半の序盤で私のパスを中島が決め、さらに中ほどで中島のパスを私が決めて、皆の表情も明るくなり、後半は前半の硬さはとれて、2点を追加して4-0で完勝し、一部残留を決めた。

そして翌年正月から始まった自由参加の全国大学選手権大会にリーグ戦の悔しさを晴らそうと出場し、1回戦で敗退するという新聞の予想を見事に裏切って、京都学芸大、中大、立大、早大を次々と倒して見事優勝する。岡野さんの活躍は目覚ましく、この後に開かれた世界大学サッカー大会（のちのユニバーシアード大会）の日本代表に選ばれたが、その活躍は中島のサポートがあってこ

そのものだった。そしてその後も毎年リーグ戦は最下位か下位から2番目、3年の時の2度目の入れ替え戦も法政に6―1で勝って、2部に落ちることはなかった。そして正月の大学選手権大会では、2年の時は2回戦で敗れたが、3、4年時は3位だった。

4年の時は私が主将になり、中島には副将的な役割をしてもらった。また岡野さんは哲学科に進学したが、卒論が書けそうもないと心理学科に転科し、7年間在学して、6年目までエースとして活躍した。7年目は退部して試合に出なかった。

京大戦、大学リーグ、入れ替え戦、大学選手権の夏以降の公式戦に、中島は1年では11試合中10試合、2年では9試合中8試合、3年では13試合中13試合、4年では11試合中11試合に出場している。ちなみに浅見はその順で、11、9、11、11試合、合計すると4年間で中島は44試合中42、浅見も42試合と、夏以後の公式戦に2人とも4年間で2試合欠場しただけだったということになる。欠場の理由は二人とも負傷によるものだった。ポジションはほとんどの試合に中島が左のインナー、私がその後ろの左のサイドハーフで、プレーでも気持ちの上でも、またサッカー以外でもいいコンビだった。

岡野さんのプレーは軽快で華麗、対して中島は重厚で堅実と対照的なもので、この二人もずっといい攻撃のコンビだった。二人とも脚も速かったが、私は読みとポジションどりで足の遅いのをカバーするというタイプで、後方から2人にパスを送って支援するという役割だったが、攻めるより守備で頑張る時間の方が長かった。

私たちの学年が卒業した翌年に、東大は2部に転落し、その後さらに東京リーグに落ちてしまった。日本のサッカーはそこから急激に盛んになって高校のレベルも上がったが、東大には高校で活躍した優秀な選手はほとんど入ってこなくなっていた。

中島は教養学部から農学部畜産学科に進学し、更に農芸化学の修士課程で学んだ。1958年に課程修了後、明治製菓株式会社に入社し、社業の傍ら会社のサッカー部に所属してサッカーを楽しむ。しかしこのレベルでは満足できなかったのだろう、大学リーグで活躍した選手たちでTRICKクラブというサッカーチームが結成され、中島も誘われてそのチームに所属して活躍する。TRICKは東

大のT、立教のR、インターナショナルのI、中央のC、慶応のKのOBで作られたチームで、東大からは岡野と中島が、横浜の外人クラブの長身のGKマックさんなど、日本代表を含むそうそうたるメンバーで構成されていた。

そのころ読売新聞社が世界で一番盛んなスポーツであるサッカーを日本でもっと盛んにしようと、都市対抗大会を後楽園にあった競輪場などで開催した。中島家に保存されていた1960年の第6回大会のプログラムには、東京代表で出場した古河電工のメンバーに岡野、中島などの補強した選手の名前もあり、新聞にもこのチームで優勝した記事が掲載されている。

私も浦和クラブでこの大会に何回か参加して、準優勝や3位になったこともあり、上記のプログラムにも私の名前が載っているが、中島と対戦した記憶はない。いずれにせよ中島がああ日本代表が何人もいる古河電工に補強されて出場し、優勝に貢献する活躍をするようなレベルの選手だったことのはっきりする記録だ。先にあげたTRICKが出場して優勝した年もあったから、中島はその年にも出場していたように思う。

1960年は中島が4月に結婚した年でもある。奥様は、中島が大学3年の時の夏休みに東大の山中寮で寮の運営の仕事をした時に、お茶の水女子大学の1年生で、寮の売店でアルバイトをしていた俱子（ともこ）さんだ。当時の俱子さんの中島への印象は「おとなしい人」だったようだ。私も長い付き合いの中で、中島が怒ったり、誰かを怒鳴りつけたりしたのを見たことも聞いたこともなかった。

私も中島と時期は別だったが山中寮で同じ仕事をしたことがあったが、そうした素敵な出会いはなかった。夏休みの開寮時の山中寮の運営の仕事は、そこで合宿練習をするヨット部とサッカー部の部員がしていたのだった。その後御夫婦は二女をもうけて幸せな家庭を築いていった。お孫さんはお二人いらっしゃる。

明治製菓時代は会社のチームだけでは飽き足らず、TRICKなどの社会人チームや古河電工の助っ人などでサッカーを楽しんだが、年間の試合数はそんなに多いものではなかったろう。会社での仕事は欧米企業との共同開発を含めて、事業開発や新素材の事業などだったようだ。

明治製菓を1992年7月に退職した後は、理工

系の専門技術者を養成する小小学園・東京テクニカルカレッジに招かれ、バイオテクノロジー科科长、教務部長を経て校長に就任して、専門技術者の養成に尽力し、2009年に退職する。

中島がオールドエイジのサッカーに熱中したのは、明治製菓を退職して、自由な時間が増えたのちのことのようである。会社時代は海外出張も多くサッカーに時間を割く余裕はそれほどなかったようだが、退職後はかつての仲間たちが待ちかねていて、四十雀（40歳以上）、SOI（旧制高校のOBチームにその後のOBも加わりだした）、さらにO50（50歳以上）、O60、O70など、地域や大学OBのチームで、リーグ戦やトーナメント戦、対抗試合など、多くの年寄りチームによる試合があり、中島の活躍の場は一層広がっていった。彼の様な能力（体力、技術、気力とも）の高い選手は、いろいろなチームに誘われて、中心選手として活躍し、得点もかなり多く上げていた。

奥様にお聞きしたところ、中島の試合の出場や勝敗、得点などの記録を残したノートなどは見つからず、残念ながらそうした情報は得られなかった。チームメートや対戦した選手、あるいは試合を見た人たちの脳裏には、彼の活躍ぶりや得点シーンなどが鮮明に記憶されていることだろう。試合から帰宅後も、多分一杯やりながら、奥様やご家族には今日はこうこうして点を入れたぞなどとうれしそうに語っていたそうである。

中島と一緒に試合をしたり、試合を見た人の誰もが、中島さんはすごい、よく走ってボールをとり、力強いドリブルとシュートで得点を挙げている、年よりサッカーのレジェンドで得点王だ、といった話をよく聞いたものである。

しかし、こうした活躍から頑健そのものに見えた彼の身体にも、病魔はくらくいついていた。定例の人間ドックで医師から心臓の血管が狭くなっているとの診断を受け、慈恵医大を紹介されて2003年3月に同大学の循環器科でステント（細くなって血液が通りにくくなっている心臓の血管に金属の網目状の筒を入れて膨らませる）を入れる手術を受ける。医師からはサッカーをプレーして問題ないと言われ、退院後すぐにサッカーに復帰する。

医師の保証もあって、その後もますますサッカ



中島さん（右）と筆者（後ろ）

ーに数多く参加して活躍する。毎年暮れに国立競技場で行われていた60歳以上の東西対抗戦（ロイヤルサッカー大会）にも毎年のように出場する。私はひざを痛めて60歳を越したころから試合には参加していなかったが、この大会には運営側で参加していて、引退した国際審判員や現役の女子審判員の手配などをしたり、最高齢チームの試合の審判もしていた。写真はその時のものである。中島のボールをコントロールしながらゴールを狙う目線と、それを後方から追う主審の私との2ショットで、二人にとってのピッチ上での最後の記念写真である。

中島は自分がサッカーをして楽しむだけでなく、多くのサッカーのOBが年を取ってもサッカーを楽しめるようにと、シニアサッカーの仲間づくりや全国的な組織作りにも力を尽くしていた。

中島はその後半年に1回の定期検診を受け、医師からもサッカーをして問題はないと言われてサッカーを続けていた。そして2011年4月、その1週間前の定期検診で問題なしという診断で、馬入川の河川敷のベルマーレの練習グラウンド（新幹線から上流側に見えるグラウンド）で練習試合の最中に突然倒れて意識不明となった。仲間が心臓マッサージを始めたところで、2面ある隣のグラウンドで練習していたベルマーレのトレーナーがAEDを持って駆け付け、ただちに施術して鼓動が回復する。

近くの平塚共済病院に運ばれて、意識が戻らないままに集中治療室で低体温療法を続け、1週間後に意識が戻り、一般病棟に移って治療が続けられた。この病院には心臓に特化した心臓センターという部門があったことも幸いだった。倒れた時

のAEDといい、近くにこの病院があったことといい、日ごろの彼の行い、特にご家族の願いと、もっと中島とプレーしたい、中島のゴールを見たというサッカー仲間の思いが、こうした奇跡的な連鎖を生んだのであろう。

この時私は面会できる状態になったと聞いて見舞いに行き、「中島、いい加減にしろ、サッカー場で死んだら、その時の仲間はと思うか。元気に帰ってくるおまえでなく、遺体で家に帰って来たお前を迎える家族の気持ちを考えろ」と小声で叱ったが、中島は「ごめん、ごめん」と笑顔で答えた。

中島は1カ月の入院療養の後退院したが、医師はサッカーを再開することを許可したという。サッカーをしないで家でごろごろしているより、この人にとってはサッカーをする方が幸せな余生を送れるという診断というより判断だったのだろう。

そして倒れてから2カ月ほど後に、またピッチに英姿を表す。そのプレーぶりについての情報は私のところには届いていなかった。奥様の言葉によれば、以前どおりサッカーを楽しんでいたという。たぶん中島にとっては、死線を乗り越えたことで、それまでの勝つサッカー、点をとるサッカーから、仲間とみんなで楽しむサッカーに気持ちが変化していったのではないかと私は推察している。

2015年の晩秋に肺に影が見つかり、翌年初めに肺腺癌と診断される。その後も治療しながら好

きなサッカーを楽しんでいた。そして、2016年夏に腰を痛めるまでサッカーを続けていたと奥様はいう。

その後も肺腺癌は進行して、2016年9月に体調を崩し、同月22日に死去する。享年84歳だった。そして先輩であり良き戦友であった岡野さんも、後を追うかのように2017年2月2日に逝去する。

中島からの2015年の年賀状には、通例の年賀のあいさつの後に手書きで「LB-O70のSFLも苦戦を続けています。〈苦戦にはなれている筈ですが〉シニアのサッカーのプレー環境が大いに整ってきてO-70やO-80の大会でも楽しめるようになりました。」とある。こうした環境になったのも、中島の尽力があってこそのことなのだろう。

中島は今では築地本願寺の西多摩霊園の小高い丘の頂上近くの墓地で静かに眠っているのか、それとも待ち構えていた先輩たちや、あとから行った岡野さんたちと天上でサッカーを楽しんでいるのだろうか。

そのうち私もそっちへ行くが、呼んでくれるのはまだ早い。

追記 この文章は私が中島について知っていたことに加えて、知らなかったことやあいまいなことについては中島夫人の俱子さんに何回かメールでお尋ねして、ご丁寧に答えいただいたことを書きつづったものです。俱子さん、いろいろとお手数をかけてありがとうございました。

## 高田宗昌



昭和33年9月、天皇杯に参加した現役6人（3位、於藤枝）。後列右端が、メガネをかけた高田選手。

後列左から、服部、長浜、高田、  
前列左から、高場、小山、安達良英。  
(写真提供：小山氏)

2010年、平成22年1月2日ご逝去、73歳  
都立大学附属高校を卒業、昭和30年4月に入学、2年の時に入部したが、その年に関東2部降格。4年で主将。1部復帰は果たせなかったが、東大LBとして天皇杯3位になった。昭和34年に農芸化学科（田村監督が恩師）を卒業し日本製粉に入社後も、土曜の午後と日曜、祝日はほとんど御殿下に通い、須賀監督のサポートをした。昭和40年、41年の2年間は監督を務めた。また、昭和37年に1級審判員に登録し、昭和50年代半ばまで、1級審判員、国際審判員として活躍。年休はすべてサッカーに使った。サッカー協会の審判委員会の指導育成部長としても活動し、女子の1級審判員の創設に関わり、またJリーグのマッチコミッショナー（発足から10年間）も務めた。

## 高田監督の思い出

主将 平田 攻（昭和 41 年卒）

日本のサッカーの指導方法を、一変させた、日本蹴球協会のクラマーさんの招聘。ペンデルが、七徳堂の方のゴール後ろに建てられたのは、確か 1 年生の時だった。そして、高田コーチが、そのクラマーさんを案内してこられ、直接指導を受けた記憶があります。クラマーさんは「サッカーは 3 B が肝要だ。BALL-CONTROL、BODY-BALANCE、BRAIN だ」という言葉を、鮮明に覚えています。「BRAIN の中で、特に必要なのは、相手の行動を予測する力である」とも強調されました。監督の協会の役割は、不明ですが、日本リーグで、審判を長くやられていました。また、五月祭、納会など部の OB 戦で、眼鏡をかけて背筋をずっと伸ばして、ライン沿いを走られている姿が、目に浮かびます。

3 年のリーグ戦が終了し、主将を引き受けることとなり、須賀監督の下で闘うものと思っていたところ、須賀監督は勇退され、高田コーチが、監督になるということを知られ吃驚したことでした。須賀監督は、急にやめて悪いなと、我々 3 年生を上野の焼き肉屋へ招待してくださいました。私が初めて焼き肉と出会ったときです。食べ盛りの仲間、焼ける間もなく我先に食べていると、須賀監督が「俺にも食べさせてよ!」という一幕もありました。高田監督とのお付き合いが始まるのですが、いつも淡々とした口振りで、分り易く話されていました。

練習の内容は、何の疑念もなく、高田監督の薦めもありクラマー流を取り入れて実施しました。キーパーでレギュラーの坂井君が「キーパー続けるならやめる!」と言い出し、同学年の広瀬君を、渡辺君と一緒に尋ね、復帰を要請し、春合宿から、GK 広瀬君、CF 坂井君の挑戦がはじまりました。戦術的には、当時の典型的な WM システムでしたが、CB の後ろに、一人おくことを提案されました。私には、ゲームメーカーになれと指示されました。また全員に「BALL-LIFTING を 100 回以上目指せ」と。現役世代には信じられないかも知れませんが、当時の仲間は概ね 20 ～ 30 回程度だったと思います。また、監督の「ドリブルは、ただ、前に運ぶのではなく、リズムに変化をつけることが肝要」という言葉が、印象に残っています。

前年に日本リーグは始まったためか、70 人強の新人が入部し対応に困りました。その時監督が、2 部制の練習を採用したらどうか提案され、新人は、1 時から渡辺君が指導することにし、その他の学年は、2 時からとしました（その新人も、夏合宿に参加したのは、10 数名となり練習時間も通常に復しました）。京大戦は、経緯は覚えていませんが、初めて検見川で実施されました。夏合宿は、1 対 1 の強化を主題に、ペアを組まされ、FW、BK 交互にしながら、検見川のグラウンドを、何度も往復しました。「平田は坂井と」言われ坂井君のパワーに押され気味、へとへとになりました。

監督の方針で、試合経験の少ない 2 年生以下のチームで、帝京高校などとの高校生相手の試合数も増やしました。我々は、前年発足した日本リーグの古河電工、三菱重工などの練習台となって、度々試合をしました。また全日本が、本郷で合宿した時も、お相手させてもらいました。

春、監督に誘われて、日本製粉の工場を訪ねました。「ここを通れるかな?」と、揺れ動く篩のような大きな箱の間をスタスタ歩いていかれました。なんとか私もクリアできました。夏の終わり、練習後、2 人で歩いていた時、赤門のあたりで「平田、この頃元気ないな、何かあるのか」と問われ「いやー、彼女に振られたんですよ」と答えると「そんなことか、蓼食う虫も好き好きといってな、心配するな、いい人が現れるよ」変な慰め方をされました。リーグ戦に入り、3 戦目か 4 戦目で野村君から三浦君に入れ替えられたので、試合後監督に理由を質したところ「梅（梅村さん）が紅白試合をみて、三浦が球を収められるので使ったらとの提案があったから」とのことでした。野村君は FW で唯一守備にも献身的に働いており、BK 陣からすると痛かったです。また、監督より「大内さんが銀座で個展を開いているので、観に行ったら」と言われ 4 年全員で鑑賞。終わってから、大内先輩から銀座で中華をご馳走になりました。

折角の週一日の日曜日に、殆ど毎回顔を出され、部員全体に目配りされ、先輩との繋ぎなどに配慮され、気の利かない、視野の狭い私に、淡々と、接して指導していただいたことに感謝しています。

最後になりますが、高田監督のご冥福をお祈りいたします。

## 活躍する OB の声

スポーツビジネスの最前線で

### ア式の後輩たちが続く道に

利重孝夫（昭和 63 年卒）

#### サッカーに満ち溢れた 毎日を送る日々

——利重さんの現在のお仕事や週末の活動について教えて下さい。

**利重** 自分が大学生であった時には想像だにできなかったのですが、卒業して30年経った今でもサッカーに満ち溢れた日々を送っています。

先ずメインの仕事としては、シティ・フットボール・グループ（CFG）日本法人の代表を務めています。CFG はイングランド・プレミアリーグのマンチェスター・シティをフラッグシップとしたシティ・ブランドをベースにグローバルに多クラブ展開している、世界のサッカー界、スポーツ界でもユニークな存在です。サッカー部門の本拠地がマンチェスターで、ビジネス部門はロンドン。オーナーは87%がアブダビ、13%は中国で、経営者・監督・強化部長はカタルーニャ（バルセロナ）といった、世界のサッカー界の最先端を凝縮したような事業体です。

その中で、私自身は、グループにとっての大きなスポンサーである日産自動車へのベネフィット提供、具体的には日産が所有するプロサッカークラブである横浜 F・マリノスに対するサッカー強化面、事業面両面へのサポートを行いつつ、日本でのマンチェスター・シティのファンベースを拡大して、新たなスポンサー獲得のため日本企業向けの営業を行っています。

——その他にもサッカーに関連する活動をされているのでしょうか？

**利重** はい。くわえて自ら経営する（株）ソル・メディアという会社で、コアなサッカー・ファン向けの海外サッカー雑誌「footballista」を発行するほか、サッカーをしている子供を持つお母さん向けの情報メディア「サカママ」事業などを展開しています。



#### プロフィール

昭和 63 年卒。東大ア式蹴球部総監督。東大 LB 会副理事長。御殿下サッカースクール責任者。（株）日本興業銀行・楽天（株）を経て、現在シティ・フットボール・ジャパン（株）代表を務める。横浜マリノス（株）取締役。（株）ソル・メディア社長。Club LB-BRB（東京ユナイテッド／文京 LB レディース）理事。コロンビア経営大学院（MBA）卒。

さらに、東大ア式蹴球部男女（総監督）、東京ユナイテッド&文京 LB レディース（理事）、そして御殿下サッカースクール（責任者）など、仕事、ボランティア、地域、OB としての取り組みの違いをあまり意識することなく、サッカーを通じて様々な人々と触れ合いながら日々活動しています。——利重さんは卒業して銀行（日本興業銀行）に入られたとお聞きました。

**利重** その通りです。本当に大学時代には思いもよらなかったですね。前職の楽天時代に、古巣ヴェルディ（東京ヴェルディ 1969）のメインスポンサーに自ら名乗り出たことが、スポーツビジネス業界においてキャリアを構築していくきっかけとなりました。

——その後、J1 ヴィッセル神戸の経営にも関わられますね。

**利重** ヴィッセル神戸が、神戸市から楽天の創業社長である三木谷浩史氏の個人会社に事業譲渡された際に、その前後の移行期間フェーズのマネジメントに中心的に関わりました。行政から新進ITベンチャーへ経営権が移るというだけで関係者にとっては大変な地殻変動だったと思うのですが、更に対象が一般的な事業とは異なるプロサッカークラブ事業ということで、とても勉強になりました。

のっけから、2002 年日韓ワールドカップで大

活躍したトルコのイルハン＝マンスズを連れてきて世間は大騒ぎとなりましたが、獲得交渉は大変でしたね。イスタンブールまで交渉に行った際は、余りに吹っ掛けてくる先方代理人のやり方に理詰めで抵抗しましたが、「お前とは話がしたくない。イルハンが欲しいなら他の人間をよこせ」と交渉の場から外されてしまったんです。イルハンは結局チーム合流後は鳴かず飛ばずで契約途中で帰ってしまったんですが、今までの常識が全く通用しない、とんでもない世界だという洗礼を受けた感じでした。

### FCバルセロナとの 出会い

——楽天ではJクラブ以外に欧州のクラブともお仕事をされたとか。

**利重** そうですね。楽天で印象に残っている仕事の一つとしては2007年のバルサカードでしょうか。楽天カードは楽天が買収する前の時代から、プロ野球、Jクラブ、アーティストなどと提携カードを作成、カードの発行枚数を増やすマーケティング施策に取り組んでいました。そこでヨーロッパのサッカークラブと提携するのも手だよねと自ら画策しました。当時の日本は海外クラブのプレシーズンマッチが全盛期でしたので、毎夏いろんなクラブが来日していました。レアル・マドリードやマンチェスター・ユナイテッド、リバプールにFCバルセロナ、バレンシアCF、ACミラン、インテルなど、本当に花盛りでした。

——そのなかでFCバルセロナに決めたポイントは何か。

**利重** 自分が持つ様々な伝手を使って各クラブにコンタクトを試みたんですね。その中でバルサ（FCバルセロナ）が一番話のできる相手だなと。対面であったフェラン＝ソリアーノ氏やジョアン＝ラポルタ会長はまさに自分と同世代で、キャリア的にも同じようなバックグラウンドを持っていたので、サッカー的な部分はともかく、ビジネス、マーケティングの観点で最も話がスムーズに出来る相手だったんです。

当時バルサ自体がロナウジーニョ選手を獲得、単にサッカーの戦績が向上しただけではなく、ビジネス的にも整備されていた時期でした。楽天という会社との相性も良く、バルサのスローガンで“mes que un club（メスカ ウン クラブ ＝クラ

ブ以上の存在）”というのがあるじゃないですか。そこは響いたみたいで、楽天も一時“more than company”という言葉を会社のスローガンとして採用していた程です。

### 名門サッカークラブでの グローバルな仕事

—— 2017-18 シーズンから楽天はバルサのメインスポンサーとなりました。そして、2018年にはバルサを代表するスーパースターの一人、イニエスタがヴィッセル神戸に入団することになりました。そのストーリーはまさにここから始まったのですが、きっかけは利重さんが作られたのですね。さらにこの時のバルサ副会長、ソリアーノ氏との出会いが、現在のお仕事に繋がっていると聞きました。

**利重** バルサカードが契約締結して、お祝いパーティーが開かれました。場所は日本橋のカタルーニャレストランでした。フェランも出席したのですが、その時のお店の女性マネージャー（カタルーニャ人）が現在のソリアーノ夫人なのです。ここでの出会いが馴れ初めとなったのです（笑）。なのでご夫婦は大変な親日家で、個人的に親しく交流が続いています。

——そこからフェランさんとお付き合いも深まっていたのでしょうか。

**利重** フェランはその後ラポルタ会長との経営方針の違いにより、バルサを辞めて航空会社の経営トップに就任するのですが、その間「ゴールは偶然の産物ではない」というサッカービジネスの教科書、サッカー版「マネーボール」と称される名著を書き上げました。日本でもどちらかというビジネス書として打ち出すことで反響を呼んだのですが、そのプロモーション活動の戦略策定のレベルから加わって個人的に大いに協力させてもらったんですね。お陰様でこの本は本国スペインを含め世界中のどの国よりも日本で最も多くの部数を販売することとなり、私とフェランとの信頼関係も大いに深まることとなりました。

—— CFGにはどういう経緯で加わるようになったのですか。

**利重** 2012年にフェラン・ソリアーノがマンチェスター・シティのCEOに就任したのですが、その際、彼はシティの経営トップになる条件として、オーナーであるアブダビの王族たちに、単に

マンチェスター・シティのCEOになるのではなくて、バルサ時代に志半ばで頓挫したグローバル・フランチャイズモデル、つまり「シティ・フットボール・グループ構想」を推進していくことを絶対的な就任条件の一つとしていました。なので、その後マンチェスター・シティがヤンキースと合併でニューヨーク・シティFCを創り、豪州で既存のクラブを買収、リブランディングしてメルボルン・シティFCを立ち上げた話を聞き、「フェラン、いよいよ始めたな。」と思いながらみていた訳です。

当時は次に中国で新たにシティ・ブランドのクラブを加える噂が飛び交っていたこともあり、私からもフェランには「中国ではなくて日本で一緒にやろうよ」と具体的なクラブを候補に挙げながらラブコールを送っていました。そんな中で、2014年の初めだったでしょうか、フェランから返答があり「どこのクラブとは言えないが、具体的に進みつづける案件がある。Toshiはどう思う？ プロジェクトが進行する暁にはdue diligence的な役割をお願いできないか？」との依頼を受けました。

その案件がCFGと日産&横浜マリノスのディールだったわけですが、無事案件も成約し、当初は個人のコンサルティングベースで関わり始めた話が、2014年11月にはCFGの日本法人を設立するに至り、私自身も代表に就任したというわけです。

—— CFGに入った理由、その際掲げていた目標についても聞かせて下さい。

**利重** プロサッカークラブのグローバル・フランチャイズというビジネスモデルが世界初の斬新なもので、是非その内側でチャレンジしてみたいという思いや、単純にフェランともう一度一緒に仕事をしたいというのが、CFGにジョインすることに決めた大きな理由の一つではありました。

一方で、「footballista」でも常々発信していることですが、近年とみにサッカー後進国である日本の成長スピードが、サッカー先進国の欧州に比べて相対的に劣後してきているため、結果として、両者の差はむしろ開く方向にあるのではという危機感を持っており、実際に欧州サッカービジネスのど真ん中に身を投じることで、何かしら突破口を開きたいという思いもありました。

それからほぼ4年が経ちましたが、CFGの確

固たるビジョンと、そのビジョンを実現するために邁進する数々の戦略・施策に対しては、手前みそにはなりますが感心することが非常に多く、そのベスト・プラクティスを横浜F・マリノスというJリーグのクラブを通じて実装、発信していくチャレンジはまだまだ道半ばである、と感じている次第です。

## メインストリームに オリジナリティーを加える生き方

——現役学生や後に続く人のために、この質問をします。利重さんのようなキャリアを築くにはどうすればよいのでしょうか？ 利重さん御自身のなかにその要因があるようにも感じのですが。

**利重** キャリア最初の銀行時代に経験させてもらったアメリカ留学の際に受けた刺激もありますが、あとは血かなと（笑）。高校時代に現状に満足せず、当時はまだマイナーだった読売クラブのユースの門戸を叩いて武者修行したということが、自分のアイデンティティにあるんだと思います。

一方で、東大に入ってア式に入部し、「クラブと学校の部活では、サッカーやチームを形作るコンセプトが全然違うな」と感じながらも、ドロップアウトはしませんでした。それは、自分のなかで東大や運動会ア式蹴球部というメインストリームの力、素晴らしさ、仲間、組織といったものを実感することが出来たからだと思います。そして、単に今ある組織に順応するだけではなく、その中でスパイスの効いた存在になるのが、自分の生きる道ではないかと。徐々にこういった自分なりの居場所を自覚をしていったのがア式での4年間だったと思います。

メインストリームの中でオリジナリティーを出して生きていく。銀行や留学、ITベンチャーでの経験を踏まえ、スポーツビジネスの世界に足を踏み入れた時にも、自分の生きる道として再認識し、力を蓄えてきたつもりです。

## ア式の後輩たちにも スポーツビジネス界で頑張ってもらいたい

——ヨーロッパやアメリカのサッカービジネス事情もよくご存じである利重さんには、現在の日本はどう映っているのでしょうか。

**利重** 例えば、欧州ではファンにとってのロイヤ

ルティの対象はクラブが中心であるのに対し、日本ではまだまだ選手や監督が一義的な対象となることが少なくありません。その影響もあってか、日本のクラブでは選手の入替えや売買に対して及び腰で情緒的な対応が散見されますが、欧州では選手編成に関して、アセット・マネジメント的な考え方が定着しており、直近のチームの戦績を向上させることと、将来の価値を高めることを同時に実現させるためのポートフォリオを組むことが明確になっています。

今の自分には、ただ欧州の最前線を知っている評論家として日欧の違いを論うのではなく、CFGの中に身を置き、グループ傘下にある横浜F・マリノスと言うクラブを通じて、時には日本のムラ社会的な掟に抗い、短期的な戦績については辛抱しながら、大局観を持ち、明確な戦略を施行しながら中長期的に結果を出し続けていくことで、日本のサッカー界に楔を打ち込みたいという狙いを持っています。

実際の仕事の場面では、つつい「ここは日本だから」「日本ではそういうやり方は馴染まないから」なんてことをマンチェスターの人間に一生懸命説明、弁解しようとする自分がいたりしますが、そんな時はいつも彼らから「サッカーはグローバルなスポーツ」「日本が世界で戦いたいと思うのならば、今はそうでなくても、いずれ必ずグローバルのルール、慣習に則した対応を取らざるを得なくなるよ」と反論されますね。

サッカーはグローバルに展開されるスポーツとビジネスの総合格闘技です。そして、その傾向は益々強まっていくでしょう。サッカーが上手い人だけでなく、政治家、官僚、法律の専門家、お金の専門家、交渉のプロ、そして投資家、大富豪、パトロン、スポーツマーケティングを活用する事業主、などなどありとあらゆる人材によってこの世界は構成されています。日本がグローバルに戦っていくためには、すなわち日本という国が世界でその存在感を維持し、向上

させていくためには、優秀な人材がこのいずれかの役割を果たしていく必要があります。

自分のようにプロサッカークラブでキャリアを積みだけではなく、協会やJリーグ、UEFA、AFC、FIFAなどの国際機関、弁護士、税理士、国際審判員としてでも様々な活躍の場があり、東大ア式の後輩たちには、こういった様々な分野に国際的な視野を持って是非飛び込んできて欲しいですね。

## これからのスポーツのキーワードは 『グローバル』

——海外のビジネス最前線で経験を重ねられた利重さんですが、これからのサッカービジネスの世界では何が大事になってくるのでしょうか？

**利重** サッカーが世界で一番盛んな競技であることに疑問を挟む人はいないと思いますが、アメリカや中国、インドといった巨大な人口を持つ国々でもその人気は如実に高まっており、サッカーは同時に世界で一番成長率の高いスポーツでもあります。

その意味では、最近よく使われるようになった言葉ですが「グローバル」というコンセプトが益々重要になってくるでしょう。グローバルとローカルの両方にアプローチすることが大切であるという意味ですが、Jリーグのようなローカルな取り組みだけでなく、ローカル、ナショナル、グローバルへの取り組みを日本でもできるようにしていきたいです。「東京ユナイテッドFC」は大



世界的なシティフットボールグループでグローバルに活躍する利重氏。ア式蹴球部の後輩たちが、スポーツビジネスの世界に挑戦するのを期待している。

都市型クラブとしてその先駆けでもありますし、「footballista」を通じて世界のサッカーの最先端を伝えていき、「東大ア式」では将来のリーダーを育成、「御殿下サッカークラブ」では沢山の子供たちがサッカーを好きになるよう手助けをしていく。自分の日々の活動もまさに「グローバル」と言うコンセプトが強く反映されたものになるよう常に意識しています。

### 生涯サッカーに 携わって行って欲しい

——現役やこれからの世代に投げ掛けたい言葉は何でしょうか。

**利重** サッカーを通じて色んな自分のキャリアの築き方、社会との繋がり方があるんだよ、と今後も伝えていきたいですね。そして繰り返しになりますが、一人でも多くの後輩たちにスポーツビジネスの世界に飛び込んできてもらいたいです。また、たとえスポーツビジネスの世界に入らなくとも、例えば、自分の子供がサッカーを始めることがきっかけで、コーチや審判を引き受けたり、街クラブの運営に携わって地域コミュニティに貢献したりと、様々な形でサッカーと付き合い続けて行って欲しいと思います。

現役時代にア式部長だった西本晃二先生と出会い、すべてのヨーロッパ言語を自由自在に操り、

文学、歴史、音楽、宗教といったオールラウンドの文化、教養を身に纏う中でサッカーをプレーし、語る先生の姿に憧れてこそ今の自分があると感謝しています。また、LB会の活動では、大先輩の安達二郎さんの導きでより積極的な役割を担えることとなりました。日産自動車サッカー部初代監督である安達さんとは、自分がその後マリノスの仕事をするようになってから頻繁に日産スタジアムでお会いするようになり、そのほか沢山のア式の先輩・同期・後輩の皆に支えられて自分の活動は成り立っています。糧をつなぐという意識のもと、自分もア式のコミュニティには語り尽くし難いほどの思いがあるので、それは一生拘って続けていきたいと思っています。

サッカーが好きだからア式に入っているわけだし、これからもずっとサッカーと関わりながら生きて行って欲しい。サッカーの持つ奥深さ、サッカーの持つ力、あらゆる人と繋がるサッカーのチカラに気づいて欲しいです。サッカーというのは、男女間、世代間、国籍を超えて、人種を超えて、すべての間を取り持つ役割を担ってくれる。ア式に関係するすべての人が、生涯サッカーに携わっていつてくれたら嬉しいですね。

2018年4月23日、

シティフットボールジャパン・日本オフィスにて

聞き手：上野直彦

東大卒初めてのJリーガー誕生

## 誰も挑戦したことのないことに 挑戦する！

久木田紳吾（平成23年卒）

私は東大ア式蹴球部平成23年卒の久木田紳吾と申します。2010年には主将を務め、大学卒業後の2011年にファジアーノ岡山に入団しました。2012年には松本山雅にレンタル移籍、怪我で苦しんだ時期もありましたが、現在はザスパクサツ群馬へ完全移籍し活動しています。福島智氏の「誰も挑戦したことのないことに、挑戦すること



提供：ザスパクサツ群馬

こそ価値がある」という言葉に背中を押され、今の自分があると思っています。

## プロになると決意したのは、 東大の入学式でした

私は高校まで熊本で育ちました。高校受験の時に、サッカー強豪校である大津高校と進学校である熊本高校の2校で進路を悩みました。でも、その時は自分のサッカーに自信がなく、大津高校で埋もれてしまうのではないかと不安があり、熊本高校に進学しました。しかし、サッカーへの気持ちは捨てきれませんでした。熊本高校からプロにはなれなかったのですが、その時に勉強もコツコツ頑張っていたので東大に合格することが出来ました。その東大の入学式で、全盲ろう者で初めて教授になった福島智氏が今までのご自身の苦労されたことなどを話されて、

『誰も挑戦したことのないことに、挑戦することこそ価値がある』

と新入生へ伝えました。その言葉には本当に鳥肌が立ちました。私は1回しかない人生、プロを目指してみようと決意しました。

サッカーへの意欲が高まっていたのは、受験でサッカーが出来ない時期、勉強しかしてなくてサッカーから離れていたことも一つありました。それからア式蹴球部に入部、思ったよりもしっかりとした組織だなと感じました。熊本から出てきて全く何も知らない状況だったので、サークルみたいなものなのかなと、正直ナメていたんですね。しかし、能力の高い選手もたくさんいて、その時は東京都リーグ2部だったんですが、私が3年生の時に1部へ上がりました。ポジションは高校生の時からボランチで、1年生の時は同じボランチでプレーしました。入った時からスタメンで出場させていただき、2年生の時はフォワードになりました。プロになるんだったらボランチだと結果が出にくいので、フォワードという位置で点をとって活躍したら一番目立てると思ったので、フォワードをやりたいと言いました。ア式蹴球部に入った瞬間から、当時のキャプテンやコーチ、監督にも「プロになりたいです」という思いを伝えました。それが18歳の時です。

## 挑戦の始まり ～ファジアーノ岡山へ加入

プロになることは大学1年生の時から決めていたので、就活は一切していません。大学2年生の時にOBである石田金次郎氏にプロになりたいと言ったら、鹿島アントラーズの練習に特別に参加させて頂きました。その当時アントラーズは3連覇していたので、すごくビビりながら練習に行ったのですが、これが思ったよりやれたんです。紅白戦で点をたくさん点を取って目立ったわけではないのですが、自分的に予想していたよりも普通に練習に入れた感覚がありました。その時のコーチに、もっとこうしたらいいのではなどアドバイスを頂きました。練習生はある意味そこが就活の場ですね。でも、そこから東京都リーグに戻って2部で戦っていてもスカウトの人は全く見に来てくれないのです。ですから自分で、自分のプレー映像が入ったDVDを作成して、当時東大卒でサッカーの代理人をされていた柳田佑介さんに複数のクラブに渡してもらいました。そこからもう一度アントラーズの練習に参加させて頂いて、その他のクラブにも練習参加しました。

4年生の8月です、岡山から一番最初にオファーして頂きました。水戸と熊本も可能性はゼロじゃないと思っていたのですが、岡山でやってみて影山雅永監督が自分に合っているなと思いました。プレッシングも前からどんどんいってアグレッシブなサッカーをやられていた監督でした。私は技術だけを見られていたら多分プロにはなれてなくて、ひたむきな姿とか献身性や運動量などで評価してもらえました。岡山での練習参加が終わって一週間後には契約書に判子を押していました。やっと夢が叶った瞬間でした。家族も周りのみんなも喜んでくれました。そしてメディアには“東大卒初Jリーガー”というふれこみで大々的に報道してもらいました。

厳しい現実も待っていました。サッカー界は狭いので入団すると自分の先輩や知り合いがいるのが普通なのですが、僕にはそういう繋がりがなく、最初はコミュニケーションを取ることで苦労しました。Jリーグの試合は「特別指定選手」で大学の時にデビューしたので、チームに合流した瞬間から周りの選手はライバルです。そこは部活とは

また違った感覚がありました。でも、当時はもう無我夢中でやっていました。初めての試合はアウェイ・栃木SC戦でしたが、後半の10分くらい出場させてもらって一生懸命ボールを追った記憶しかないです。結果は1-0で勝利しました。

### 誰よりも早く来て 最初にウォーミングアップを

試合が終わると自分のプレーの分析もしました。私の意識が変わった瞬間がありまして、それはアントラーズの練習参加に行った際、クラブハウスから他の選手と同じタイミングで出ていったんです。そしたら、元アントラーズディフェンダーだった奥野僚右コーチから「お前は本当にプロになりたいのか。プロに本当にになりたいのなら、就活なんだから一番初めに出てきて、身体を暖めて、プレーで思いっきりアピールしろ!」と。ガーンときてその瞬間に意識は変わりました。正直チームにビビっていて、周りの選手に合わせるだけで目立った行動を取れなくていたのが現実でした。でも、コーチの言葉で吹っ切れました。そこから全部の行動をアピールするようになって、他のクラブに練習参加に行っても一番初めに出て行ってウォーミングアップを1人で済ませていました。そしたらオリベイラ監督からもいつでも練習に来て良いよと言って頂けました。本当に奥野コーチには感謝しています。

岡山に入って初年度はとにかくフォワードでゴールを決めないと生き残っていけないと思っていました。最初は途中出場が多かったんですけど、7月に初ゴールを決めることが出来て、そこから夏場にもう1点取り、その次の試合でも得点しました。そして1年目の最後でもう1点決めてシーズンで4点という成績でした。スタメン出場は少なく、スーパーサブ的な位置で1年目は終わりました。

### 松本山雅FCへの 移籍を決断

1年目が終わり2年目には松本山雅FCへ移籍しました。1年目が終わって松本山雅がJ2に昇格する年にオファーをくださって、岡山と契約が残っていたのでレンタル移籍となりました。岡山のフロントとも話しましたが、そのまま岡山にい

たらチームの構想には入っているがスーパーサブという形が多くなると考えました。自分の中ではスタメンで出ること、そして松本山雅の新指揮官の反町康治監督も知っていたので、そういう人のサッカーも吸収したいと思い移籍を決断しました。反町監督は凄く緻密で細かくて、キックオフのやり方から指定がありました。練習も面白かったんです。ところが6月に練習中の紅白戦で膝の前十十字靭帯を切ってしまったのです。これは大変ショックでした。8カ月くらいは怪我の回復とリハビリ生活でしたね。それが治って復帰の年、プロ3年目だったのですが岡山との契約は3年間結んでいたもので契約最後の年でした。ここで復帰をして試合に出られなかったら、サッカー人生が終わりと思い、背水の陣で臨みました。途中出場も多かったのですが、アウェイ・神戸戦で2ゴール決めることが出来てから、ちょっとずつスタメンで使ってもらえるようになりました。そして契約も延長してもらうことになり、とりあえず良かったと安心しましたね。

4年目を迎えようとしていましたが、加入初年度から3年目までは居残り練習はずっと続けていました。ですが私は無理をして怪我をすることが多かったのも、それからは要領よく身体と上手く付き合いながら練習を行うように変わりました。そして4年目、転機の年となりました。ディフェンダーにコンバートされたんです。スリーバックの右でした。ディフェンダーになった一番の理由は、ディフェンダーのポジションに怪我人が続出して、スタメン級の選手まで怪我をしてしまったからです。結局2014年のシーズンはコンバートされてからは全試合にスタメンで出場しました。その年の岡山の結果はJ2リーグで8位で終わりました。

### 岩政大樹選手と加地亮選手との 出会い

2015年に監督が代わり、元日本代表の岩政大樹選手と加地亮選手が加わりました。私は2人の選手に挟まれるポジションだったので、凄く勉強になりました。今までは、とにかくひたむきに献身的にフォワードでプレーしてきて、ディフェンダーでもががつボールを奪いにいく、例えるなら本能的なプレーをしていました。ある意味、

東大っぽくないサッカーでした。でも、岩政選手と加地選手が来てからサッカーはこんなに深いのかと感じたんです。全体を見て、考えて、サッカーをやっていたんです。私も考えていたつもりでしたが、心にも技術的にも余裕がなく、ただがむしゃらにプレーしていました。でも、考えてサッカーをするように変化していきました。具体的には自分のポジショニングやボールをもらう位置、ボールの置き所などほぼ全部が変わっていきました。2人の選手は高圧的な人柄ではなく、今でもすごく良くしてくれています。岩政さんが東京ユナイテッドFCに来られたのは面白い縁ですね。

### 再び怪我を経験し、 ザスパクサツ群馬へ

2016年のシーズン、開幕した週に右のアキレス腱を切ってしまい試合出場数はゼロで終わりました。しかも、その年は岡山と契約が切れる年でしたが何とか1年延長してもらいました。またも背水の陣ですよ。2017年は20試合ほどはスタメンで出場出来ましたが、ここで契約満了となりました。正直、自分の中では延長はあるだろうと思っていたんですが…かなりショックでした。怪我が重なりましたが自分的には「もっと見てくれ！ まだやりたい！」という気持ちだけが残りました。

そんな時でした。岡山で3年間一緒にやっていた布啓一郎さんが、今年からザスパクサツ群馬の監督になりました。そしてそのザスパからオファーをいただき、自分としてももう一回這い上がってやるという気持ちで完全移籍しました。ザスパはJ3に落ちてしまったので、今はJ2に上げるためだけに頑張っています。

ザスパ自体は、監督、GM、社長も全て変わったんですが、僕としては0からのスタートなので、今のところ気持ちよくやれています。自分の中ではディフェンダーでリーダーシップを発揮することに、とてもやり甲斐を感じています。今は周りの選手を動かすのが楽しいですね。「伝え方」や「発信力」を増すにはどうしたらよいかなどを考えています。キャプテンは別にいるのですが、自分なりのスタンスでチームを、戦い方をまとめるようなやり方ができたらいいなと思っています。

自分がとにかく集中して下手なプレーをせずに、プレーヤーとしてしっかり信頼できる人だっているのをまず理解してもらわないと、プロの世界なので話を聞いてもらえません。とにかくそれが土台としてあり、プラスαとして言い方や普段の態度、練習の態度だと思っています。やっぱり普段から真面目にやっていて、自分よりサッカーに対して真摯に取り組んでいる人の言葉は自分も聞きたくりますね。

### 100周年を迎えたア式。 次に目指すべきところへ

ア式の時はひたむきに献身的にプレーしていました。今は落ち着いて全体を見ながらプレーする楽しさを身に付けました。入学式でプロになると決意し、4年間思い続けて頑張って夢を掴み取れた経験は、今も自分の大切にしているものです。

卒業してから本当にいろいろな試練がありましたが、今もJリーグでプレーできているのはア式蹴球部の経験があったからなのは間違いないです。今後は、サッカー界やスポーツ界で何か役に立つことがしたい、それも自分が生き生きと役に立っていると感じながらやりたいという思いがあり、どのように形にしていくなか試行錯誤しています。

最初に前十字靭帯を怪我した時、リハビリをしている時に医者とのコミュニケーションをとる機会が増え、医者になりたいと真剣に考えたこともあります。岡山と契約満了になり一瞬そちらの道も考えましたが、妻もいて家庭を築いて行く中で、少なくとも4年間学生をもう一度するのは違うかなと思い、そちらには進みませんでした。医者



提供：ザスパクサツ群馬

になりたいと思ったのも、特にサッカーに関係していて怪我で困っている人を助けたいという思いからでした。やはりサッカーとは関わり続けたいと思っています。

今はサッカーの経営、チームの経営にも興味があります。実際、経営の本を読んだり、経営に携わっている方と会ってお話を伺うこともあります。その他にも、大学の先輩でサッカー以外で働いている人からビジネスの話を聞くことが自分のためにもなるし楽しいです。ただ、現場でボールを蹴る仕事は簡単には辞められそうにありません。とにかく今は全力をもってザスパでプレーすることを一番大事にしたいです。それが後で全て繋がると考えています。ある種、ピッチでのマネジメント、経営もマネジメントです。特にディフェ

ンダーなんて予期せぬ展開の連続です。それをどう判断するかが試される。ここまで考えるようになったのも、東大ア式での経験やプロでのこれまでの経験があったからです。

サッカーは本気で勝ちに初めて学べることが多いと思うので、やっぱり上を目指すこと、結果を出すことは大学サッカーでも重要だと思います。それを土台として試行錯誤を繰り返すことが絶対糧になると思います。

サッカーは結果を出すことが一番難しい、でも、それが絶対良い経験になります。私もスポーツ界にいますので、今後も結果を求めて日々プレーしていきたいです。

2018年3月5日、東京・日本橋にて  
聞き手／構成：上野直彦

スポーツビジネスの最前線で

## 卒業生が スポーツビジネス業界で 働ける環境を実現させたい！

添田隆司（平成 27 年卒）

### いつもア式蹴球部の誇りを この胸に

私は東大ア式蹴球部平成 27 年卒の添田隆司と申します。大学卒業後には、J リーグの舞台を選手として経験し、今は 25 歳という年齢にも関わらずプロスポーツクラブの経営に携わらせて頂いています。プレーにも、経営にも、いつも全力で挑んでいますが、何よりいつも大事に、こう思って行動しています。「東大ア式蹴球部の誇りを胸に——」。

### 「スポーツビジネスで 新境地を切り拓いてみせる！」

現在、学生時代の蹴球部での経験を活かしてスポーツ X 株式会社というスポーツビジネスの会



社に勤務し、関西サッカーリーグ 1 部に所属する『おこしやす京都 AC』の経営企画に携わっています。日本のスポーツビジネス業界をもっとワクワクする業界にしたい！ スポーツを通じて日本や世界を幸せであふれさせる！ そんな想いで業界に飛び込みました。また、将来的には会社での経験を活かして、「スポーツ×勉強」の両立ができる人材を数多く育てていければと構想しています。何故なら、これこそが東大ア式蹴球部が再び関東リーグ 1 部の舞台で活躍することへ繋がり、ア式の高い競技レベルでの活躍が競技偏重の日本スポーツ界を良い方向へ導くと信じているからです。今回の 100 周年記念誌のコンセプトが“これからの 100 年に向けて”であると聞きましたが、これは「東大ア式蹴球部出身の人材がスポーツビ

ビジネス界を引っ張っていく100年」となるとも言えるのではないのでしょうか。ア式蹴球部出身の人達が、それこそ自分のように若いうちから次々とスポーツビジネス界で活躍すると、本当に面白いスポーツ界になるのではないのでしょうか。私自身は、その一助になれるよう毎日を精一杯頑張っています。

## 人生最大の決断

### —— 選手としてJ3・藤枝 MYFC に加入

2014年12月。この年は自分の“サッカー人生”で忘れられない年となりました。生きてきて最大の転機となったからです。当時は今のようにスポーツビジネスに関わるとは夢にも思っていませんでした。というか、そもそも興味すらなかったからです。

その頃、既に就職活動を終えて大手商社に内定が決まっており、部活を引退して慌ただしかった時間から束の間の休息の日々でした。そんななか、大学3年生の時までヘッドコーチとして教えて頂いていた林健太郎氏を通じて、J3（プロリーグ3部）所属の藤枝 MYFC への練習参加の誘いを受けたのです。「え!?! 僕が…」と最初は感じましたが、「自分の実力がJリーグのカテゴリでどれくらい通用するのか」と興味半分で練習参加することにしました。そして練習後に頂いたのが、選手兼社員として藤枝 MYFC に加入しないかというお話でした。あまりに突然のご依頼でしたので、お答えするまでに2週間の期限を頂きましたが、その間は相当悩みました。なぜなら練習参加で自分の実力がチームの中で断トツのビリであるという自らの実力を目の当たりにしたからで、仮に加入した場合は相当苦しい思いをすると感じたからです。

今だからいえますが、正直不安な気持ちしかありませんでした。でも僕は加入を決意しました。理由は主に2つです。

1つ目は一生に一度のチャンス、普通はやりたくても出来ない挑戦の機会が目の前にあった場合は思いきってTRYしたかった。2つ目は、仮に私が今までの人生で最適な手順を踏んでいれば、J1（プロリーグ1部）でも活躍できる選手になったのかを検証したい気持ちがあったのです。昔から“最適な手順を踏めば誰でもJリーガーになれる”という考えがあり、自分自身で経験してその

仮説を検証したいという気持ちがありました。

裏話ですが、当時の藤枝 MYFC 代表の小山社長の考えで「東大サッカー部の主将が本気でサッカーに打ち込めば上手くなれるのではないか」という実験をしたかったというのが7割、引退後にスポーツビジネスの道に引き込みたかったのが3割だったそうです。つまり東大ア式蹴球部の主将であれば誰でもよかったそうです（笑）。事情は何となく察してはいましたが、加入してしまえば後はこちらの頑張り次第です。思う存分この機会を利用して頂こうと「エイ、ヤー」で思いきって飛び込んでみました。

考えてみれば、私はたまたま選択肢を与えられた上での加入だったのですが、例えば久木田紳吾先輩（J3・ザスパクサツ群馬 平成23年卒）のように自分で道を切り拓き、Jリーグの舞台で長く活躍されている選手は本当に心から尊敬しています。

## Jリーグと大学サッカーのレベルの差、成長戦略の差

藤枝 MYFC に加入後は予想通り、いえ、それ以上に苦しい時期が続きました。技術、フィジカル、判断のスピード…すべてのレベルが大学時代より数段上で、練習ではミスだらけ。求められるフィジカル強度は高く、普通に練習を終えるだけでも相当に疲弊した記憶があります。当初一番感じたのは、大学時代までに身につけていた技術よりもレベルを数段上げて技術を捉えなおさなければいけないこと。例えば大学時代にはパス & コントロールといえ、多少動きを入れますがほとんどスタンディングの状態です。正確に止めて蹴るを実行していました。ところが藤枝では、かなりのスピードを持って動いた中でのボールコントロールを要求されます。整数で捉えていた世界をいきなり有理数で捉えなおさなければいけない感覚でした。大学4年時にはもうこれ以上選手としては成長出来ないかと思っていたものですが、それはとんでもない間違いでした。藤枝ではダメ出しも本当に多かったですが、逆にいえば選手としての成長の可能性は無限大に広がっていることにも気づかされました。

2015年の夏頃です。J3と自分のレベルの差異を把握でき、練習とリーグ戦に少しずつ慣れてき

た段階で、何とか現状を打破したいと、自分の成長戦略を考えることにしました。

戦略とは「技術は多少捨ててでも、体力とスプリント回数で勝負する」というもの。自分自身の能力を分析すると、J3 レベルでは技術面で圧倒的に劣っていて、スピードやパワーなどフィジカル面は平均レベル、唯一強みとして勝負できる部分は体力面でした。なかでもスプリントは繰り返せる能力はありました。藤枝 MYFC が目指すプレースタイルである前からプレッシャーをかけて主導権を握るサッカーと整合していたため、この強みを鍛えて勝負しよう、強みができれば他も自然と引き上げられると結論付けたのです。

まず、体力面では立命館大学（東大卒）の田畑泉教授が体系化された「タバタ式トレーニング」を導入、20 秒全力でバイクを漕ぎ 10 秒レストのセットを計 8 セット行うかなり厳しいレーニングを週 3 回行いました。その甲斐あって、2015 年の終盤の試合でスタメン出場を果たし、チームメイトからは「まさかここまで上手くなるとは思ってもなかったよ」との言葉をかけて貰いました。これは本当に嬉しかったです。

そして 2 年目以降です。技術面の部分でミスが出てしまい出場機会を減らしました。さらに 3 年目の夏、再びコンスタントにメンバー入りし試合に出場するところまでこぎつけました。加入した 1 年目こそは選手層もそこまで厚くなく、チーム自体も 13 チーム中 11 位と下位でしたが、2 年目以降は選手層も厚くなりチームも中位となって、その中で自分の立ち位置を確保できたことは大きな自信となりました。断トツ最下位の選手から J3 のカテゴリで試合に出るまでに成長出で



たことで、「最適に積み重ねれば J リーガーになれる」という自分自身の仮説にある程度確信を持てるようになりました。

### 選手兼社員として

#### スポーツビジネス面での挑戦も始まった

藤枝 MYFC には選手兼任社員として加入していたため、午前中は練習し午後は仕事をする毎日を送り、仕事面では比較的早い段階から経営に携わらせて頂きました。当初はまったくスポーツビジネスに興味がなかったため、選手として挑戦の意味合いで加入していたのですが、働いているうちに「ここは面白い会社だ!」と気づき始めたのです。クラブの内部から選手と社員の両面で業界を見ると、現状のスポーツビジネス界はとても課題の多い業界だと思われましたが、ただ同時にスポーツビジネスには無限の可能性があり、この会社であればスポーツビジネス業界の現状を変えて、もっとワクワクする業界にできると強く感じ出したのです。

藤枝 MYFC の歴史を紐解きますと、2009 年に設立、2014 年に J リーグ入り、設立から 5 年での J リーグ入りは史上最速、創業会社としては史上初です。しかし、目指すところはクラブを強化していくだけではありません。スポーツビジネスの最前線で培った経営ノウハウを活かし、プロスポーツクラブを日本中や世界につくる「プロスポーツクラブの多店舗展開」構想の実現にあります。教育や地域愛の源泉、あるいは各地域の夢と希望、コミュニティづくりや新しい価値の創出など、プロスポーツクラブの経営をしていけば地域に大きな価値をもたらす存在となり得ます。プロクラブを日本や世界につくり、適切に経営していけば多くの人を幸せにできると真剣に考えています。

現在は藤枝 MYFC に続き二例目で、京都において関西社会人リーグ 1 部「おこしやす京都 AC (旧: アミティエ SC 京都)」の経営を始めました。私自身も 2017 年 9 月にチームを JFL に昇格させるために選手兼社員として移籍しましたが、ただ、その年は残念ながら最後の最後の試合で敗退してしまいました。この京都を一刻も早く J

リーグ入りさせ、2例目の経験を積み上げ更にステップしていくべく、私は同年に選手引退を決意しました。まさにア式蹴球部が記念すべき100周年を迎える2018年に、全面的にスポーツビジネスへと切り替えたのです。

### サッカースクール経営を アジアで展開する

弊社はクラブ経営以外にも事業があります。キッズスクールを経営しており、これが事業面の強みとなっており、生徒数は現在国内に約10,000名、海外ではベトナムに約2,000名、シンガポールに約500名にのびります。キッズスポーツスクールとしては業界トップ3、ベトナムでは1位と（2位は英国プレミアリーグのアーセナルのサッカースクールで約300名）なっています。将来的にプロクラブを各地に設立していくにあたり、スクール事業が土台となる形が取れるため、キッズスポーツスクールは大きなアドバンテージとなります。

私が入社する前、ほとんど会社の事業を考えずに飛び込みましたが、このようにスポーツビジネス界を変える可能性のある会社で本当にラッキーだったと感じています。私自身はJリーグの舞台を選手として経験、かつ20代のうちからクラブビジネスの中枢に関わらせて頂いていますが、この経験こそが将来のクラブ経営やスポーツビジネスの発展に大きく生かせると考えています。

### 肌で感じた日本サッカー界の課題 スポーツビジネスの課題

日本のサッカー界に飛び込んで、今の日本のスポーツビジネス界は課題だらけかと思ったと、初めにお話ししました。

1つは、クラブビジネスの片輪である「クラブを勝たせる＝強化」を担保する経営的工夫がまだまだ少ない点です。見えやすいところというあまり戦略性が感じられない監督人事です。長期的な目線を持たず、その時点で成績不振で解任されて市場に出ている監督を、選手時代の実績や1つ上のカテゴリで指揮していた実績のみで就任させるケースが時折り見受けられます。見えづらい所ではありますが、そもそもクラブを強化するための試行錯誤のノウハウが監督にすべて蓄積される構造的な問題もあります。監督が現場をブラック

ボックス化して現場特権を享受してしまう場合もあり、どのように指導して、どのような結果を出せたのか、あるいは出せなかったのかという知見が、監督にのみに貯まってしまいます。本来、そのような知見はクラブにこそ貯まり、クラブが積み上げていくべきものなのです。監督もクラブが縮小してしまうと指揮を執ることができないため、本質的には監督も積極的に知見を報告して共有する必要がありますし、経営陣も最低限のサッカーリテラシーを身に付けて、ブラックボックス化を防ぐ工夫をする必要があるはずです。

また、監督人材の不足も大きな課題です。日本サッカー界を見渡しても「勝たせられる監督」は一握りなのが現状ではないでしょうか。本来、監督は選手20名以上を一度にマネジメントするため、マネジメントそのものに対する知見と経験が必要不可欠です。しかし現状では、サッカー選手を引退した後にそのまま指導者を志して、マネジメントを学んでいないケースもあります。実際に選手としてサッカー界全体を見た時に、選手をマネジメントできず試合出場の人事権を最適に行使できていない場合も見受けられました。さらに近視眼的な対処療法的な練習も少なくありません。前節の試合の敗因が、引いて守っていた相手を崩せなかったことにあるため、その対策に終始してしまうケースなど、サッカーの全体像から逆算して積み重ねるという発想がまだ少ないです。ビジネスの世界では必須である戦略的思考、逆算思考がサッカーの現場にはあまり根づいていません。これはクラブ経営の最前線に立たせて頂いて感じる課題でもあります。

さらにクラブの経営人材不足も大きな課題の一つです。Jリーグクラブの社長はほとんどが大企業からの出向であり、黒字のクラブも親会社からの補填やスポンサー収入を除くと大幅な赤字になってしまうクラブも少なくないのではないのでしょうか。経営面でもしっかりと回せているクラブは実際どのくらいあるのでしょうか。現場に携わって感じたのは、なかなか優秀な人材が入りづらい環境だという印象です。そもそもポストとしてクラブ間で人材が還流していて新しい人材が入りづらい状態もあり、クラブからクラブへの転職と元サッカー選手がクラブへ入社するケースなどがほ

とんどで、新しい才能が入る余地が極めて少ないのです。仮に入ったとしても重要なポストは出向や転職の人材で占められており、中枢で働く機会には少ないといえます。さらに残念な現実ですが、給与水準がまだまだ低い業界でもあります。いくらやり甲斐があると意気を感じて入った業界でも、もっと給与水準を上げていかなければ優秀な人材の選択肢には入りません。私自身、今の会社が面白いからスポーツビジネス界にいますが、給与水準などの条件を考慮すると現状としては厳しい業界であるかもしれません。

他にも様々な課題があり、スポーツ界の中に入って、今以上に変えていかなければという思いを強くしました。今働いている会社はプロスポーツビジネスの現状を変えていこうと挑戦している数少ない会社の一つです。自分達の力で環境を良くしていき、東大ア式蹴球部の後輩たちがサッカー界やスポーツビジネス界へ飛び込みやすくなる環境づくりを目指していきます。

### 将来に掲げる 3つのビジョン

私個人としては、今後3つの目標を掲げて実現すべく行動していきます。

1つ目が、できればですが20代でJリーグクラブの社長となることです。先述の通りで、スポーツビジネス界に飛び込む若い人材が少なく、挑戦の呼び水となる事例をつくらなければいけないと感じています。そのため私自身が若いうちにスポーツビジネス界でキャリアを切り拓き、一つの事例となれたらと願っています。将来的には、次々とア式蹴球部の卒部生達がクラブの社長になっていけるよう、例えば入社3年目でそれが実現すれば大変面白い業界になるのではないのでしょうか。同時に給与水準も上げていけるように、まっとうなビジネスとしてプロクラブ経営をブラッシュアップして価値を上げていく。今の私のポジションを考えた時、これは挑戦していかなければいけない目標であることは間違いのないでしょう。

2つ目ですが、サッカー経験のない経営者や経験の浅い若手の監督でも「クラブを勝たせる＝強化」を積み重ねられる仕組みづくりを構築することです。現在、おこしやす京都ACでは一部先行して監督と戦術担当と私が話し合っ

ています。クラブが目指すサッカー（プレーモデル）を定義して、達成しなければいけない要素をピックアップする。普段の練習ではどの要素に取り組んでいるかを記録して、全体像を可視化していく。監督自身が複雑なサッカーの全体像のうちどこにアプローチしているかを把握、かつ場当たり的な対処ではなく全体像から逆算した構築を可能としていく。もちろん全体だけでなく、選手個別にも「どう戦力化していくか」という成長戦略を策定していきます。日々の選手個別の練習や、監督・コーチの選手への寄り添い方も可視化していきます。一部の選手に偏って接していないかなどを一目で振り返り、日々の練習に生かせるようにしていく。監督・コーチが選手達の実力を最大限発揮できるようサポートしやすくなる仕組みづくりを進めています。

加えて実際の試合采配の質を担保する仕組みにも挑戦しています。試合で起こりうる課題や試合の流れを事前に予測し、試合を積み重ねていくうちに予測と結果のパターンが積み上がり、試合に起こりうる現象や流れの予測精度が上がるよう取り組んでいきます。

これらの試みにより、経営陣に実態の分からない「強化」を分かりやすく可視化、マネジメント観点からの意見交換を強化できるようになります。外部投資家もわかりづらかった強化が可視化され、より投資しやすくなることにも繋がります。感覚でサッカーを把握している監督や選手は多いですが、それを言語化してさらに細分化、細かい論理にまで落とし込めるようにしています。私自身は一流クラブでプレーしていた選手や監督ほどサッカーを分かっていますし、専門家に比べ仕組みづくりやシステム構築に秀でている訳ではありません。しかし、選手とクラブの両者の間に立てる数少ないポジショニングにいて経験もさせて頂いています。サッカーの「強化」の仕組みを体系化して、日本サッカーを陰からサポートできるなら相当面白い事業になると感じています。

最後に3つ目です。それは“東大卒J1リーグ選手”を育てることです。私自身の人生のなかで、サッカー人はサッカーだけに、進学校の人達は勉強だけに重点を置く傾向に長らく疑問を持っていました。私自身が両方で頑張ったかった時、例えば学校から所属していたユースチームまで長い時

間かけて移動しなければいけないなど障壁がありました。サッカーも好きだし勉強も好きな子どもが、自然と東大に入学して、Jリーガーにもなれる環境を整備していきたい。Jリーグを経験させて頂いたことで、小さい頃から適切なステップを踏めば少なくともJ2では活躍できるようになれるという確信を得ました。スポーツと勉強、どちらも頑張りたい子どもたちの助けになれば、こんな嬉しいことはありません。これこそが東大ア式蹴球部が強くなることにも繋がります。将来的には東大ア式蹴球部が関東リーグ1部で活躍してJリーグ選手が数多く輩出されていく。そんなビジョンを何とか実現させたいのです。社会に出るまで「勉強だけ」「スポーツだけ」でなく「自然とどちらもやる」「どちらもできる」という価値観が生まれてくる社会を実現させたいです。現代の世の中において、東大やJリーグ選手に拘ることはないと思いますが、それでも「東大入りたい」「Jリーガーになりたい」と考える子どもが自然と両方を目指せる環境があるのは、今の日本にはなかった姿です。これは東京大学の卒業生の一人として、強く願うこともあります。

### 東大ア式蹴球部 次の100年へ向けて

今、スポーツビジネスの各所でア式蹴球部のOB達の活躍が目立ち始めました。後輩として、これは本当に誇らしいことです。

シティグループの日本法人代表は利重孝夫氏が

務められていますし、FC今治の代表取締役は矢野将文氏が就任されています。東京ユナイテッドFCも東大ア式を母体として福田雅氏が共同代表として運営されており、白井英介さんはコンサルティングの立場からJ1・湘南ベルマーレの経営に携わられています。

少しずつではありますが、スポーツビジネス界に東大ア式蹴球部OBの活躍の場が広がっています。以前、武田厚・東大LB会理事長とお話をさせて頂きましたが、次の100周年に向けて東大ア式蹴球部の人々が次々とスポーツビジネス界に入っていく、日本のスポーツビジネス界を引っ張って変えていく、ビジネス面からもサッカー界をリードしていく。そんな100年間にできれば素晴らしいですし、本当に面白い展開だと感じております。

私は、その一助となるべく、ア式蹴球部を卒業されたすべての方々がスポーツビジネス業界で働ける環境を実現させ、かつ自信を持って薦められる場所を準備していきます。今後は京都の地で、スポーツビジネスの最前線という場で、このビジョン実現のために精一杯頑張っていく所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

2018年4月8日、東京・世田谷区にて

聞き手／構成：上野直彦



## 卒業生・現役の寄稿 LB

### 途切れなかった縁に感謝

折原一雄（昭和31年卒）

88歳になりました。お蔭様で今でも元気で、周りの迷惑も顧みずボールを蹴っています。

現役のときは、精一ぱい気持ちを込めて部生活を送っていましたが、卒業して社会人になったとき、もうこれでサッカーとはお別れだなと思っていました。まず仕事のことがありますし、当時のサッカーは全くのマイナースポーツだったので、蹴る機会はあるまいと思っていたからです。

#### ●縁が切れたと思っていたら

それが意外な展開となりました。就職先の任地は名古屋でした。4月、入社式が終わって部屋に戻ると外部から電話があったというので、合間をみて連絡すると、先方は全く心当たりのない人。段々聞いてみると、名古屋サッカー協会の理事長だという。用件は、私に地元の代表チームに入って加勢してくれとのこと。「いやー、わたしは下手くそで、そんな選手じゃありませんから」と再三断ったが、先方は「どうしても」と押し問答。結局押し切られ、次の日曜にグラウンドに行くことになった。

もう、サッカーをやることはあるまいと思っていたので、用具一切は東京の実家に置いたまま。その晩、あわてて母親に電話をしてスパイクなどを送ってもらった。切れたと思っていたサッカーとの縁が、こうしてヒョイとつながって、今日に至っています。それにしても、小生のごとき名もなき選手ことを、どうして知ったのか…。

#### ●年寄り世代の世話役で奔走

こうして社会人チームに入れてもらったあと、地元での縁が広がって、大学チームの面倒を見たり、子どものチームを立ち上げたりしていました。名古屋勤務が長く、東京に戻ってきたのは定年間近でしたが、戻ると昔の縁が復活して、間もなく

LBの年寄り世代の世話役をやるようになりました。1990年代初めのころです。

当時、LBの年寄り組が第1回から参加して以降、今日まで出場を続けている主な大会に「東早慶3大学戦」と「スーパーエイジ刈谷大会」があります。3大学は1989（平成元）年に始まり、今年でちょうど30年目。刈谷の方は5年遅れのスタートで25年目です。

3大学戦の発端というのは、旧制年代のOBがリーグ戦で戦った現役当時を懐かしんで、「また1戦交えようじゃないか」と試合をしたのが事の始まりのようです。第1回は慶応の日吉のグラウンドで、そのあと懇親会を近所のそば屋でやったという記録が残っています。

第1回目というけれど、当初は1回限りで、2回以降を続けてやるつもりはなかったようです。その時、たまたまLBはWMW（早稲田OB）に勝ったらしく、後日、酒好きのLBの1人が酔った勢いで、仲の好い早稲田の人に電話をかけ、「どうだ悔しいか、もう1丁やるか」と挑発したところ、「オウ」ということで2回目に及んだと聞いています。

「昔のユニフォームを着てやろう」という申し合わせで、LBの胸マークは「帝大」。当初はよかったのですが、「帝大」のユニフォームはやがて数が足りなくなり、新制の人は追加で作ったのを買わされました。すると、新制世代には帝大のマークに馴染みがないため、「あたしゃ東大を出たけど、帝大は出てないよ」とブツブツ言っている人もいました。

世話役は3大学を10年近く、刈谷を5年ほどやりましたが、メンバー不足で苦勞した時期もありました。刈谷大会のときは、会場に着くやいなや、知り合いのチームに「1人貸してください」と頼みにいったこともあります。大会は当初は牧歌的で、チーム同士でやりくりして掛け持ちする人がけっこういました。LBはしばらくして後輩諸兄がグンと増え出して、今日の隆盛に至っているわけですが、その間、あちらこちらにずいぶん

遠征しました。北はJヴィレッジ、西は京大戦のほか、琵琶湖畔の守山に行ったりしました。

ワールドカップ2002年日韓大会のときには、当時、日本サッカー協会の会長をやっていた岡野俊一郎君を激まそうと、LBとしての壮行会を開きました。ただし本番開催の年では本人が忙しかろうと、前年の1月末、東京・大手町のプリンスホテルで開きました。彼の仲間を中心に、彼がコーチをした世代にも声をかけ約100人の賛同を得ました。関西からの上京組を交えた紅白戦の計画もありましたが、当日になったら大雪。上京組のキャンセルなどがあったり出席者は多少減りましたが、それでも当時のLBとしては記録的な人数が集まり、盛大な激励会となりました。

#### ●みんな仲が好いLBチーム

あちこちのチームのお世話になり、各種大会に参加しながら、その間に感じていたこと、そしてLBの年寄り世代として自慢してもいいんじゃないか、ということがあります。それは全国を見渡して、大学超OBのチームとして、これだけ長い間活動を続けているのは、東大LBだけじゃないかということです。確かに大学OBチームはほかにもありますが、永い間には消えたり復活したり、2校合同のチームもメンバー不足で解散したりしています。

それでは、この活躍の源はなにかというと、それは「LBはみんな仲が好い」という点に尽きると思います。現役の時と変わらぬ友情を保ち、年をとってもサッカーへの思いを燃やし続けているからだと思います。

いつまでもみんな仲好く、ボールを蹴りつづけましょう。

## 見果てぬ夢

新井俊一（昭和40年卒）

今から60年前の高校2年生の時に日比谷高校サッカー部を創設した。私を含めてサッカーをやったこともないし、ルールも何も知らない人間ばかりで、今考えるとまったく無謀な話ではあった。

校庭の片隅でボールを蹴ったりしているうちに対外試合をしようということで、田町の東工大付



筆者・新井

属校との一戦に臨んだ。結果は10対0の惨敗であった。その後も懲りずにサッカーを続けていたが、1年間は対外試合に勝つことができず、部の存続のための部員集めにも苦労した。

1年浪人後東大に入学してすぐにサッカー部に入ったのは、早く知識と技術を身に付けて日比谷のサッカー部を強くしたいという思いからであった。しかし、ボールもろくに蹴れない状況ではボール拾いに甘んじる以外なく、1年間はあっという間に過ぎた。

1年生の冬に次期キャプテンになる梅村氏が、私のような落ちこぼれの1年生を2、3人ずつ、農学部グランド脇にあったサッカー部合宿所に泊まり込みで、ボールの蹴り方から教えて下さることとなった。

私もまずインステップキックを強く正確に蹴ることから始めることにしたが、ボールを蹴るよりグラウンドの土を蹴るばかりでうまくいかない。挙句は足の爪先が腫れあがって、爪がほとんど飛んでしまった。しかし、新しい爪が生えそう頃に正確にキックができるようになった時は本当にうれしかった。

身に付けた知識・技術は日比谷のサッカー部に持ち帰って後輩に教え、夏合宿を終える頃にはみな見違えるほど上手になっていた。

のちに彼らのうち何人かは東大のレギュラーになって活躍しており、その後もその流れは続いて

いたが、程なく学校群制度が導入されて東大受験者が激減して終わりとなった。

2年の時の東大サッカー部は2部で全勝優勝し、入れ替え戦で法大に敗れて昇格はなかったが、かなり強いチームであった。日々の練習でレギュラーの練習台となっているうちに、かなり実力がついてきていることが分かった。もっとサッカーに打ち込めば、レギュラークラスに入れるのではないかと考えて、これまで以上に練習に励み、学業の方は留年して取り返せばよいと考えるようになっていた。

しかし、毎日、日が暮れるまで練習して帰宅して翌日は昼近くまで寝ていてグラウンドに出かけることを繰り返すのを見ていた親から、「学業に専念するのだから、学資は出してやらない」という宣告を受けた。

思い悩んだが、家を飛び出してサッカーに専念するまでの決心がつかず、泣く泣く1年間休部することにした。休部しても学業に専念するほど殊勝ではなく、日比谷のコーチをしながら運動不足の憂さを晴らしていた。

1年後公務員試験に合格し、夏前にサッカー部に復帰した。しかし、1年間のブランクは大きく体力が練習についていけず、試合に出られない1年生のコーチをしながらの活動となった。

卒業前の冬には合宿所に1年生を集めて合宿を行い、2年前の梅村氏の指導に対する恩返しを行った。彼らのうちの何人かはレギュラーになって活躍している。

国家公務員になったことに不満はないが、あの時家を飛び出してレギュラーになることを目指していたらどうなっていたかと思うことがあり、まさに見果てぬ夢というほかない。

編集委員会注：新井俊一氏は、2018年9月25日に急性白血病のためご逝去されました（76歳）。この文章がご遺稿になってしまいました。心よりご冥福をお祈りいたします。

## 54 年前

樋口周嘉（昭和40年卒）

今、手元に昭和40年3月25日東京大学運動

会発行の「運動会報 14号」があります。A5版で約150ページの冊子ですが、その中の46ページから101ページに「我が運動部」という記事があり、28の運動部がそれぞれに、抱負、宣伝、悩み、問題提起等々を綴っています。著者名の記されている部、イニシャルだけの部、無記名の部と様々ですが、サッカー部（当時日常的には正式名のア式蹴球部は使っていませんでした）の文末には、「11月15日記（C.H.）」とあります。何を隠そう、私（Chikayoshi Higuchi）が記したものです。

発行は昭和40年の3月ですが、原稿は前の年の秋に集められたものでした。前の年、すなわち昭和39年は私が4年生でサッカー部の主務をしていたことから原稿を書く羽目になったということです。

この昭和39年は10月10日から24日まで東京オリンピックが開催された影響で、リーグ戦の開幕が前の年より一か月遅い10月31日でした。原稿を書いた日はリーグ戦の第3戦が終わった翌日ということになります。

この原稿で私は一つの問題提起をしたことになっているのですが、今回それを読み直してみて、結局その後のフォローをしないまま卒業してしまったことに忸怩たる思いを抱いています。現在のア式には、私が取り上げている問題は存在しないのかもしれませんが、54年前にこんなことを考えていた輩が居たのだと思いつつ読んでみて欲しいと思っています。

この年、6月には東京都の国公立大学戦で優勝し、7月初めの京都での京大戦では引き分けたものの、引き続いて京都で行われた七帝戦にも優勝をするということで、リーグ戦での好成績を周りから期待されてのリーグ戦突入でしたが、3戦を終えて、1勝1敗1分と、思ってもいなかった状況の時でした。

ちょっと脇道にそれますが、七帝戦は今の七大戦で当時はまだ帝国大学の帝を使っていました。東大蹴球部は“伝統的”にこの大会には出場しないとのスタンスを取ってきたのですが、この年は京大戦の直後から京都で開催ということになっており、逃げ帰る訳にもいかず、参加して名大、東北大、阪大を破って優勝を手にしたのでした。定期戦でつけられなかった白黒を七帝戦の決勝でつけようと約束した京大は準決勝で阪大に敗れてしまったのでした。

さて、前置きが長くなりましたが、運動会報14号の私の文章を全文引用の形で載せることにします。練習に部員が揃わないという当時の部の問題点の根源が理科系の学生が増えたためではないかという観点から記したものです。因みに当時はナイター設備はありませんから日没以降にチーム練習はできませんでした。

以下は、運動会報14号の我が運動部特集中のサッカー部の記事の引用です。

### 18対26と、27対16

この数字は、サッカー部に於けるいわゆる理科と文科の学生数の比率である。前者は7戦全勝で2部優勝を果たした昭和37年、後者はリーグ戦第3戦にして、1勝1敗1分と、不振に喘ぐ昭和39年のもの。

今年の不振をこの数字のせいにはしたくはないが、やはり比の逆転と不成績の間に何らかの関係を求めてみたくなるのも人情であろう。

学年別に見ると、37年は4年が3対4、以下3対9、4対8、8対5となっており、2、3年合わせて7対17と圧倒的に文科の方が多くなっているのに対し、今年は、4年3対5、以下、4対3、10対3、10対5、2、3年合計14対6という具合である。ここで2、3年生の合計を出してみたのは、チームの中心は勿論4年生であるが、それを盛り立てて行く力というのは、2、3年生の伸び盛りの力によらなければならないからである。

サッカー部では、夏以前は週5日3時半からの、夏以後は週5日2時からの練習を行うのが通例である。3時半からの時は3時間までの、2時からの時は午前中だけの授業に出て練習に来ることを部員に要求するのであるが、理科生の実験や出席をとる専門課程の授業というのが、毎年、4年生の悩みの種となる。

37年には、4年で工・農学部の人、うまくやりくりした点もあっただろうが、非常に熱心に練習に出ていたし、3年、2年の理科も、何とかして他の人より週に1回だけ多く休むだけか、あるいは、普通に練習に出ていたし、1年は練習が面白くて仕方ないという様だった。ところが、今年になり夏も過

ぎてみるとめっきり練習に出て来る人間が少なくなった。勿論4年は、少々の犠牲を払っても、毎日出て来ていたが、3年の理科が実験等に縛られて、又、1、2年が試験を気にして、といった具合だった。試験を気にして練習を休む…今の4年に言わせれば、自分達が、1、2年の頃は練習は絶対のものであり、試験前であろうが最中であろうが出て来たものだ、ということにはなるのだが…。

さすがに、駒場の秋休み中は、1、2年生は良く出て来たが今度は、3年の理科が試験。更に10月も下旬になり、いよいよ、リーグ戦に突入という時になって、予想外の事態が生じた。進学が決まった2年が続々と練習を休み出したのである。ともかく、13人のうち、工・農学部へ、10人進学というのだから、近年のサッカー部には見られなかったことであろう。

昭和の初期には、関東大学リーグ戦に6年連続優勝を成し遂げ、その後ずっと、日本サッカー界の指導的立場を占め、戦後も、昭和23年に優勝している我が東大サッカー部も第二の危機に立たされていると言っても過言ではないのではないと思う。第一の危機は、新制大学として生まれ変わった時、即ちそれまでの選手供給源であった旧制高校との関係を断たれた時で、私学及び体育学部を持つ大学がどんどん伸びて来る中で好成績を収めるのは困難になったのだ。遂に、昭和31年、2部優勝の法政大に入替戦で敗れ2部に落ちてしまい今年で8年目、今度は部員に理科生の急増というピンチに立たされているのだ。

競技の性質上から、試合期には特に全員揃っての練習を必要とするので、授業をサボって練習に出て来いというのは、口に出していいまいでも、部員には当然要求されることであり、教養の間や法経学部では正規の授業に出なくとも、各自が勉強すれば苦しい点もあるだろうが充分追いついて行けるということはここ数年に亘って先輩の手で実証？されて来たことであるし、現役部員もこの点に関してはそれほど疑問や反発を持っていない。ところが、専門コースに入った工・農学部では、出席することが大切だという授業や実験

が多くなる。それへの出欠が単位に直接影響するとあっては「練習に出て来い」ともいえず、かといって「全部の授業に出ておかまわぬ」ともいえない。結局、各自の自覚…特にサッカーチームの一員であるという…に待つ他はなくなるのであるが、前にも数字を挙げた様に、あまりにも「自覚」を待たれる人間が多くなって来てしまったのだ。

11月に入って、リーグ戦の最中だというのに、全部員の半分しか顔を出さない練習が、もう、3、4回あった。練習に出て来られる時に各人が頑張れば何ということはない、という考え方もあろうがやはりそこにはチーム全体の和とか、チームメートに対する信頼感といったものが欠けて来てしまう。

このまま、ずるずる行ってしまったのでは、今シーズンの好成績は望めないし、明年、明後年に期待することもできなくなってしまう。

どうしたらいいか。現役部員の自覚を高めるということは必要であろうが、それは学生本来の目的を棄てさせることになりはしないかと、心配になる。しかし又、授業に出るだけが、学生本来の目的達成への道かという反問も生ずる。

どうしたらいいか。この点に関して、今ここでこれ以上考えることはやめしておく。この文が活字になるころは、もうリーグ戦の結果もでていいることと思う。27対16を又、改めて考えさせられる結果となるか、一時の取り越し苦労と、笑って思い出す様になるか。しかし、今年のサッカー部の成績如何にかかわらず、各部で、この様な問題をどの様に処置しているかという様なことが話し合われる時ではないか、という気はするのだ。(了)

以上で引用は終わりますが、12月12日に終了したリーグ戦では、2勝3敗2分という成績で、創部以来最低の成績となる、関東2部の5位という結果に終わっています。でも、その成績に相当の責任を感じなければいけない私でしたが、その後、27対16を改めて考え、後輩達にこの問題への適切な対応の仕方を残すということをしないうまま卒業してしまったのでした。今更ながら自責の念に駆られています。

2018年6月8日記

## サッカー部の思い出

北川 薫 (昭和44年卒)

中学校の1年生でサッカーを始め、2年生と3年生で名古屋市選抜チームメンバーになり、その勢いで高校でもサッカー部に入りました。高校の後輩には小原さん、杉浦さんらがいます。公式ではないものの、チームは愛知県でベストファイブほどの実力でした。

大学を選ぶ判断基準は二つ、慶応か早稲田でサッカーをする、北海道へ行きスキーをする。結果として、小樽商科大学へ入学でき山岳部員として夏は沢登り、冬は雪山に親しみました。3年生の正月に帰郷した折、高校時代の恩師を訪ねて話を聞くうち好きな体育・スポーツの道に進みたく思いました。一カ月ほどの準備で、奇跡的にも東京大学教育学部体育学健康教育学科の3年生に編入することができました。編入後、すぐにア式蹴球部に入部をお願いし、部員となることができました。同じタイミングで、名古屋で東京大学の話をついた浅見俊雄先生が、名古屋大学から東京大学へ移動されました。

3年ぶりの本格的サッカーの世界です。部員の方々にはよくしていただき直ぐに慣れました。記憶に残ることは、6月か7月、どこかの大学との練習試合で、中盤から大町君のパスを受けダイレクトで得点したことです。それが監督やキャプテンの目になったようで準レギュラーになりました。しかし、夏の合宿で試合直前のシュート練習で肉離れを起こし、試合には出られなくなりました。なお、合宿部屋で、はっきりと寝言を言う癖を知りました。同室の後輩曰く、夜中に寝言の私と1時間ほど会話をしていたとのこと。この癖？は70歳を過ぎた今でもそうです。幸いなことに、寝言で妻の不審をかうことはなかったようです？

3年生の9月に人生最大の悲劇がありました。日大との練習試合に途中出場できましたが、相手のタックルを受け右膝の十字靭帯断裂、外側副靭帯断裂の大けがをして大学病院に2か月余、入院をしました。現役での選手生命はお仕舞いです。治っても歩ける程度との診断でしたが、リハビリを頑張り、御殿下クラブでプレイできるようになりました。



前列向かって右端が筆者（北川）、その左が故八林君。



向かって右から3番目が筆者（北川）。

博士課程1年生の時に指導教官が急死し途方に暮れていましたが、浅見先生のおかげで教養学部保健体育科サッカー担当の助手に採用され、ここで3年を過ごし古巣の教育学部の助手に移動し2年半、中京大学体育学部採用され今日に至っています。中京大学では運動生理学で採用されましたが、名古屋大学では教養課程授業のサッカーの非常勤講師を数年務めました。

ア式蹴球部の同期生とは忘年会で一緒にしますが皆元気です。唯一、八林君が先待ち人となりました。彼の現役時代は、理論に基づいた華麗なプレイをし、専修大学経済学部教授として専修大学サッカー部の隆盛に貢献しました。写真は愛知県刈谷でのスーパーエイジ大会のものです。

後輩にも素晴らしい人がいました。私が今も勤

務する中京大学名古屋キャンパスの目で医院を経営していた杉浦さんです。残念なことに彼は60歳を目前にして先待ち人となりました。私は特に病気はないので医院へ行くことは稀ですが、彼の奥様にはいつも親しく声をかけていただいています。彼は本当に地元で愛された医者でした。今でも、思いもかけぬ場で彼の話題が出るほどです。また、彼の同期の連中が墓参りと追善サッカーをしに名古屋へ来てくれます。今回は中京大学豊田キャンパスにて女子サッカー部と対戦しました。

最後に思い出をもう一つ。3年前、タイのチュラロンコン大学へ客員教授として到着したその日のこと。迎えに出た同大学長顧問でタイ人の友人が、今夕、東大とのサッカーの試合があるというのです。半信半疑でスタジアムへ着くと、一年後輩の武田さんを団長とする4年生を中心とした現役チームが来ていました。写真は、本学との試合後に、大学の持つプロチーム（Chamchori United）と撮ったもので、日本人選手が2名います。タイのチュラロンコン大学には、私は35年ほど前にも、国際交流基金からの派遣でタイ文部省体育局スポーツ科学専門官として赴

任していましたが、近くのチュラロンコン大学の若手教員と知り合いになり、その時のご縁が今でも続いています。

思い起こせば、人と環境に恵まれた人生でした。残る30年ほどの人生をサッカーとスキーを軸として元気に生きていきたいと思います。

## 一人のシニアサッカーマンより

藪内俊和（昭和44年卒）

もうすぐ6度目の干支の72歳を迎えます。東大を卒業後も随分長い間、ア式蹴球部に関わってきましたが、百周年の内のごく一部分の期間、自

分が関与した時間があつたのでその記憶を後輩の皆様へのご参考になればと書かせていただきます。

卒業後、既に発足していた日本リーグのチームには入れずに一般就職した東京海上（現：東京海上日動火災保険）の本店サッカー部において、28歳まで社会人の選手としてプレーしていました。

会社のチームは、関東一部校の慶大OBを中核とし、一橋大、上智大等の強豪校OB選手で構成されており、東京都社会人一部リーグの強豪チームだったので毎年の関東大会では、東京都代表チームの常連チームでした。自分も国体成人の部の東京都代表の一員に選ばれS49年の茨城国体では優勝を飾ることができました。その国体での東京都代表チームでは、日本リーグの古河電工で活躍され第一線を退かれたばかりの、故・宮本征勝さんとチームメイトとして親しくなりました。宮本さんはプレーでは強固な身体能力を活かしたキック力とタックルが強烈なCBでしたが、フィールドを離れ一対一でお話をすると、全く別人で優しく気配りをされる人でした。

そのあと、本田技研、出身校である早大、住金鹿島等多くのチームの監督を務められ先年亡くなりましたが、早大監督時代には、当時東京海上チームの監督を務めていた自分に連絡があつたのです。「早大に東京海上に入社を希望している部員がいるよ」と。東京海上にその学生を連れてきてくれました。それまでは早大ア式蹴球部は夜間部の学生が多かったため東京海上には入社できず、チーム内に同部出身者はいませんでした。その学生は昼間部の学生だったので、当時人気で就職が難関だった東京海上にも問題なく入社し、宮本さんにも大変喜んでもらいました。その後は早大から毎年入社するようになり、今も続いているようです。

自分はその後東京海上の本店サッカー部の現役や役員を引退した後は、徐々に地域や東大ア式蹴球部OBとしての活動の時間が多くなりました。

Jリーグ発足後の我が国では、地域のシニアサッカーが盛んとなりましたが、自分が住んでいた横浜市東部の地域でも子供のサッカースクールを母体に大人のサッカーチームが多数生まれました。

自分の団地でも団地内にサッカーチームを作ろうと、隣人と一緒に地域のチーム作りに参加しま

した。「あざみ野キッカーズ」というチームですが、近隣小学校の週末に行っている学校開放のグラウンドでボールを蹴ることから始まりました。その後、地域のリーグ戦にも参加するようになり、若いパパさん達が多数入ってきたので自分は東大OBとしての活動の方にシフトするようになりました。その際には自分の無二の親友で、ア式の同期生の故八林秀一君にいろいろと手引きをしてもらいました。

当時、同君は専修大学の教員でしたが専修大学サッカー部の指導にもあたっており、同チームが全国制覇を果たした際にはサッカー部長として大いに貢献したと聞いています。彼は東大ア式の同期生のなかで、一番早くレギュラー選手になり、そして一番早く一昨年に逝ってしまいました。

東大LB（東大サッカー部OB）では平成10年ごろから、LB会の法人化に当たり4年先輩の樋口さんを中心に3年後輩の手島さんを始め、当時の若手OBも集まって法人法制化への準備活動に取り組んでいましたが、八林君とともに自分もこれに参加し、その後「一般社団法人」化が実現し今日に至っています。

また、東京都のシニアサッカーの組織化が進むに伴い、シニアサッカーも社会人単一リーグから年代別のO-50、O-60のリーグへと分化・発展し、東大LBもチームとしてそれぞれのリーグに参加しましたが、自分も体力維持を兼ねてサッカープレーヤーとして現役(?)復帰しました。

その後さらに、O-65、O-70、O-75のリーグも発足していますが、東大LBはO-75を除き、いずれのリーグにも単独チームとして参加しています（但しO-70はア式蹴球部OB以外の卒業生等も参加している為、「LBクラブ」というチーム名でリーグに参加しています）。

東京都のシニアサッカーリーグでは、地域のサッカー愛好者が地域ごとにチームを作って参加する形が一般的で、一大学のOBが単独チームを作って参加しているのは唯一東大LBのみです。LB各年代の各チームの戦績については、それぞれチームの責任者の方が報告されていますので、そちらに譲りますが、各チームともそれぞれのリーグで有力な強豪チームとして好成績を収めています。全国的にみても大学OBが単独チームを組

織して地域リーグに参加している大学は、あまり例を見ません（地域のサッカー協会が主催する地域の大会「藤枝草サッカー大会」や「刈谷スーパーエージサッカー大会」等にゲストとして大学OB団体が招聘され、アドホックにチームを組織して参加することは東大のみならず京大・阪大・名大・早大、慶大、東農大、関学・中大等多数ありますが、あくまでもアドホックに年一回の各大会に参加するに止まります）。

LBチームの強みは、単独の大学チームOB組織としての一体感・秩序感、そして何よりも大学時代の延長での先輩・後輩間の上意下達の意味疎通のスムーズさにあると思います。

自分はつい先日、5年先輩の梅村さん、4年先輩の樋口さんのLBクラブの監督・総務ご退任の慰労会を終え「LBクラブ」のバトンタッチを受けたところです。ご兩人とも自分がア式に1年生で入部した際にはもう既に卒業されていて大学で一緒にボールを蹴ることはありませんでしたが、卒業後は同じア式のOBとして、事あるごとにお会いし、ボールを蹴り、時には叱責を受け、また試合後には酒を酌み交わしてきました。これまで、東大LBがシニアサッカーの世界で各年代に亘り、単独チームとして参加できているのは何よりも樋口先輩が長年に亘りLB会事務局長として、献身的に貢献されたお蔭であり、頭が下がります。

自分達も順送りに年を重ねて、バトンの受け継ぎをしていきます。これが本当の意味の「伝統」だと思います。時代の進展や社会・環境の変化に柔軟に対応していく東大LBのこの素晴らしい伝統を、後輩たちに伝え、これからの100年に繋いでいきたいものです。

## 関東リーグ復帰を目指して

内田純司（昭和49年卒）

### 1. 監督就任の経緯

長い歴史を有し、かつて日本のサッカーをリードしてきた東大ア式蹴球部。その監督を昭和54年度、55年度の2シーズン務めたことから、この節目の100年史に寄稿することにした。今思い返しても恥ずかしながら、何故自分が監督にな

ったのか、その理由・背景が曖昧ではっきりと思いつけない。私たちの世代は、あの東大紛争で入試が中止になった翌年昭和45年に入学・入部した。上級生が1学年いない状態で（但し、上妻さんという全日本学生選抜クラスの逸材が残っていたが）、何とか関東リーグ2部に残留したという苦節を味わった。その分、都リーグに陥落した母校を再び関東リーグに復帰させたいという強い思いがあった。その頃私は、勤務先の新日鐵から経済企画庁に出向となり、「あいつは暇にしているらしい」と先輩・同期の間で噂が出て、候補になったらしい。後は、前任の古村さん、手島さん他先輩から、「やれ」の一言で決まり。それならぜひということで、信頼できる1年後輩の吉澤君に無理やりコーチをお願いして、監督の仕事が始まった。

### 2. 取り組みと成果

上記のような経緯なので全くの素人。まずは選手を知ることが第一と、土日祝日以外に、役所の上司である内国調査課長の了解も得て、平日にも最低一日は早退してグラウンドに出ることにした。

当時日本リーグはあったが、プロではなく、奥寺選手がやっとドイツにプロとして行くことになった頃、全国トレセンがスタートし、選手の組織的な育成が始まったばかりだった。つまり、サッカー選手のソースは高校、大学ともまだ伝統的な名門校に限られていた時代だ。東大の選手も、首都圏の有力校、広島、九州、あとは関西他地方高校の、文武に秀でた少年たちだ。言い換えれば、サッカーどころの静岡などを除いては、傑出したボール扱いができる選手はまだ限られており、やはり勝利のためには（特に守備面で）、基礎体力・走力・瞬発力（Body Balance）が必須で、そのうえにチーム戦術の理解力・判断力（Brain）、それを実現するボールコントロールがあれば、勝ち残れると思われた。いわゆる3Bである。あとは、いかに組織化するかだ。私には、各選手の才能よりもコミュニケーション力に改善すべき点があると思われた。

#### ①昭和54年度

4年生が選手層も厚く、下級生にもいい選手がいたので、そこそこやれると見ていた。湊主将、宮崎副将を中心に練習にもしっかり取り組み、春先はほぼ期待通りの成果を挙げた。同じリーグで

は青学がやや強く、学芸とは同等くらいで、4位以内にはなれると予想した。しかし、京大戦に完敗し、調子を落としたままリーグ戦を迎え、負傷者も出て僅差で5位になった。負けなために、勝ち切るために、このチームは何かを身に付ける必要があると痛感した。しつこさとか、粘り強さとか、泥臭く戦う力だ。

## ②昭和55年度

4年生、3年生以下も前年の経験が身に染みていたので、教養学部の先生にも指導を求め、計画的なトレーニングに各人が自主的に取り組んだ。インターバル走や部室での筋トレは我々の代を超えていたと思う。チームの戦い方はできていたと思うが、春先も京大戦も戦績は芳しくなかった。しかし、この年のチームは、福田主将、安藤副将を中心にまとまりがよく、飯島、福沢、斉川、植田ら力のある下級生も多く、雰囲気は悪くなかった。まじめな選手が多かったか。リーグ戦の出だしは2敗2分け。これは練習よりも厄落としが必要だと考えて、吉澤、南谷、青山君らコーチ陣にもカンパをしてもらい、春日通りの「養老の滝」で盛大に飲み会をした。なかには、ちゃんと彼女同伴で来ている奴もいた。「あとはやるだけだ」と再スタートした。結果は、運にも恵まれ、4位に滑り込み。関東大会出場を果たす。残念だったのは、準決勝で明学大に敗れたこと。あの「負けてもともと」の挑戦者らしい思い切りの良さがなくなり、球際のしつこさも薄れていた。

## 3. 振り返って

### ①東大というチームの戦い方

やはり、どんなチームであれ基礎的な合理的なトレーニングは重要だろう。55年度のチームから2名が都リーグ選抜に選ばれたのもトレーニングの成果が一因だったと思う。個人の技術レベルは全体として上がってきているが、東大の選手も上がっている。やはり、戦い方を全体、局面でもっと考える必要がある。東大のサッカーを見た筑波大の先輩に、「知能指数の低いサッカーをやっとるね」と言われたことがある。他方で、東大の選手には、もっと泥臭く執念深くしつこく努力することを求めたい。(これは世の中ではもっと大切なことだ。)私は、東大が関東リーグでやれる可能性は十分あると今でも思っている。

### ②その後の私と選手たち

私にとっては、この昭和54年、55年は人生においても思い出深い期間になった。二人目の子供を授かり、家に帰れば子育てにも忙しくカミさんに指導された。また、出向先の経済企画庁では、経済白書で第2次石油危機後の経済分析、為替レートの変動分析に苦労したことも今は思い出話である。当時の選手たちも今はそれぞれの勤務先で幹部として大事な責務を果たしているようだ。「あいつが役員か、大丈夫か」と言いたくなるが、「先輩の皆さんはどうですか」と言われたら返す言葉もない。私にとって、この2年間の経験は、与えることは少なく、得ることのみ多く、後々の人生に残る貴重な財産となった。選手諸君、先輩・同期の皆さんに厚く感謝の意を表したい。

## サッカーとともに

### (高校～シニアサッカー：生涯現役)

笠原昌行(昭和49年卒)

学生時代に御殿下Gで無心にボールを追っていた時には想像だにできなかったが、卒業後40年以上たった現在も、LB御殿下シニア60フットボールクラブ(GSFC)というア式蹴球部OBで作った東京都シニアサッカー連盟所属のチームでボールを蹴っている。60代になり、筋力・スピード・瞬発力は衰えているが、東京都シニアリーグ公式戦では勝負にこだわった熱い戦いを繰り広げている。また他のLBシニアの試合では諸先輩や同期、後輩の若手シニアとともに「エンジョイ」のサッカーを楽しんでいる。加えて昨年から参加資格ができたOver-65にも並行的に参加し、週2日のアドバイザー業務と週1回のシニアサッカーが現在の生活のリズムを作っている。又、更にはOver-70のチームで元気に活躍されている先輩方、我々世代とそれに続く世代にシニアサッカーへの道をつけてくれた先輩方の姿をグラウンドで拝見するにつけ、本当に「生涯現役」という言葉を実感している今日この頃である。

私がサッカーを始めたのは高校1年の時。当時はサッカー後進県であった群馬県の高崎高校での事であった。遅れて入部したため1年目の新人戦で最後に残ったポジションのCBにまわされて以来、大学1年目のFW時代を除けばCBが自

分の定位置となっている。高校2年の時は常勝新島学園を破り県代表に、さらに関東予選も勝ち抜き福井国体に出場したが、全国の壁は厚く広島代表の前に初戦敗退した。

東大入学後は「一応サッカーは高校でやり切った。大学では勉強」との気持ちで大学生活をスタートしたが、4月下旬ふらっと立ち寄った御殿下Gでア式蹴球部の練習を見て大変なショックを受けた。中盤の柱の上妻さん、スピード抜群の俵さん、テクニシャンの黒沢さんなどの非常にレベルの高いプレーを目の当たりにし、むらむらとやる気が沸き起こり、翌日にはア式蹴球部の門をたたいていた。

汚い部室には驚かなかったが、「君たちは自立した大人である」との言葉で、先輩・後輩の差なく皆で片付けなどを分担するなどの先進性には、年次絶対の部活を経験した田舎育ちにはこれまた大変な驚きであった。結果的にサッカーとの生涯の付き合いがここで決まったことになる。

大学生活5年間では数々の思い出があるが、どれか一つと言えややはり3年の時に経験した下との入れ替え戦ということになるだろう。

我々はS45年入学であるが、前年は東大紛争の影響で入試中止となったため1学年上はいない。3年目のリーグ戦、残留した上妻さんを主将に3、2、1年生で関東大学二部のリーグ戦を戦ったが、やはり最上級生の不在は大きく下への入れ替え戦に臨むことになった。

駒沢競技場で行われた明治学院大との入れ替え戦、たくさんのOBも駆け付けてスタンドから声援を送ってくれる中、前半途中で1-3でリードされる。前半終了間際にラッキーな点が入り2-3で前半を終わったが、内容的には非常に苦しい戦いであった。後半は相手の守りの意識もあり東大が押し気味に試合を進めたが、なかなかチャンスを作れないなか、右からのコーナーキックを得た。いつもの通りファーサイドでヘディングを競るためにゴール前に上がっていたが、蹴られたボールが短く自陣に数歩戻りかけた足元にキーパーのパンチングしたボールが飛んで来た。夢中で右足でハーフボレーするとボールは右にスライスしながらゴール右上隅に吸い込まれていった。最後は1点追加し4-3の勝利だったが、あの感激、あの喜びは忘れられない。浅見監督やOBの方々、サポートに回ってくれたチームメイトには本当に心配

をかけてしまったが、こんなに感動できるゲームを経験できるのだからやはりサッカーはやめられない。

4年目は主将を任されながらリーグ戦第二戦で負傷、第三戦以降を棒に振ったため、5年目も残留することになった。

同期で最後まで残ったのは8人。ピッチの上以外ではからきし頼りにならない自分を支えてくれた副将の内田と佐々木、1年早く卒業し三菱商事入社の子っかけを作ってくれた田名、それに岡田、三田、西沢、井上。毎年同期会をしているが、2年で退部した佐々江前駐米大使も日本にいるときは顔を見せる。

再びシニアサッカーの世界。学生時代と違いピッチの上でどんなに激しく渡り合っても、終われば皆仲間。試合後最寄りの駅までのどこかで勝てば祝勝会、負ければ反省会となるが、場所も限定されておのずと呉越同舟となるケースが増える。チームごとのテーブル分けも知らないうちに入り乱れ、その日の試合に、はたまた昔話に花が咲く。なかには明治学院大出身者もあり、飲むたびに「あの入れ替え戦の時は勝ったと思ったのに……」と嘆き節を聞かされることも。

リーグ運営も各チームの連絡担当(2014年から戸井さんの後を引き継いでいる)が中心になるため、仲間は増え人の輪はどんどん大きくなって行く。

我がGSFC60は2012年から2017年まで東京都シニアリーグ一部の中堅どころとして戦ってきたが、2017年のシーズンでは同勝ち点ながら得失点差で及ばず8位となり、今年は二部で戦うことになった。現役時代に一緒にプレーしたことがなかった先輩や若手と、GSFC60の仲間と一緒にプレーできるのも大いなる楽しみである。

また2014年と2016年には、2年後輩の植村が中心のチームLazosがリーグ優勝し東京代表として全国大会に出場した折、大学から三菱商事、GSFCとずっと一緒にプレーしてきた1年後輩の柴田とともにLazosの強化選手として招かれ、東京代表として全国大会に出場し2度全国優勝したのも良い思い出である。

## 雑 感

兵頭圭介（昭和50年卒）

### 雑感その1

以前、ある会合でア式の監督が「現役はよくやっている」旨発言されていましたが、私も同感です。関東一部で連覇を重ねた大昔と比べれば、今は下のリーグですが、これは今の部員の努力云々よりも全体のレベルアップによるものではないでしょうか。大昔は夢物語だったW杯出場も今や六回連続、日本選手の海外進出も盛んですしね。自分の学生時代（四十年以上前）、東大ア式は関東二部所属でしたが、現在と比較すると、技術やメンタルの面では、当時の関東二部が今の都学連三部上位に相当するように感じます。当時も関東一部上位校は優秀選手が揃っていましたが、監督はOBの片手間仕事で、平日の練習は見ずに日曜日の試合直前に来て、メンバーは（監督の）独断で決め、皆はそれに逆らえないというチームが多かったと聞いています。上位校がその状態ですから下位校は推して知るべしで、東大ア式でもリーグ戦の試合中に、上手な選手が味方のミスを詰って仁王立ち（当然守備はしない）が「東大あるある」でした。技術体力が低かった当時の東大ア式では、少しでもテクニックのある選手は貴重な存在で、退部されては大変と、皆でおだてて機嫌を取って試合に出て頂いた記憶があります。

昨年、双青戦やリーグ戦、サタデーなどア式の試合を観戦する機会がありました。自分が見た限りでは、自分たちが学生の頃よりも、今の学生さんの方が遥かに意識高くストイックに、一体感を持って試合に臨んでおられます。サッカーは相手のあるスポーツなので、全力を尽くしても運や誤審等で勝てない時もあり、その逆もあります。

昔、卒論の指導を受けている時に「学生は結果よりもプロセスが大事だ」と言われました。これはア式にも当てはまると思います。「どんな戦績を残したか」という結果ではなく、「結果を出すべくどれだけ努力したか」というプロセスが問われるのではないのでしょうか。百年を振り返れば戦績は様々です。しかし「栄光に輝いた」年も、「低迷」した年も、部の歴史を構成する上では、同等に大事なパーツであり、どの一年が欠けても現在に繋がることはできなかったはずですし、払

った努力という点ではどの代も優劣はないはずです。

### 雑感その2

納会や公式戦の後にOBが訓話を垂れるのはよく見られる光景です。私の偏見かも知れませんが、上述の「栄光に輝いた」年代のOB程饒舌な気がします。そして「低迷」時代のOBは言葉少なで、時には遠慮がちに円陣から離れて遠目から見守っているのも「OBあるある」です。こうした訓話はどの程度有効なのでしょう？卒業後会社に入って上司の訓話を有り難そうに聞くふりをするトレーニングにはなりそうです。しかし元全日本監督イビチャ・オシムの「勝ち試合より負け試合から学ぶ事が多い」という言葉が正しければ、「栄光」のOBの長話よりも結果が出せず苦勞したOBが、言葉少なに遠慮がちに語る言葉の方が役に立つ事も多い筈です。現役部員の皆さん、試合後円陣を組んだ時に遠目から遠慮がちに眺めている人がいたら、東大ア式のOBかもしれません。それも不遇な時代の。ぜひ声をかけてみてください。良い助言がもらえるかもしれません。

### 雑感その3

以前、ア式OBの会合でOB会費の話題になった時、某有力OBが「メリットがなければOB会費を払う奴などいない」と仰って、大半の出席者はうなずいておりましたが、ひねくれものの私は、「OB会費は奨学金を返すつもりで払うべきでは」とその時に感じて、今もその考えは変わりません。

学生時代私は学連に派遣されておりましたので、東大以外の大学がどのような環境で練習していたか知る立場にありました。現在同様、当時もグラウンドの悪さは関東学連でも首位を争うほどでしたが、他大はもっと厳しい条件で練習をしていました。例えば日体は自前のグラウンドがなく、駒沢補助グラウンドを有料で借りていて、グラウンド借用料稼ぎのためにBチーム以下はパン工場などのアルバイトに駆り出された上に、自分たちの練習時間は昼休みの45分のみとか、拓大はサッカーコート半面程度の広さの空地を生保から借りていた等々（ちなみに用事があって拓大のサッカー部寮を訪ねたら、ストリップ劇場の裏にあるボロ屋でした）。自前のグラウンドを持っている所でも場所が本部校舎から電車で片道1時間、2時間と

かけて練習をこなしている所がほとんどで、山手線の内側に試合のできる練習場を確保していたのは東大と東京外大（当時は駒込にキャンパスがあった筈）くらいだったと記憶しています。石ころだらけのグラウンドで随分痛い思いもしましたが、他大に比べれば恵まれていると当時から思っていました。東大に入ったというだけでこうした条件を享受したのだから、卒業後もその恩恵に何らかの形で報いるべきだと、今でも考えています。サッカーの才能があれば全日本で活躍するという報い方もありますが、才能なきOBとしてはトトを買うか、ア式の後輩を支援するくらいしか手段がありません。OB会費納入とトト購入は可能な限り続けるつもりです。もしトトで6億当てたらア式と大東大に2億ずつ寄付して、残った金で遊び暮らす予定です。

## 『闘魂』の歴史

池田吉彦（昭和52年卒）

ご存じのように『闘魂』は「東大サッカー部」の部誌です。昭和38年の創刊号から、これまで5号まで発行されています。4号までは東大サッカー部誌、5号で初めてア式蹴球部誌となっています。

今回ア式蹴球部100年誌の編集に当たり、創刊号から第5号までを集めてみました。自分も寄稿した第3号とその次の第4号は前から手元にありましたが、それ以外は初めて読むものでした。皆さん既にご存知の事も多いと思いますが、この機会に各号の内容を紹介し『闘魂』の歴史をまとめてみることにしました。

読み終えて何よりも感じたのは、時代とサッカー部の置かれた環境は異なっても、いつの時代も変わらぬ現役部員とOBメンバーの「東大サッカーにける情熱」、そしてもう一つは、定期刊行ではありませんが、継続して『闘魂』が発行されているという事実です。創部からの記録もしっかり整理され、90年誌の編集には大変役に立ったものと思います。それでは1～5号の『闘魂』を振り返ってみましょう（創刊号～5号、90年誌の表紙写真も掲載します）。

### （1）創刊号

創刊号は昭和38年（1963年）12月発行。総ページ170頁の大作です。この年東大は関東リーグ二部3位。

創刊の経緯は当時の監督の須賀さん（昭和19年卒、後にLB会会長）が『闘魂』4号及び90年誌で書かれておられますが、『闘魂』の名称は安達主将（昭和39卒）が選んだ候補の中から、須賀さんが東大サッカー部に持ち続けてほしい名称と考えて選定したものです。併せて表紙の題字もご自分で揮毫されています。これ以降すべての『闘魂』の題字は 須賀さんの筆跡を使わせて頂いています。

また表紙の絵は同じく須賀さんが「小川氏（S35年卒）得意の版画」と『闘魂』4号で説明されています。

創刊号には初めて創部（大正7年）から昭和10年までの記録が掲載されています。巻頭言は新田さん（大正11年卒）が次の通り書かれました。

「遠い先を見る目、微な音を聞く耳、茨の道を拓く魂（こころ）加えるに己を責めるの努力」

あわせて「東大蹴球部の人達はいつも全身全霊を打ち込んで正しい道、新しい道を切り開いてきた」と綴っています。この巻頭言は45年後の90年誌にも巻頭言として掲載されています。

安達主将は部誌の発行を思い立った理由を「東大サッカー部は先輩の部でも、現役の部でもない。



『闘魂』創刊号表紙

## オ二部

## 「どうしたら強くなるか」

## 座談会

一月十七日

合宿所

出席者(卒業年度順)

新田純興氏(大正11年卒)

野津重九氏(昭4年卒)

竹腰重九氏(昭16年卒)

横山陽三氏(昭19年卒)

須賀敏孝氏(昭19年卒)

岡野俊一郎氏(昭34年卒)

高田宗昌氏(昭34年卒)

安達二郎氏(昭44年卒)

宇田誠一氏(昭44年卒)

石光長男氏(昭44年卒)

樋口周嘉氏(昭44年卒)

平田攻氏(昭44年卒)

渡辺翼氏(昭44年卒)

坂井忠昭氏(昭44年卒)

(昭11年) 新駒場キャブリン

(昭22年) 新マネジャー

(昭33年) 新キャブテン

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

(昭44年) 前マネジャー

岡野 部誌をつくるそうだが、どのような性格か不明だ。単に有志で出すのか、これからも続けるのかそれをほきりさせてほしい。

安達 四年全部で企画した。昨年(三十八年)の始め会をやり、そのとき、東大のサッカー部は輝かしい伝統を持っているが現役は全然理解なく、先輩の業績をほきりさせ、現役先輩が一つになり、強くなるその橋渡しにする為であった。その為にはまず歴史を知らなければならぬから、それを新田さんに相談し、そして諸先輩に原稿を依頼した。

あまり時間が無かったので説明が足りなかったが、まず行動を起こしたのです。

先輩 大変良いことだ。ただそういう趣旨だ。たまたま書きようがあったのだが。

安達 京大のコーチや日体大の人に原稿を依頼したのも、東大が強

くなりたからです。両校とも今年強かった事実を認め、そして何故強かったかを知って、現役に強くなればならないことを目覚めさせねばならないからです。

二、部の現状はどうか。

岡野 部生活は、皆好きだからやっている。オリンピックも終って見て始めて選手が参加して良かったなと感ずるものだ。東大の部でも勝つことを第一の目的としたい。楽しかっただけでは駄目だ。もっと厳しきものを必要である。だから、半分に減っても、強くなるなら厳しくやらねばならない。

安達 今回の現役部員に対する意識調査(本紙 前頁参照)では、入部動機はサッカーをやりたい者と、部生活を知りたい者と半々です。

岡野 残りの人達というのは、別にサッカー部でなくても良いのか安達 部を知りたいというのは、精神を養いたいとか、雰囲気を感じたいとかです。入部してからの感想はいろいろありますが、部生活に意義のあることは皆が認めています。部の伝統については三分の二は現在全然関係が無いとしています。また、現在二部にいることについては現在の力量であるとするのと、無理すれば打破れるとするものが六分四で、練習時間では、九五%が現在の制度に賛成しています。疲労度とか、理科がふえてきたこと等から、これが限度のように思われます。

合宿強化については三割が必要と感じており、自分が指導者になった場合の強化策については、三分の一が小教精鋭主義を採ります。

小教精鋭については、具体的案として、今のままで一、二軍のどちらもうまくならないから、意志の疎通を良くし、学年制を廃し、合宿を強化、金策制にするなどです。現在の部生活に対する不満はほとんどありません。

大内 練習を見ていて感じていた通りだ。一番の問題は五十人という人数で、それを少くするのが難しい。

竹腰 しかし二十五人も駒場からくるのは大した事実だよ。昔はそんなに来なかった。レギュラーにをれなければ高文を受けられ良いくらいに気持良かった。

石光 そのくらいはほきりさせれば良いのですが。

創刊号収録の座談会「どうしたら強くなるか」(抜粋)

先輩現役全員の部である」であり相互理解の場が必要と考えたと述べています。

また「現状打開の方法と問題点」という題で、野津(大正12年卒)、新田、竹腰(昭和4年卒)、大内(昭和12年卒)、須賀、岡野(昭和31年卒)というそうそうたるOBメンバーと現役で座談会が行われています。

## (2)第2号

第2号は昭和43年(1968年)1月発行。

浅見さん(昭和31年卒)が須賀さんから引き継ぎ新監督になられた年。前年は関東リーグ二部5位。

創刊号掲載の広告より





『闘魂』第2号表紙と、同号より、御殿下クラブ創刊の経緯を論じる「御殿下クラブ」(抜粋)。

全64頁と創刊号よりはやや小ぶりですが、現役の寄稿が大幅に増え、メキシコ五輪の年にあたり新田さんが「サッカーの栄光のために」という代表チームへの期待を寄稿されています。

また昭和38年に設立された「御殿下クラブ」の設立の趣旨が中村氏(S38年卒)により紹介されており、創立から昭和43年の関東リーグ昇格に至る経緯も寄稿されています。今につながるシニアの活動の原点と言えます。

### (3)第3号

第3号は、昭和49年(1974年)発行。全167頁。この年は関東リーグ二部6位。自分が2年生の時です。現役部員の寄稿が内60頁を超えています。表紙のデザインは横山さん(昭和16年卒)のお嬢さん(陽子さん)によるものです。

新田さんが1918年(大正7年)創部から1953年(昭和28年)までの東大サッカーのトピックスを紹介しています。これは日本蹴球協会(現サッカー協会)が1971年に創立50周年を迎え、その歴史が1974年に「日本サッカーのあゆみ」として刊行され、その中から東大関係をピックアップしたものです。

これを受けて『闘魂』本文でも「部史」が纏め

昭和三十八年一月、前年の入替戦に敗れて以来の虚脱状態から漸く回復して又々球を蹴りたくなった我々の学年の仲間、チームを作つてクラブリーグに参加する事にした。案外試合する事を主眼にして、先輩の中でも気心の知れた方々をお誘いし、走らせるために下級生をも加えて人数を揃えた。須賀さんをオナーに祭り上げようとしたら、「俺が出なけりや」と仰言つて、レギュラー第一号は口で決まつて了つた。梅村以下自己宣伝の大家が揃つていたので、チームのマークは天狗の羽扇にした。名前も色々考えたが、結局センスのない連中が「御殿下クラブ」にしてつた。そのため、五シーズンのクラブリーグで六点を挙げた試合は一つもない。

とにかくリーグに入つてみたら連戦連勝で五シーズン中四回優勝し、最初の三シーズンは土付かずであつた。下手なチームを相手にお山の大将を決め込んでいるうちに、皆さん段々と空しくなつて来て、真剣な試合がしたくなる。丁度東京リーグが結成され、クラブリーグでの実績を買われて一部十チームの中に入つた。今度も負けない様に試合しようというので、我々の頃の連中のうちまだ走れて使えそうなを選び、勤務先のチームを二の次にして出場して貰つた。その結果九勝二分で優勝し、十一月の関東社会人選手権に出場した。「関東リーグ迄行つたらシンドイから、この辺で負けようよ」などと言つておられた高田、浅見両ロートルにも、「絶対勝ちましょうよ」という畔柳君のやる気が乗り移つてしまひ、高田さんは二試合に決勝点を取る大活躍の有様。浅見さんの老巧振りと共に、天皇杯三位となつたLBの底力は恐いものと思はせられた。準決勝では延長の上高田さんの得点で勝ち、関東リーグ下位二チームとの入替戦出場権を得た。

入替戦では一勝一分(得点合計七対二)で東京トヨ

ベツトを破り、昭和四十三年度から関東リーグに入る事となつた。

須賀監督の御構想では、将来はグラウンドとクラブハウスを持ち、Y.O.A.O.のように家族全部が一日を楽しく過せるクラブを作ろう、との事である。資金一つを考えても今の所全くの夢であるが、これはこれからの夢である。見果てぬ夢からは今年で醒めて、「日本リーグ加盟チームを頂点に持つ御殿下クラブ」と言う新しい夢を見始めたいものである。

られています。『闘魂』創刊号に記載された、昭和10年までの記録に引続き、昭和11年(1936年)から昭和49年までの記録が掲載されています。

竹腰さん(昭和4年卒)のインタビューが行われ、現役時代の練習方法からコーチを務めたベルリンオリンピックまでの貴重なお話が載っています。

自分が現役のころで、時々練習にも来られていた竹腰さん(当時69歳)は、現役に対し「二部で勝つことは出来る。昔連勝したころと比べても頭はよい。ただ技術がまずい。出来てない。集中して練習しなければ」とアドバイスされています。

監督8年目を迎えた浅見先生は「監督として

『闘魂』第3号表紙と、中根雅子氏による写真集より。



の最後の仕事は新しい指導体制を確立すること」とし、かつての様に現役の活動は現役の主体性に任せるべきか、またはOBや外部の人の手も借りるべきか、問いかけをされています。

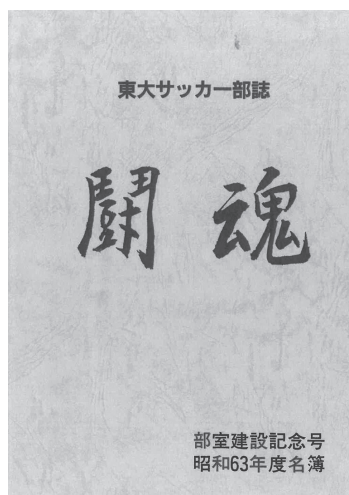
現役の寄稿では荒川さん、陽さん、杉浦さん、森井さんと既に鬼籍に入られた方の文章を読むと特に改めて懐かしく人柄が偲ばれてきます。

創刊号、2号の実績を経て「歴史」と「現役の声」のバランスが感じられる『闘魂』です。

直接『闘魂』には関係しませんが、この時期東大サッカーの熱烈なファンであった中根雅子さんが我々のために写真集を作ってくれたことも記録にとどめたいと思います。

#### (4) 第4号

第4号は平成元年2月(1989年)『闘魂』部室



『闘魂』部室建設記念号(第4号)表紙と、同号より「あのころ」。

建設記念号として発行。全134頁。前年は東京都リーグ一部7位。東大ア式蹴球部が創部以来の御殿下グラウンドを離れ、農学部キャンパスにホームグラウンドを移さざるを得なくなった苦難の時代であり、前年の5月に出来た農学部の新部室完成までをまとめた『闘魂』となっています。即ち、昭和57年から始まった御殿下改修に関わる大学側との厳しい交渉、埋蔵文化財の出土を経

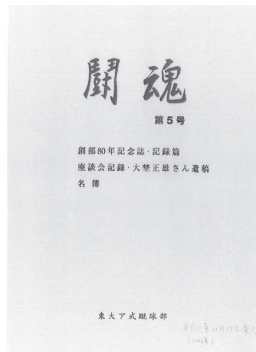


Light Blueのユニフォームを着たスナップ  
左より斉藤、木村、奥瀬の三氏  
(昭和17年、御殿下グラウンドにて)



第一回東日本都市対抗関東予選・優勝した東大L日  
(後列左より) 天野、竹藤、横山、奥島、岡本、有馬  
(前列左より) 大貫、近藤、森、阿部、三上、斉藤  
(昭和22年6月8日)

『闘魂』第5号表紙と、同号「記録篇」。「第1回関東蹴球大会の招待模範試合に八高OBで編成の帝大チームが参加」と報じる。



て農学部への移転の決意という苦難の時代に、OBが一丸となって建設計画を立て、募金活動を行い完成に至った6年間の経緯が細かく記録として残っています。

当時サッカー部長だった西本さん（昭和31年卒）が冒頭「関東リーグ復帰を果たした暁に、改めて『闘魂』4号として充実した部史を発行したい」と述べておられるが、この号も立派な記録の一つとして、現在は「4号」の位置づけとなっています。

記録としては、戦中、戦後を斉藤さん（昭和19年9月卒）が振り返って寄稿され、戦後昭和26年までの記録も追補されています。

#### （5）第5号

第5号は平成13年（2001年）12月に「創部80年記念誌・記録篇」として発行。全186頁。うち161頁が記録に費やされています。この年は東京都リーグ一部で8位。

1918年（大正7年）2月10日の第一回関東蹴球大会招待模範試合（創部の起源、八高OBで編成された帝大チームが高師Bと対戦）を経て大正13年（1924年）度の第一回リーグから平成13年（2001年）の秋のリーグ戦までの試合が出場メンバーを含め詳細に記録されています。

また昭和9年卒業の高山さんを初め戦前卒業のOB10名による座談会が行われています。

#### （6）その他

『闘魂90年の軌跡』『ライトブルーの青春譜』は平成20年（2008年）12月発行。『闘魂 これからの100年に向けて』は平成30年（2018年）12月発行予定。

改めて振り返ってみると『闘魂』は創刊号〜5

#### （日本における蹴球盛衰の時代）

英国で生まれた アソシエーション・フットボールが、日本に伝えられたのは、1873（明治6）年。英地の海軍兵学寮に招聘された英国海軍のダグラス少佐の寄附によってである。とされている。翌1874（明治7）年、工芸寮で英人ジョンズ講師が学生に教え、1879（明治12）年には、文部省体操伝習所（後の東京高等師範学校）でリーランドや坪井玄道によって授業にとり入れられた。その後、これを模として、師範系学校からの伝播や、外国人の指導などによって、徐々に授業を広げていった。

1917（大正6）年に芝浦で行われた関東大会に、日本代表としてはじめて参加した東京高等師範が、対中華、フィリピンに0-8、2-15と大敗し、これが刺激となって、東京蹴球部（高師・豊師・青師出身で構成）が、翌1918（大正7）年、関東蹴球大会を主催した。後援は朝日新聞社。関西、名古屋でもこれに対抗して、同年、蹴球大会をはじめた。いずれも中等学校が主体で、番外として大学・専門学校などが参加した。

#### 1918（大正7）年

2-10 第1回関東蹴球大会の招待模範試合に八高OBで編成の帝大チームが参加した。

対高師B（高師球場）

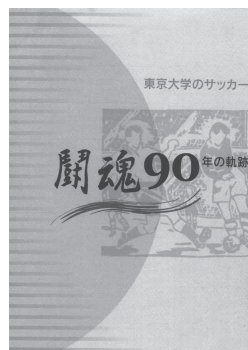
| FW      |                       | HB                    |  | FB GK |    |    |  |
|---------|-----------------------|-----------------------|--|-------|----|----|--|
| (帝大蹴球部) | 川 深 水 吉 勝 岡 神 大 長 成 山 |                       |  |       |    |    |  |
|         | 0                     | 本 野 野 田 田 崎 田 谷 谷 瀬 崎 |  | 8     | 3  | 1  |  |
|         |                       | 川                     |  | GK    | OK | FK |  |
|         | 0                     | 北 藤 中 伊 水 佐 森 稻 鈴 和 川 |  | 13    | 7  | 4  |  |
| (高師B)   | 川 井 川 藤 上 藤 本 垣 本 田 会 |                       |  |       |    |    |  |

「闘魂」(3号)で新田純典さんはこの試合を帝大チームの初めての試合としておられる。当時、八高は、海兵から転勤したイギリス人教師の指導を受け、すでに一定のレベルのサッカーをやっており、その出身者だけで帝大内にチームを作れたという。これを一つの機軸として蹴球部の創設の時としている。(この頃のメンバーの方々は、現在の蹴球部の名簿には載っていない。いわば東京大学ア式蹴球部の、神代時代というべきところか。)

号を通じ各々の時代の特色を出しながら記録と思い出が取りまとめられ、90年誌はまさにその集大成だったと言える。

今回100年誌は「これからの100年」と銘付したが、次の『闘魂』(8号?)では何が語られるのか、新しい東大サッカーの動きとともに出来れば関東リーグへの復帰が報告されることを祈ってこの項を終わります。

なお、今回現役の皆さんにもぜひ読んでもらいたいと思いマネージャーの俣野さん（平成30年卒）糸谷さん（4年）にお願いしこの3月に新設された農学部グラウンドの部室に全巻をおいて貰うこととしました。『闘魂』の伝統と情熱が引き継がれることを願います。(なおLB会員皆が読めるようにデータベース化も事務局にて検討中とのことです)



『闘魂90年の軌跡』



『ライトブルーの青春譜』

## 命の値段

山崎隆志（昭和53年卒）

90年史に関東2部から東京1部へ陥落した懺悔を書いた。思うところは今も同じなのでそのコピーではつまらない。私がサッカーに明け暮れていたのは理学部物理学科の時である。本気のサッカーを卒業し物理の大学院に進学したが、自分の研究能力の低さに愕然とし医師に転向した。サッカー部4年の時に膝半月板損傷の手術を受けたこともあり、整形外科医となった。現在勤務する武蔵野赤十字病院新聞に、医師として考えた事を書いたのでそれを少し改変し100年史に書いておこうと思う。

赤十字病院に勤務しているので、これまで内戦や地震の国際救援に6回出かけた。発展途上国の奥地が任地である場合が多く、観光とは一味異なる世界を知ることができる。最初は1998年にスーダン内戦の救援のため赤十字国際委員会が開設した病院で働いた。「風に立つライオン」という映画の舞台となった病院である。現地の子供たちが布を丸めてボールを作り、荒地でサッカーをしていたのを思い出す。

数年前、ウガンダの田舎の病院で働いていた時の話である。破傷風に罹患した二十歳の青年が来院したが、その病院には人工呼吸器がなく、きちんとした治療ができなかった。300km離れた州都の国立病院では人工呼吸器での治療が可能であったが、青年の父親は州都までの移送費1000円が払えないために移送を断念し、その青年は田舎の病院で死亡した（ウガンダでは国立病院の治療費は無料）。青年の命を助けるため1000円ぐらい貸そうかとも思ったが、国際救援では現地で人に金を貸すことは重大なルール違反になる。一人に金を貸すと、その他大勢にも貸す必要が生じ、社会の混乱を招くからである。結局、この青年は1000円の金がないために命を失った。

ユニセフは1ドルでアフリカの3人の子供の命が救えますと募金のコマーシャルをだしている。予防注射や抗菌薬の原資になるのだが、計算上はアフリカの子供の命は30円程度になる。

心臓の奇形などで渡米して手術を受ける子供がいる。米国での心臓手術費用は1億円を超えるが、それに相応する募金が集まる。集まった事例しか

マスコミに出ないのかもしれないが、日本の子供の命はこの程度の金額を払っても助ける価値があることになる。

整形外科では転移性脊椎腫瘍の手術を行う。転移だから末期で完治は難しいが、痛みや麻痺を改善させ、残された人生のQOLを高めるための手術である。一般的には3か月以上の余命が手術適応とされている。脊椎転移の手術では器械の値段だけで100万円程度かかり、入院費など含めると200万円程度になる。わずか3か月のQOL改善のためのこの金額が許容されるのだろうかと考えたことがある。健康保険料は私たちの給与から天引きされているのだから。

30年ほど前に三井物産マニラ支店長の若王子氏誘拐事件があった。会社が身代金を支払って無事救出した。若王子氏は当時53歳で、奮発したのか相場なのか身代金は約2億円だった。あと20年程度余命がある人に2億円だから、おおむね人の命の値段は1年1000万円程度と考えた。残念ながら若王子氏は膵臓癌で2年後に亡くなったが。

3か月200万円の医療費は、1年1000万円の身代金と比較すれば少し安い。癌の転移による痛みや麻痺で困っている患者に、当時、私は積極的に手術を薦めていた。「前世の最後は悪くなかった」とあの世で思っしてほしいからである。手術の値段が許容範囲で安心した覚えがある。

最近非常に高額な抗がん剤が発売された。これまでの抗がん剤に比べて約8か月余命がのびる。薬代は一か月300万円で、手術と違って生きている間ずっと服用する。患者には福音だが、保険で支払うべきか医療財政的な命の値段で物議を醸している。

これまで命にもっとも高い金額をつけたのは福田赳夫総理だと思う。1977年ダッカでの日航機ハイジャック事件で、「一人の命は地球より重い」と述べ身代金を支払った。数学的論理からはこの発言は命の値段は無限大ということの意味する。一国の総理として国民を想う気持ちのなせる業だと思うが、無限大の金額と身代金を支払ったことについて世界の評判は悪かった。社会的には命の値段は有限なのだから。

「プライスレス、お金で買えない価値がある」、数年前のクレジットカードのキャッチコピーで人気があった。お金で買えない価値には感動、能力、

両親、友人、空、海、地球、太陽…たくさんあるけど、お金で買えるものはカードを使ってね、というコマーシャルである。命もプライスレスなはずだが、現実にはさまざまな値段がついている。

サッカー部 100 年史だが卒後 40 年になるのでサッカーの話はほとんどなかった。少なくとも言えることはサッカーに打ち込んだ青春は誰にも値段は付けられない。プライスレスである。

## サッカーは貧困を救うか？

吉江建一（昭和 54 年卒）

今年 3 月、東大が設立に大きく関わった関東サッカーリーグ 1 部所属の東京ユナイテッド（本拠地：文京区）2018 年度新体制発表会に出席した。パーティーも終わりに近づいたころ、郁文館高校の生徒二人からアンケートの依頼を受けた。質問は二つ。まず 1) 東京ユナイテッドは J リーグに昇格するとグラウンドの制約があるので文京区を出てしまうのでしょうか？ わたしの回答は、確かに現在の小石川球場だと J のグラウンドとしては使えないので出るしかない。でも改築するとか、文京区内の他の場所を探すという選択肢は、可能性は非常に低いけどゼロではない。諦めずに十分な検討をする価値はあるのではないだろうか？ スポンサーや費用、場所など具体的に調べた上でこれからの事を考えるということだ。

次の質問は 2) サッカーは貧困を救いますか？ 貧しい新興国でもサッカーは盛んに見える。しかし貧困を救うことに何か役立っているのだろうか？ ということだ。

暫し考えて次のように答えた。サッカーに限らず、国を挙げてスポーツ振興を行うには、それができるだけの教育を受けた多くの人が必要だ。また継続的に試合を開催し、コーチやグラウンドなどを整備するにはお金がかかる。すなわち事業をすることになる。スポーツの活動を支える努力として教育と事業の振興を行えば、国は結果的に栄えるのではないだろうか？ すなわちサッカーは貧困を救える。

私の答えは飛躍にすぎるかもしれないと思った。そこでもう少しこの機会にこのことを考えてみた。

一昨年急逝した我が同期、広瀬一郎君（東大出

身のスポーツジャーナリスト）は「スポーツマンシップの最も重要な精神は尊重である」と説いた。スポーツはゲームでありサッカーの場合、チームメイト、相手、審判がいて初めて成立する。従って必死にゲームを成立させてくれたこれらの人々を尊重することは当然のことと言うわけである。ほんの 10 年前までは、勝利至上主義が蔓延していた日本スポーツ界を憂えて、スポーツとスポーツマンシップをきちんと定義したのは広瀬君と言って良いだろう。暴言をはいて挑発し、荒っぽいプレーで怪我をさせる様なプレーヤーはスポーツマンシップを持ち合わせていないと断言する。審判をなじる選手もそうだし、交代させられて監督に不平を言う選手は交代出場するチームメイトへの尊重がないと言うことである。日本サッカー協会では標語として respect を掲げているが、これはまさに関係するすべての人を「尊重する」ことである。ゲームが終われば友人として生涯付き合える人間関係が生まれれば、ただ単にゲームを楽しむんだ、と言うだけでなく、豊かな人生が送れる素地ができるのではないだろうか？

話は変わるが、高校一年の時、昼休みにミニサッカーをしていた私に友人が「上手いから一緒にやらないか？」と同好会チームに誘ってくれた。しかし、何か満足できず大学に入って公式戦に出て思い切り力を出してみたいと思い、ア式蹴球部に入った。途中キーパーに転向したが、3 年の関東リーグ最終戦に出場できた。前日の練習終了後、同期の吉野君と岸戸君が「デビュー戦前祝い」といって本郷三丁目のお好み焼き（だったと思う）に誘ってくれた。試合前日だから生ビールは一杯だけだ、とか言いながら放談したが非常に嬉しかった。試合は立教相手に 3—0 で完勝。以降現在に至るまで 40 年ヨタヨタしながら続けているが、この間多くの知己、友人に出会うことができた。あの時誘ってくれた友人が居なかったら得られなかった豊かな人生だ。

こうした自分の経験から感じたのは、サッカーを通じた豊かな人生が広がり、サッカーを通じて互いを尊重する文化が定着すれば、平和と経済的発展を手に入れることができる、即ち貧困も解消の方向に向かうだろう。貧困の問題は一筋縄には行かないことを多くの人々が指摘しており、サッカーがその解決に全能と言うわけではないのは分かっている。しかし必ず何らか意味のある効果を

もたらずと考えている人は私だけではないはずだ。

東大は2016年に東京大学スポーツ先端技術研究拠点を設置し、スポーツ振興に貢献する方向性を示した。東大ア式蹴球部と東大LB会も、これからの100年に向けて「サッカーを通して互いを尊重する文化を形成すること」に関して重要な役割を果たしていけば、結果として、世の中の平和と発展に大きく寄与できると信じている。

## 関西 LB 創生記

牛窪健一（昭和56年卒）

### 1. 関西LBは阪急電車の中で始まった

2008年の京大戦は京大農学部グラウンドで行われた。現役戦は3-2で勝った。当時大阪勤務で茨木市在住であった私は、レセプションを終え、大阪在住の南谷先輩（S51卒）と四条河原町駅より阪急京都線にて帰宅の途に就いた。車中で南谷先輩が「関西でもOBを集めてぜひLBの試合をやりたいね。」と言うので、私が軽い気持ちで「ええ、そうですね。」とうっかり答えてしまったのが、実は事の始まりである。

それから数日後、南谷先輩から一通のメールが入った。「平成20年（2008年）10月25日（日）に京大の永井さん（S51、現京大蹴球部OB会会長）に試合を組んでもらったので、メンバーを集めろ。」とお達しである。私の現役時代のコーチである先輩の命令である。逆らえるわけがない。それ以来私はずっとメンバー集めに奔走することになる。

### 2. 三大学（東大、京大、一橋大）関西忘年会

実はその前から東大・京大・一橋大の三大学で合同関西忘年会を開催している。場所は毎年、大阪福島にある関西おでんの名店「花くじら」である。

この忘年会の始まりは、2006年8月の京都での京大戦で、当時、新日鐵大阪支社に赴任してきた福澤君（S57卒CF）とOB戦で出会ったことによる。翌月、福澤君と、現役時代に定期戦で3年連続して体をぶつけ合って戦った小林晃君（S57卒CB、現京大監督）を誘って、三人で大阪の谷町四丁目で飲み会を行った。この時福澤君より、

同じ社内のお阪支社に一橋大OBの日置君（S56卒）や広畑製鐵所の安藤君（S56卒）がいるので、関西在住のOBを集めて三大学合同忘年会をやるという話がでて盛り上がった。

ということで、福澤君が店を予約し私が声かけを行って、第一回目の三大学関西忘年会が平成18年（2006年）11月28日に実現した。その席で、みんなでおでんをつつきながら「これだけのメンバーが関西にいるのだから合同で試合をやる。」といった話題が出ていたが、南谷先輩の尽力により、ようやく二年後に実現することとなった。何よりも同年代の転勤族がなぜかこの時期に関西に集まっていたのが大きい。

余談ながら、忘年会等での現役当時の話の中で、昭和54年（1979年）の御殿下Gでの定期戦の時に、当時女子マネージャーだった片山（朝長）さつき現参議院議員がグラウンド脇にいたことを、京大の皆さんもしっかり覚えていた。

### 3. 第一戦の開催

まずはメンバーを集めなければならない。LB会住所録担当の吉澤先輩（S50）に頼んで最新の住所録を送ってもらい調べたが、人数が足りない。そのため、無理を承知で関西のみならず名古屋、静岡、中国、四国、九州までメールしたり電話を掛けたりした。さぞ迷惑された諸兄も多かったと思うが、「LB会員同士の親睦を深める」ためであり、この場を借りてお許しいただきたい。

さて、第一戦は前日までの雨も上がった快晴の伊藤忠川西池田グラウンドで行われた。対戦相手は京大の永井さんが代表を務める京大OBを中心とした「男組」である。この試合には、遠方の広島より名手平田先輩（S41）、名古屋より中尾先輩（S43）も参加くださった。また、このグラウンドを“庭”としておられる伊藤忠商事の小西先輩（S43）にも東京から参加いただいた。

試合は20分×4本を行った。結果はともかく、試合終了後は伊藤忠グラウンド横のクラブハウスの食堂で男組との合同懇親会を行った。この席で、当時、男組組長でもあった熊谷先輩（S42）からは、「関西LBができるこの日をずっと心待ちにしていた」というありがたい言葉をいただいた。南谷先輩が代表となって「関西LBの発足」を宣言した。

この日の様子と集合写真を「LB会報」に報告

している。また、初試合に際してユニフォームの追加注文やボールを寄贈を通して発足に協力いただいた東京の樋口事務局長（S40）へも報告したところ、「中島宏介 GK（S39）の活躍にはびっくりしました」との返信があった。記事を以下に再掲する。

#### 関西 LB が発足（2008 年 11 月の報告）

関西 LB が平成 20 年 10 月 25 日(土)に発足しました。

当日は伊藤忠商事川西池田グラウンドにて男組（京大 OB を中心としたチーム）と対戦。男組を 2 チームに分けた 3 チームで巴戦を行い、20 分×4 本をほぼ単独チームで戦い抜きました。最年長中島宏介 GK（S39 卒）の 35 年振りの試合とは思えない好守が光りました。

試合後は隣接するクラブハウスで男組メンバーと合同で発足式を行い、定期的に親善試合を行うことを約束して散会しました。

今回は都合が悪く参加できなかった西日本在住の OB 諸兄も、今後広く参加ください。また、チームは若い力を欲しています。出場機会は多々ありますので、平成卒の若手 OB の参加をお待ちしています。

#### 4. 第二戦以降

それから京大永井さんに声掛けをしていただき、年 2～3 回（1 月の初蹴り、5 月、10 月）に男組と試合をしてきた。

なお、本来は第一戦より「関西 LB・一橋大

OB 連合軍」であるが、第一戦だけはなぜか一橋大 OB が全員都合が合わず、関西 LB 単独となったのはただの偶然である。また、2012 年 1 月の初蹴りより神戸在住、千葉大 OB の茂木さんにも参加いただいている。これは東京での千葉大との OB 戦のときに「千葉大 OB で神戸から来ている人がおられる」と聞いて、池森先輩（S51 卒）を介して私がスカウトしたものである。

戦績は参加人数、平均年齢、活動実績でアドバンテージのある男組の前に劣勢のことが多かった。私は DF であるが、チームの守護神、大倉 GK（一橋大 S56 卒）より、「(寄せが甘くて)シュートを打たれ過ぎる。」と厳しい言葉をもらい毎回小さくなっている。その中でも、平成 22 年（2010 年）10 月 31 日の試合で 2-1 にて初勝利を挙げている。南谷代表の「関西 LB、待望の初勝利です」との感激のメールをなつかしく覚えている。また、その次の平成 23 年（2011 年）1 月 15 日の初蹴りも 1-1 で引き分けている。京大永井さんに「最近は（関西 LB に）簡単に勝てない」とボヤかせたのはこの頃である。

グラウンドは、発足当初は伊藤忠川西池田グラウンドを独占的に使わせていただき、試合終了後もシャワー施設とすぐ隣のクラブハウスの食堂を合同懇親会に使わせていただいた。厚く感謝申し上げる。この施設が 2011 年頃に宝塚市へ売却されたことから、その後は主に堺 J グリーンの天然芝または人工芝のグラウンドをとってもらって試合をしてきている。

#### 5. 現在の活動

男組の永井さんのご厚意により試合を組んでもらい活動してきたが、平成 28 年（2016 年）3 月 19 日の試合以降、休眠状態に入っている。最大の理由は、創設・主力メンバーである安藤君（S56 卒）、福澤君（S57 卒）や一橋大日置君（S56）、船倉君（S56 卒）らがみな東京へ戻ってしまったためである。かくいう私も、2009 年 2 月に東京へ戻ってからは、東京より参加している次第である。東京一極集中により若手 LB がなかなか関西に赴任してくれないのが悩みである。

#### 6. 生涯定期戦

私が現役の頃は、京大戦といっても当日の試合とレセプションやその後の飲み会だけで、京大の



当日の参加メンバー

後列左より、南谷（S51）、湊（S55）、岡田（S49）、安藤（S56）、本庄（S53）、川村（S57）、福澤（S57）、牛窪（S56）、安藤奥様女子マネ。前列左より、大高（S50）、中尾（S43）、中島（S39）、平田（S41）、小西（S43）、熊谷（S42）、宮路（S47）

どういふ方々と対戦していたのかを知る機会がなかった。こうして関西で何回も対戦して懇親会を行うことで、京大や一橋大の同年代と懇親を深めている。特に京大の水倉君（S56卒）、小林君（S57卒）、藤原君（S58卒）らは定期戦でも戦い、その後も京大の監督も務めるなど現在も現役の指導にも当たっている名選手たちであるが、OBとなった今でも交流を深めている。

なお、「花くじら」での三大学忘年会は毎年続いており、2017年も11月30日に開催した。今回は2017年8月にJ3の藤枝MYFCから関西一部のアミティエSC京都へ移籍して活躍中の添田隆司君（H27卒主将）を招待して激励会を兼ねて行った。来年は関西LBの試合をぜひやりましようという誓いあって散会した。そのための次試合を2018年10月に計画中である。

2018年3月

## 100周年記念ポロシャツ製作裏話

福澤伸哉（昭和50年卒）

このたび東大ア式蹴球部創部100周年記念ポロシャツの製作を担当した。現役のときのコーチでもあり、会社の元上司でもあり、今でも大変お世話になっている吉澤先輩（50年卒）からの要請であった。昨年10月頃現役リーグ戦観戦後に立ち寄った日高屋で1杯500円のラーメンをご馳走になりながらお引き受けすることにした。



LB会報に掲載した、福澤本人のポロシャツ姿。

お聞きすると90周年時にも記念ポロシャツを作成しているとのことで、当時製作を担当された小川先輩（43年卒）へのヒアリングから始めた。藤枝チームとのシニア定期戦の試合前にお時間を頂き当時の状況をうかがった。その際、①自分で決めていく（関心が低く誰も決めてくれない）こと②現役の力を借りること③最後に「自ら楽しむ」こと、という3つのアドバイスをいただいた。この時点で懸念された点は、90周年ポロシャツとの重複感と売れ残り在庫の発生であった。については90周年ポロシャツとの有意差を明確にし、売れ残りも防ぐため、次の点を考慮した。

- あくまで「OB会での着用」と割り切り、卒業年次と名前を入れる
- 注文生産とすることで不良在庫回避
- 速乾素材を用いることで品質面での違いを明確化

仕様決定までの道のりは意外にも想定以上に長いものであった。誰も決めないどころか想像以上にポロシャツへの関心は高く、事務局メンバーに幾度も相談にのってもらった上で、理事会に2度もかけられることとなった。その理由は

- （1）現役チーム運営面でアンダーアーマー社との連携を模索していた時期と重なり、アンダーアーマー社製シャツ素材使用可否と可否が議論となった
- （2）高価なポロシャツよりも廉価Tシャツ配布（寄付金の謝礼として）といった代替案が示された
- （3）卒業年次、名前記入についての抵抗感があった。

結果として（1）早期にアンダーアーマー社との連携について方向性が明確化、当該社から適当なシャツ素材提供が可能となり、（2）寄付金と本件は別の議論とする共通理解が得られ、（3）については若手、ベテランのOB相互理解を深める点で有意義であるとの理解が得られたことから、2月の理事会でGoサインが出ることになった。

シャツ製作仕様意外にも2つの課題があった。デリバリーと代金回収である。卒業年次・名前入りとしたばかりにサイズ以外に注文情報が増え、正確な注文受付とデリバリーならびに代金回収の管理が大きな課題になった。

注文処理からデリバリーまでは現役諸君のお力をお借りした。ツールとしては郵便局の振替受払

に関するWEB照会サービスが役立った。とくに俣野君（平成30年卒）には郵便局の振込依頼用紙に注文内容を記載できるような申込用紙の仕様設計・製作・印刷（600枚）ならびに袋詰め等発送実務で多大な力を発揮いただいた。またOB皆様へのポロシャツ製作・販売のお知らせ文をLB会報に同封するべく吉澤先輩にご尽力いただいた。さらにシニアサッカーやOB総会等で先行製作したサンプルでPRする等注文確保にむけた活動もおこなった。

なお、残念ながら私が関わったのはここまで。2月理事会で了解を得てアンダーアーマー社に和田君（58年卒）を紹介して製造仕様を繋ぎ、製作・販売のお知らせ文と郵便局の振込依頼用紙をLB会報に同封する手配をしたところで4月にバンコク転勤となり、和田君と俣野君、ならびに吉澤先輩に後を託すこととなった。上述のとおりに関係者の御尽力の成果もあり、無事7月初めにポロシャツが100名弱のOBに届けられ、7月29日の京大戦には多くのOBに記念ポロシャツを着て参加していただいたと聞いており、これで今回の100周年記念の取組みに少しでもお役に立てたのかなとホッとする事ができた。とそこへまたもや思わぬ要請が元会社ルートからやって来た。この11月頃にア式の現役諸君がバンコク遠征で来泰とのことで、試合相手を探してほしいというのである。現役諸君に役立つ相手を見つかるかどうか自信はないが喜んでお手伝いする所存。会社に入って以降、東大ア式蹴球部のおかげで多くの人の輪を築くことができ、大いに感謝はしているのであるが、それにしても正直人使いの荒いOB会と感じているのは私だけであろうか？

## ア式的环境中で何をするのか (現役の時に考え、実行していったこと)

和田康太郎（昭和58年卒）

### 1. はじめに

昨年からLB会の事務局を手伝っている。創部100周年目の今年、ア式の現役の支援に最大限注力しながら（この文章を書いている2018年6月中旬現在、現役は東京都2部リーグの前期7節を終え、

首位に立ってくれた）、ア式やLB会がこれからの100年に向けて役割発揮していくための礎の一端を、微力ながら少しでも果たせればと思っている。そんな思いから、節目の100年史に、自分が現役の時に関東復帰を目指して考え、先輩や同期、後輩とともに取り組んだことについて寄稿させていただくことにした。

### 2. 現役時代に考え、実行していったこと

#### (1) きっかけ、考えたこと

自分は浪人を経てア式に入部した。ハードな練習を一気に再開したためか、夏合宿前に腰椎分離症と診断され、地元の掛かり付け整形外科医からはサッカーを一生できないと宣告され落涙した。再びサッカーができるようになれないかと伝手を頼って医者を探し歩き、自身の腹筋背筋を鍛えれば復帰できるかもしれないとの希望の光となる診断にたどり着け、治療用コルセットを腰に巻きながら1年間、腹筋背筋の筋トレに努めた。その間、自分の復帰とア式強化の両方とに役立つ情報を求め、大学の駒場図書館に通い、スポーツ生理学やトレーニング理論関係の文献を読み漁った。

技量で劣る東大が、大学入学後の4年間の鍛錬で他校に伍し、さらには凌駕できることは何か、「東大生が今の東大の環境の中で、何をすれば、関東へ復帰できるのか」を筋トレと図書館通いを繰り返しながら考え続け、当時、次の目標を定めた。

①技量…東大は劣るので、習熟に努め他校に少しでも追いつく

②体力…世界最先端の科学的トレーニングを徹底的に実行し、走力・筋力で他校を上回る

③自分で考える…一人ひとりが自分で考える

これら①②③を組み合わせ、「見劣りする技量」だが、大学入学後の科学的な徹底鍛錬により「体力で凌駕」し、一人ひとりが「自分で考える」サッカーで「へたくそでも他校に競り勝てるチーム」を目指したいと考えた。

#### (2) 実行していったこと～東大ならではの環境の活用気付く～

これらは自分ひとりではできないことではないので、一緒に取り組む仲間作りからスタートした。2年生になる頃、まず駒場のトレーニング体育館で昼休みなどに同期の橋本、齋川などを誘い、ベンチプレスなどの筋トレを開始した。3ヵ月たち、筋

トレの目に見える効果を実感し始めた同期たちをはじめ、上記①②③の組み合わせに賛同してくれる人が徐々に増えていった。

東大には世界最先端の運動研究に取り組む先生方が多数おられることにも気づき（まさに“灯台下暗し！”であった）、その直接指導を得る機会の拡大にも努めた。駒場では日本代表チームの科学的トレーニングスタッフ戸荏晴彦教授や足立長彦先生ら、本郷では宮下充正教授の体育学研究室へ自分たちから足を運び、金久博昭院生（のち教授）に出会い直接指導を得られるようになった。定期的な走力・筋力測定で自分たちの体力強化状況をチェックし、個人別メニューに反映するPDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルを廻した。先生方も富士通など日本リーグトップチームとの比較データとして自身の研究に我々のデータを活用されるなど、互惠関係が成立していった。春の駒場陸上トレーニングで最先端の走法技術を学び、走力はスタートダッシュ・短・中・長距離それぞれをバランスよく徹底的に鍛えた。1980年冬季五輪でスピードスケート5種目完全制覇を成し遂げたばかりのエリック・ハイデンのトレーニング内容を分析し取り入れた「有酸素性速筋線維（fast-twitch oxidative glycolytic fiber）強化トレーニング走」を我々は“FOG（エフ・オー・ジー）走”と呼んで特に力を入れた。“エフ・オー・ジー”の300mダッシュ×10本はとてもきつく、救急車を呼んでしまうこともあったが、試合最後まで走り続けられる走力養成に効果を発揮した。筋力は、日本に2台しかなかった駒場トレーニング体育館の油圧式筋トレ器具のサイベックスマシーン、あるいは自転車エルゴメーターこぎなど世界最先端のトレーニングマシーンも活用して効率的なトレーニングに取り組んだ。

### （3）取り組み成果

こうしたトレーニングを開始して2年、我々が最上級生になったときには、ベンチプレスの4年生平均は、日本リーグトップチームを上回るぐらいまでになり、他校から嫌がられる走力、筋力を獲得できた。学内の運動会にもア式として参加、4×400mリレー優勝（“FOG走の成果”）や、100m走決勝へ予選1位で進出、さらには主将の齋川が運動会主催主将合宿（検見川）のクロスカントリー大会で野球部やテニス部などの強豪を抑えて優勝するなど、我が部の存在を示せた。準備

体操はまだラジオ体操的なものが中心の時代に、ストレッチングを他チームに先駆けいち早く導入もした。

そして迎えたリーグ戦は優勝争いに加わることができ、最終節は対慶応戦。双方とも優勝から6位までの可能性がある中、2敗目を喫し慶応は優勝、我々は2勝2敗4分けの6位にとどまった。

### 3. 終わりに

今の東大が関東リーグでやれる可能性は十分あると思っている。ボール扱いは我々の頃より格段にうまくなっている。だがこれは他大学も一緒のこと。かつてクラマーさんが、メキシコ五輪銅メダル獲得後低迷する日本リーグの監督を集めて「君たちはあの時のままだ、自分たちで考えないから全然進化していない」と怒ったとの言い伝えがある。大事なことは「関東リーグに通用するために、ア式部員一人ひとりが、ア式の置かれた環境の中で何をすべきか、ア式ならではの資源（ヒト・モノ・環境）を活用して何をできるか」、を自分の頭で考え実行し、自分たちで考えた、今の自分たちのスタイルを作ることだ。ここで申し上げたいことは、東大のア式に入部してきている自分たちの資質・特質をつかみ、東大ア式の持つ資源を活用して鍛える。そして今の自分たち自身を分析して強みと弱みを把握し、これから何をするのか自分たちの頭で考えて実行し、試行錯誤しながらもPDCAを廻していき、今いるメンバーで今の部ならではの、今の自分たちのスタイルを作りあげていくことが大事ではないかということだ。その参考になればとの思いも込めて僭越ながらこの寄稿をさせていただいた。

自分たちの代は関東リーグに復帰することはなかったが、4年間真剣に取り組んだ経験は貴重な財産となった。一つの目標に向かって全力を尽くす場を共有した先輩、同期、後輩の皆さんに、そして今、LB60で自身の生涯サッカーを楽しみながら、LB会の事務局の手伝いができることともに、一OBとしても後輩たちの活動を応援できる場のあること、いつも多くの気づきと元気をもたらしていること、これらのことに厚く感謝の意を表したい。

## 東大ア式蹴球部 Jリーグ発足前夜の秘かな昇格物語

小泉泰郎（昭和 61 年卒）

日本サッカー代表ユニフォームの元の色となったとも言われている LB のユニフォームに身を包み、大学生時代の殆どをア式蹴球部の練習、合宿、公式戦に費やしてきた身として、出身クラブの百周年史編纂に寄稿という形で貢献できることにまずは多大な感謝の気持ちで一杯だ。

昭和 61 年卒業組は、平林監督の厳しい練習と高い技術要請に応えられるものが少なく、卒業時まで残った人数としては、最小人数に近い 5 人〔山本主将、小泉副将、上原、森、手塚〕しかいなかったが、述べ在籍人数としては 50 名を下らない人数が参画し、人材としても豊富な代であった。途中で辞めながらも試合に出場したメンバーという意味では升本、田中、酒井、原など多士済々のメンバーがいる。

その年の最大の目標は昭和 59 年に東京都 2 部リーグに降格してからの 1 部復帰であった。戦前の先輩たちが残したリーグ戦 9 回優勝という記録を除くと、戦後リーグ戦優勝は我々世代以前では 4 回、最後の優勝は 1969 年の関東 2 部優勝以来 16 年ぶりという間隔である。またリーグ優勝しても、入れ替え戦で勝たなければならない戦後の関東 2 部時代は、優勝するものの 1 部昇格の入れ替え戦の壁の前に阻まれ続けたということで、今回優勝して昇格すれば、長いア式蹴球部の歴史で初の昇格を成し遂げるということで、下部のリーグではあるものの、実力拮抗しているそれぞれの時代での結果はそれなりの意味があると、良く選手で話し合っていた。特に 2 年前の昭和 58 年度リーグ降格した悔しい経験をした 4 年生、3 年生が残っているうちに元に戻して、念願の関東 2 部復帰への礎を築きたいという思いは強かった。

90 年誌にも出てきている通り、一年を通じての高パフォーマンスを維持するのは前年度の反省から難しいという結論で、とにかくピークを秋に持ってくるという計画で、実際春夏の成績にはあまり重きを置かない戦略で臨んだ。

メンバーを見ればゴールキーパーには優勝するために留年までしたという噂の 6 年生？の永山、4 年生の 3 人、山本主将、小泉副将、上原プラス

3 年佐藤が守備を固め、中盤は翌年主将を務めることになる歴代ベスト 11 にも選ばれるであろう 3 年鈴木修二、監督を務めることになる 2 年利重、警視庁から東京オリンピック警備局長を務めることになる 2 年今井、フォワードにはラモスも偵察に来た、高校九州選抜の 2 年外野と 1 年安田、清水東で活躍していた久保田という布陣で、バランスも良く最強の布陣であろう。またのちに主将と現部長を務めることになる 2 年鹿園が、今井か久保田の交代で 3 試合に出場している。

ところが万全の準備で臨んだリーグ戦最初の 3 試合で初戦のまさかの成城大学戦での追いつかれての引き分けという手痛いスタートの後、連勝して 2 勝 1 分けと盛り返したものの、優勝候補の天王山立教大戦で 1 対 3 の大負けで 9 月を終わった段階で、優勝ラインの 5 勝 1 敗 1 分けから逆算すると残りを全勝でいかなければならない羽目になった。初戦の成城大学戦でも外野が 2 点目を失点した守備陣に何やっているんだと叱咤が飛ぶなど優勝目指しているからこそその厳しい雰囲気があったことは、結果として 10 月の残り試合 3 連勝での逆転優勝に繋がった。

残りの 3 試合を武蔵工大戦でフォワード陣が爆発して 6 対 1 で大勝すると、強豪の帝京大学にも 2 対 0 で完勝し、最終戦で自力優勝の可能性を残した。最終戦の相手は亜細亜大学で勝てば優勝、負ければ 3 位というまさに天国と地獄の状況であった。先制点を取って一気に盛り上がったところで、個人技や空中戦にも強い亜細亜大学の猛攻を受けて 2 対 1 で逆転された。ここでやられっぱなしでは何のために頑張ってきたんだと自然と円陣を組んで再逆転を誓い合ったが、ここで山本主将のもうだめだというコメントに 3 年の佐藤が何言ってるんですかヤンさんと気合を入れ直して、よいこうと持ち直したのが転機となって再逆転に成功した。流石の亜細亜大学もまさかの東大の執念の再逆転に浮き足立ってくれたおかげでなんとか逃げ切ることができ、ア式蹴球部に新たな歴史の一ページを築けた誇りと安堵感、また 2 つ上にまさかの降格の憂き目を見て悔しい思いをされた中野主将の代の面々、特に一年前一緒に昇格を目指しながら果たせなかった伊藤主将の代の面々の顔を思い浮かべて、各人感無量で至る所で歓喜と涙の輪が広がった。

この試合で引退した 4 年生は歴代でも最も数

が少ない代の1つであったので、三年生以下の主力はほぼ残り、翌年以降の東京1部での圧倒的実力でレギュラー温存してでも関東リーグ入れ替え戦まで行くほどのチームのなっていたことも我々の誇りである。

また、この原稿を準備している2018年4月、一緒にグラウンドで死闘を繰り広げた仲間で、警視庁から東京オリンピック警備局長の要職に付かれていた2年下の今井君が突然帰らぬ人となった。本人の無念さはいかばかりかと思う。ご冥福をお祈りしてこの文章を締めくくりたい。

## 関東に近づいた日

胡内健一（平成15年卒）

2011年11月6日（日）関東大会第二戦、産業能率大学に敗れ、関東大会の予選リーグ敗退が決定した。この日、平成年代において最も関東リーグに近づいた。それ以上でもそれ以下でもない。ただ、たしかに、選手、コーチ、スタッフをはじめとする、多くの方々の努力が積み重ねられて、東京都1部リーグ優勝と関東大会出場が成し遂げられた。

2011年秋、前年度に東京都1部4位に終わり、



筆者近影（『YEAR BOOK 2010』より）

東京都1部での2年目の挑戦を迎えていた。開幕から2戦を1敗1分（得点1失点4）とし、東大初のJリーガーとなった絶対的エースが卒業した穴を感じさせる展開となった。しかしながら、その後の7試合を5勝1敗1分とし、勝ち点3差に6チームがひしめく大混戦のリーグ戦を制したのであった。

チームを勝者へと導いた外部コーチ

この当時のア式蹴球部を振り返るには、常にチームを強くすることに尽力してくれた外部コーチの存在無しに語ることはできない。とくに、2011年度に最高学年として闘った彼らは、4年間で3人のコーチに率いられた、非常に珍しい代であった。

1人目は鈴木久雄コーチ。「止めて蹴る」の徹底、闘う姿勢を示してくれた。2人目は鈴木宏尚コーチ。選手が考えることの徹底、できることはすべてやる姿勢を示してくれた。3人目は林健太郎コーチ。レベルの高いサッカーの経験に裏付けられた、こだわる部分の明確化と具体的な修正指示、選手への自信を植え付けてくれた。タイプの異なる刺激を受け、チームは成長した。

「いつか決まると思っていたら絶対に決まらない。今決めるつもりで行け。」勝てば関東大会への出場が決まる2011年度秋季リーグ戦の最終節、0-0で前半を終えたハーフタイムに、林コーチからこんな言葉がかけられた。誰も覚えていないかもしれないが、勝者となるべくチームに自信と自覚をもたらす、非常に印象に残る心強い指示であった。LBと現役学生の努力により、素晴らしい環境を作ってきたア式蹴球部であるが、やはり最後に勝負を決めるのは選手たちに他ならない。彼らの自覚と自律、努力により、関東昇格を果たせるよう、今後も後押ししていきたい。

よりオープンな組織、魅力的な集団へ

各試合の結果や東京都1部リーグ優勝に至るまでの経緯は、自分一人では語り尽くせないほどの多くのストーリーがあるはずなので、次は、監督として務めた期間に考え、取り組んできたことを整理しながら、当時の挑戦を振り返ることとしたい。私自身は、1998年度に入部して2002年度に卒部し、2003年度にOBコーチを担当した。その後、社会人となり、2009年度から2012年度

に監督を務めさせていただいた。

監督としては、ピッチの上のことはヘッドコーチに一任しながら、可能な限りグラウンドに足を運んで状態を把握し、またピッチ外で選手や学生スタッフ、OB コーチ、ヘッドコーチとのコミュニケーションを図っていた。そんな中、ピッチの内外で学生一人一人が主体的に判断して取り組むことと、学業等との兼ね合いでサッカーのみに身を投じることができない状況下でも、プライドを持って誰よりも努力することを訴え続けてきた。バカの一つ覚えのような、意識高い系の主張であったが、自分の経験と置かれている立場や役割を踏まえ、この集団の基盤として根付かせたい一心で取り組んでいた。今日でも東大ア式蹴球部にとって必要な姿勢であると信じている。ただ勝つだけではなく、次の100年続いて行く集団の基盤となるよう、引き続き見守っていききたい。

好成績を収めることができた2011年度を顧みると、学生の質（サッカーの実力、リーダーシップ、スタッフのサポート、集団としてのまとまり、高い目線）、ヘッドコーチに植えつけられた技術・意識・戦術、前年度東京都1部リーグ4位というまずまずの成績、若手OBの叱咤激励やLB会からの支援、さまざまな要素がうまく重なり合っていたと思う。さらには、2011年度を迎えるにあたり、多くの先人たちの努力があったことを忘れてはならない。

先に書いたが、4年間の中でタイプの異なる素晴らしい3人のコーチに恵まれたこと、卒業したてのOBがコーチとして現役の一番近くで面倒を見るという体制が確立されていたこと、外部コーチを雇いながらも学生の主体性を高めるための取組が数多く試行されていたことなど、常に東大ア式蹴球部を勝利に向かわせる努力がなされてきたのである。当時の監督としては、これらの部に関わる多くの方の力を結集させること、選手・スタッフのエネルギーと融合させることに注力してきた。

しかしながら目標としていた関東昇格を実現することはできなかった。過去の積み重ねを活かし、現在を闘うことしかできなかった。昇格への道のりを描き、目指すべき将来像に向けて、取り組むことがもっと必要であったと感じる。ただ、近年の関東リーグ所属校と肩を並べるためにやるべきことを考えると、大学4年間での強化だけでは

到底時間が足りない。選手、運営、指導、環境など、多くの面でスペシャルな要素を増やしていく必要がある。そのためには、クローズした中で勝利を追求しても限界がある。遠回りかもしれないが、よりオープンな組織として、新たな血を入れ、外部との関わりを持つことを促進していく必要がある。オープンにすることで、選手たちのコミュニケーション能力、自覚と自律、柔軟な考えなどが求められ、選手の成長や集団としての魅力の向上につながる。その結果、人材の確保にもつながるのではないか。実際に、2018年度現在のア式蹴球部の活動は多岐にわたっており、より大きく、魅力的な集団に飛躍していくことを期待している。

ぶつかり合いをととして集団の力を高める

監督を務めさせていただいた期間、実りある数年間であったかのように振り返ってみたものの、改めて手元にある当時の学生たちとのやり取りを確認すると、なかなかの試行錯誤、意見のぶつかり合い、不平不満があったことが判明した。当時も、必ずしもうまく行っていたわけではない、全ての人間の意見が一致していたわけでも、満足していたわけでもない、そういう状況だったと改めて認識した。ただ、そういったぶつかり合いの中で、互いを認め、集団の力を高めていくことが重要であると常に考えて接してきた。うまく関係性が構築できた年、うまくいかなかった年もあったが、選手、監督、コーチ、スタッフ関係なく、フラットに意見し、行動していけるような集団になっていくことが重要なことだと感じる。

最後に、学生には、4年になってからがんばるではなく、集団に関わった瞬間からそれぞれの自己実現に向けた機会が始まっていることを認識して、取り組んでもらいたい。

今後、大学サッカーの位置づけ、リーグ戦の編成などが変化していくことも考えられる。必ずしも関東昇格のみが目標とならない時が来るかもしれない。いずれにしても、ア式蹴球部が魅力ある集団であり続けられるよう、OBとして支援していきたい。

## 卒業生・現役の寄稿 同期への追悼

### 八林秀一君を偲ぶ

(弔辞から)

東京大学運動会ア式蹴球部前総監督  
藪内俊和

八林秀一君、いつものように「やっち」と呼ばせてもらうけど、「やっち」よ、君はもう逝ってしまうのかい。私達は、数年前東京都サッカー協会が新たに発足させたオーバー 60 のシニアのリーグ戦に参戦すべく、東大ア式蹴球部の昔の仲間が集まって結成した「御殿下シニアフットボールクラブ (GSFC)」と一緒に加わり、漸く四十数年前と同じように一緒にサッカーができるようになったばかりというのに。

一昨年 2011 年春に、サッカーのプレーができるまでに回復した君は復帰するや、四十数年前と変わらぬ持ち前の抜群の巧みな球扱い、スピードのあるドリブル、正確無比なパスで忽ち我がチームの中盤のゲームメイカーとして、大活躍していた。夏の酷暑のさなかでも一緒に戦い、試合後のビールを美味そうに飲み干していた君の姿が忘れられない。8 月に開かれた、年に一度のア式蹴球部の同期会では、11 人の同期生の皆で、元気になった君を囲んで、四十数年前の思い出話や、サッカー談義に花を咲かせたばかりだったのに。

私達東大ア式蹴球部昭和 40 (1965) 年入学の同期生の中で、八林秀一君はいつも一番のエースだった。1 年生の時から一軍に選ばれて、秋のリーグ戦にもただ一人の 1 年生で出場し、小柄ながらさっそうと俊足を飛ばして活躍している彼の姿に、先輩も後輩も皆、目を見張ったものだった。当時の東大ア式蹴球部は大学サッカー、もっと言えば日本のサッカーの草分けチームとしての長い伝統を持ちながらも、関東大学リーグ 2 部に降格して久しく、「何とか 1 部へ復帰を」を宿願としていた。関東大学リーグ 2 部では中・下位に甘んじる年が続いていたが、私達が 4 年生の時には、有望な 1 年生が多数入部して近年にない強力な戦

力となってきた。

また、当時の日本リーグの強豪チームの東京本社勤務の選手たちが夕方、御殿下グラウンドに集まり自主練習をするようになり、私たちにも胸を貸してくれることもあり、当時の日本のトップレベルのサッカープレイヤーの技術など大いに学ばせてもらったものだった。夏の山中寮での合宿では、恒例の最終日の山中湖一周レースで八林君は 1 時間を大幅に切る好記録のトップでゴールし、短距離のスピードだけでなく長距離の持久走でも抜群の能力を発揮し皆を驚かせた。

この年、私達は久しぶりに春の国公立大会で優勝し、また恒例の京大定期戦に夏のアウェーで快勝したのを始め、好成績を収めていた。ところが夏から秋にかけて、御殿下グラウンドに近い医学部での抗争を発端とする東大闘争が激化の一途を辿り、御殿下グラウンド周辺もデモ等で騒然としてきた。ストライキや授業放棄等で授業のない部員も多く、部員一人一人がこの東大闘争にどう関わるか、悩みながらのサッカー部生活であった。そういう部の中であって八林君は、同級生や下級生の良き相談役として、またチームのまとめ役として、騒然とした雰囲気の中だけでもサッカー部の戦力維持向上にリーダーシップを発揮していた。

八林君の活躍により、私達は秋の関東大学リーグ 2 部のリーグ戦で、前年苦杯をなめた日体大にも快勝するなど順調に戦い、終盤には、1 部への入れ替え戦出場権を得る 2 位以内を目前とするところまで来ていた。ところが最終前節の大事な対東京農大戦で思わぬ大敗を喫してしまった。最終節では快勝したものの、この 1 敗のために 2 位日体大と同率ながら得失点差で 3 位に甘んじることとなり、1 部との入れ替え戦に出場できないことを知らされた時、私達 4 年生は全員、最終節の戦いを終えた御殿下グラウンドで茫然と立ち尽くしていた。その中でも涙を堪え、3 年生以下に次年度の雪辱と励ましの言葉をかけ続けていた八林君の姿が昨日の事の様に目に浮かぶ。

年が明け、安田講堂の攻防、入試中止など、御

殿下グラウンドの周辺は相変わらず騒然としていた。私は遅れて6月末に卒業し、社会人として実業団チームの一員となったが、留年の途を選んだ八林君は「5年生」としてもう一年サッカーを続け、翌年5度目の関東大学リーグ戦に挑戦した。その結果、今度は2部で見事優勝を果たして宿願の入れ替え戦に出場し、一年前の悔しい思いを思い切り晴らした。彼の、粘り強い、ぶれない持続性に私達は感嘆を禁じ得なかった。

八林君はサッカーだけでなく、学業でも私達のリーダーであった。同期の文系の部員何人かで、授業のない期間、御殿下グラウンドでの練習後、御茶ノ水や本郷の喫茶店に集まり、彼が好きだったマンハイム論を聞いたり、また、資本論論議をしたりするなど、自主勉強会の主催者・リーダーでもあった。

八林君は、卒業後、専修大学に職を得て教壇に立つことになったが、それから専門のドイツ経済史の他に、サッカーのトレーニング理論や、サッカー発祥の地、英国のサッカー風土研究にも領域を広げ、学問の世界でも活躍した。専修大学では今度は選手ではなく、サッカー部の部長として専修大学の「大学サッカー日本一」にも多大の貢献をしたと聞いて、私達同期生には皆、八林君の活躍ぶりのニュースはとても自然に受け入れられた。これも大学4年生の時の、あのときの悔しい思いを晴らしたい、その思いを持ち続けていた私達共通の悔しさの為せる業だったに違いない。八林君の「生き様」から、私達は「人間はどんなに悔しい思いをしても、それを忘れずに、それをバネにして、努力し続ければ必ず報われる」という事を教えられたのである。

いつも私達同期のエースだった「やっち」、4年間汗と涙を共にした同期生の中で一番まじめで、いつも冷静で、一番誠実で、一番誰にも優しく、先輩に愛され後輩にも慕われる、本当に素晴らしい「やっち」だった。そんな君に一番先に逝かれてしまったけど、彼の地でまたボールを皆で一緒に蹴りたいね。待っていてくれよ。

「やっち」、君が最後まで愛し続けた君の後輩たち、東大ア式蹴球部の現役選手達は今また、関東リーグへの復帰を目標に必死の戦いを続けている。また、君が教鞭をとった専修大学の学生たちは、君の、全ての人、全ての物事に対して誠実な、稀有な人間性に触れて得たもの・学んだものを、き

っと将来に生かしてくれるものと確信している。「やっち」、八林秀一君、有り難う。

今は、唯、さようなら。

平成 25 年春

(Economic Bulletin of Senshu University Vol. 48, No. 2, v-vi, 2013)

## 金丸仁追悼文

2018 年 5 月 4 日

手島直幸（昭和 47 年卒）

死者は穏やかに微笑んで

金丸仁は、2015 年 2 月慢性骨髄単球性白血病を発症し、その後 1 年余の闘病の末、2016 年 3 月 4 日早朝、68 歳でこの世を去った。蹴球少年は棺の中で LB のユニフォームをまとっていた。4 月 16 日藤枝霊園にサッカーボール型の骨壺で納骨された。

外科医として多くのがん患者を看取ってきた。その経験をもとに金丸仁は 3 冊の著書で、死をテーマに語っている。一貫して追求してきたのは「よい死を迎えるには今をどう生きていくかである」ではないだろうか。自らが不治の病であることを知ったがんの専門医は、多くの患者へ医者として告げたとおり、「限りある命を大切に生きよう」と自らに宣告した。そして余命を生き切った。

発症の 1 年前に刊行した小説の中に気になる箇所がある。金丸の分身である長瀬は、不老不死の体を実現する。しかしその結末は、ぴんぴんころりの方がいいと言いたげである。

主人公の長瀬は 65 歳で病院を定年退職し、特別養護老人ホームの医師として働き始めた。ある日大学の同窓会で旧友に会い、超高齢化社会の課題を一挙に解決しようとする政府の極秘プロジェクトの存在を知る。このプロジェクトは、健康なまま年をかさね、最期は畳の上で死にたいといういわゆる「ぴんぴんころり＝不老即死」を確実にする最新の遺伝子治療技術の開発が第 1 段階の目的であるようだ。そして第 2 段階は不老不死となる。主人公の長瀬医師はこのプロジェクトの実験台になる。そして彼は秦の始皇帝がなしえなかった不老不死を体現する…

（死者は穏やかに微笑んで、2014 年、万来舎）

## 東大闘争期のサッカー同期

手元に'71 関東大学サッカーリーグ戦のパンフレットがある。当時東京大学は関東Ⅱ部で、メンバー表に MF 金丸仁の名前がある。金丸は理Ⅲ 1 年生のときは鉄門蹴球部に所属。高校時代の同級生上妻に誘われて、2 年から途中入部した。1968 年から 1971 年医学部 5 年生まで全学サッカー部にいた。

1968 年の新入生はいつもの年をしのぐ俊英ぞろいであった。上妻達也、俵新、黒沢秀樹などは 1 年からレギュラーの座をつかんだ。金丸は私同様サブメンバーに甘んじていた。御殿下グラウンドで練習が終わった後だったか、金丸、大日向、手島などが話し合った。どのようにしてレギュラーの座をつかむか、どのようにしてうまくなるか。金丸は、スキークの回転競技の身振りで、ポールをすり抜けるテクニックはサッカーの 1 対 1 に応用できるというようなことを言っていた。

地震研裏にサッカー部の合宿所があった。昭和 30 年代にある先輩の寄付で建てられた。管理人一家が住み、我々の使うのは 6 畳、8 畳、10 畳の和室の平屋だった。リーグ戦の前日には出場選手全員で泊まり、歓迎コンパもここで行った。下宿がわりに使うものもいた。畳はぼろぼろ、雨漏りでキノコが生えるという代物であったが、大学構内にあることは何かと便利で、都内に自宅ある者も、何とか理由をつけて数か月以上住んでいた。私は 11 月のある日、隙間風で外気以下の部屋温度の部屋に、金丸がうちから炬燵を持ってきてありがたかったのを憶えている。金丸は真面目な顔でジョークをいうのがうまかった。私が「餃子をぎょうさん食べた」「隣に囲いができた、へい」と言う類のことを言うと、それは低レベルの駄洒落だと言われた。

## 藤枝との縁と金丸仁杯

東大サッカー部と藤枝の因縁は 60 年前にある。1958 年（昭和 33 年）藤枝で開催された天皇杯大会 3 位決定戦で、現役学生と OB で構成された東大 LB（ライトブルー）は、全国にその名を馳せていた藤枝の強豪志太クラブを破って 3 位となった。当時のメンバーには岡野俊一郎、浅見俊雄、小山富士夫などが連なっていた。東大も藤枝も全国トップレベルにあったわけだ。

金丸仁は 1973 年東大医学部を卒業し、1983 年

藤枝市立総合病院に外科医として赴任、2001 年から 7 年間病院長を務めた。2003 年、金丸からの誘いで、東大 LB は、団塊世代（当時 50 代）中心に、東京、中京、関西のメンバーをあつめ「藤枝遠征」を挙行した。当時土のグラウンドが普通だったが天然芝グラウンドがいくつもあるのにさすが藤枝と感心した。相手は病院職員の若手チームで、ロートル東大 LB は散々な目にあった。翌年以降の遠征も環境最高、結果最低だった。2005 年になって、せっかくの遠征試合で東大 LB が勝てないことに心を痛めた金丸から提案があった。「若手とシニアでは勝負にならない。楽しいサッカーをするため、同じ年齢層のシニアチームを相手にしよう。」金丸仁の属する藤枝 FC と東大 LB のシニア交流戦がスタートすることになった。

2015 年 2 月、金丸が入院したというので、あわてて静岡日赤病院に赴いた。医師金丸は自分の病状を説明して「東京新小岩で LB の練習試合に参加した後、体調を崩し検査の結果、骨髄のガン（骨髄異形成骨髄増殖性腫瘍）に侵されていることがわかった。現在は最高に危険なレベルで、ひょっとすると死んでしまうかもしれない。この病気は根治することがない。平均余命は 11 か月くらい。抗がん剤治療によりがん細胞が消える『寛解』になれば退院できる。だが再発は必至だ！」「残された時間でやりたいことはサッカーだ」というので、シニアサッカーの試合に連れ出した。

半年が過ぎて病状は進む。何とか力づけてやりたいと思い、東大 LB - 藤枝 FC 定期戦創設の功労者である金丸仁の名前をカップに残すのはどうであろうかと考えた。金丸は「蹴った、勝った、飲むぞ」と銘の入った優勝カップを寄贈してくれることになった。金丸仁杯争奪戦第 1 回後の懇親会で自らの杯を飲み干す姿が忘れられない。ワールドカップのジュール・リメ杯のように、高いレベルでシニアサッカー試合の象徴として語り継がれることを願う。

金丸仁は遺言を残した。「書き残したものを関係者に配布してほしい」。手島は預かった文を整理した。サッカーについて語った部分を載せて、追悼の結びにする。

医者になってからはたまにサッカーをやる事はありましたが、チームに入ってプレーす



手島直幸と、抗がん剤のため剃髪している金丸仁。2015年10月27日、駒沢球技場第二グラウンド。

る機会はありませんでした。

卒後10年で藤枝の病院に赴任した時、病院チームがあるのを知り参加しました。そのうち私がプレーヤー兼監督として25年以上病院チームに関わってきました。平成元年に近隣の4病院で自治体病院杯サッカー大会という、年に一度の大会を創設し、長く大会会長を務めました。この大会は医師だけではなく、事務や技師、看護師等も参加しており、藤枝は自治体の大会では毎年全国優勝する強豪ですが、その選手の中には事務職として病院に派遣される事もあり、また、医師もうまい選手が多く、常勝チームなのです。

60歳近くになってからは藤枝フットボールクラブというシニアクラブに参加しプレーをしています。全国レベルのプレーヤーも多く、私が試合にあまり出られない事は先に述べましたが、サッカーをやっている以上は試合に出たいと思うのが当たり前です。そこで我慢してうまくしようとするのか、レベルの低いところに行き試合に出るかは人それぞれでしょう。私が病院の監督をやって常に注意していたのは、練習試合のときは皆平等に出てもらい、年に1回のどうしても勝ちたい試合では、最強のメンバーを選んで勝ちにいくけれども、それでも5分でもいいから参加者全員をだしてあげるように考えています。それは大学のときのサブを続けていた事などからとても大事な事だと思っているからです。

負けても楽しめばいいと思うかもしれませんが、やはり勝たないと面白くありません。勝つ事と、皆が試合に出られる事を両立させ

るのは難しいのですが、それをやるのが監督の仕事なのだろうと思います。

以前は、サッカーはそれほど熱を上げるものではありませんでしたが、いまはサッカーに夢中です。私の人生にはいつもサッカーがあったと言えるでしょう。

(2015年12月 金丸仁)

## 同期の絆

御園慎一郎（昭和51年卒）

同じ釜の飯を食った仲間の絆。それは東京大学ア式蹴球部で多感な青春時代を過ごしたすべての同期にも宿っていることでしょう。私たち昭和51年卒業組にも永遠に続く仲間のつながりがあります。そんな大切な仲間の一人を失った時の追悼文をこの百年史に残すことで我々同期の結束の証としたいと思います。

「アヘ」へ

杉浦君、あこがれの大学に入学した僕らが出会ったのはサッカー部のトレーニング場であり、戦いの場でもあった御殿下グラウンドでした。当時は今とは大違いのボコボコで真っ黒な土のグラウンドでした。それでも三四郎池横のこのグラウンドでサッカーができることに胸をふくらませてサッカー部の門を叩いた。お互い新入部員としての出会い、そこから深く長いつきあいが始まりました。

学部も違い、育った地域も違ったけれどサッカーという共通項、そして毎日の練習とその後の飲コミュニケーションで僕らはあつという間に強い絆で結ばれたような気がします。杉浦君、君のあだ名は「アヘ」。練習のとき「アヘー」を連発しながら、そのくせ全くバテることなく動き回る杉浦君。「アヘ」は君の体力と気力に対する賞賛と尊敬の想いを込めて付けられたあだ名でした。

あの頃の君のことを思うといろんなことが思い出されます。君が当時のキャプテンの上妻さんが生活する合宿所に転がり込んで書生のようにして生活していたこと。ビタミンC補給のためと言っていつもみかんやりんごな

どの果物を持ち歩いて僕ら仲間にも分け与えてくれたこと。脛の裏に御殿下グラウンド、そして夏の山中湖や検見川の合宿所でのいろんなシーンが走馬灯のように浮かんできます。

僕らの絆は卒業して社会に巣立ってからも続きました。同期中心のチーム「泥蹴会」を結成し、毎年定例日にメモリアルゲームを続けました。そしてこの場はそれぞれが家族を持ってからは家族総ぐるみの交流の場ともなりましたね。子供たちが小さかった頃の定例会後の上野「東天紅」での家族みんなでの反省会。あの大宴会のことは忘れられない楽しい思い出として鮮明に記憶しています。年に一度皆が結集する「泥蹴会」という仕組みが、僕等のつながりの輪をさらに強いものにしてくれました。

東京から名古屋に戻った君は、お父様の後を継いで杉浦医院での診療活動等に従事する傍ら、ホームレスの人々への無料診療などのボランティア活動も続けていました。自分の生活を二の次にしての貧しくて弱い人たちのための活動。君のそんな姿勢には本当に頭が下がりました。そしてその気力・体力はサッカーで培い、サッカーを続けているからこそ湧き出てきているのだと思っていました。

そんな君が、癌と闘っていると知った時の驚きは今でもはっきり覚えています。医師である君のことだから自分の身体の状態はよくわかっていたでしょう。普通ならこれからのこと、家族のことを思って精神的にも弱りきってしまうはずなのに平然と診療を続けさらにボランティア活動にも取り組み続ける気力。そして「泥蹴会」の定例会にも病魔と闘いながら3年連続して参加してくれました。その時のプレーを見て、これならアへはまだまだいける。僕らの仲間はそう信じて疑わなかった。

そして私は、そんな元気そうにみえたあなたの人柄に甘えて、私の関係する組織の後援会長をお願いしてしまいました。身体のことを考えたらずっと引き受けられる状態ではなかったにもかかわらずあなたは即座に承知してくれました。そして、全て事情を知っている奥様もそれを許してくれた。ほんとに嬉しかった。その時は。



現役時代の杉浦裕

そしてあなたは、活動の最中はもちろん、活動が終わってからもずっと私を支え続けてくれました。ほんとにありがとう。本当は僕が支えなければならないのに。今となって悔やんでもしかたないことはわかっていますが、あんなことを引き受けさせてしまったことに対する申し訳なさ、そして引き受けてくれて、力いっぱい応援をしてくれたことに対する感謝の気持ちはとても言葉では言い尽くせません。アへ、ほんとうにありがとう。そして、ごめんなさい。

君が亡くなる一週間前「泥蹴会」の仲間へ寄せ書きをしたサッカーボールを君に届けることができました。我々の気持ちを伝えるボールが君へのラストパスになったのはせめてものことだったかと思っています。

アへ、たぶん君は今頃雲の上で僕らの仲間、ヘコさんこと陽雅文君と一緒にボールを蹴っていることでしょう。同期の仲間みんなが言っています。僕らはいつまでも、そしてずっと「チーム」です。雲の上で再びみんなが泥蹴会のユニフォームを着ることができる時まで、どうぞさらにサッカーのスキルと戦術眼を磨いておいください。

そしてそのこと以上に、あなたの最愛の奥様「りつ子さん」とお嬢様たち、そしてご親族の皆様を見守り続けてあげてください。

アへ、杉浦裕君へ

同期を代表して



東大現役時代の森井太一、御殿下グラウンドにて。

## 太一追悼文

藤原真一（昭和 53 年卒）

森井太一は、我々が昭和 48 年に入部したとき、一人だけ一軍デビューしたわが同期のエース的存在のストライカーでした。特に馬力と突破力が「売り」でした。

今でも鮮烈に思い出すのは、1 年生の時の千葉県市原市での天皇杯の予選です。ペナルティエリア付近でパスを受け、逆サイドにパスをすればフリーの味方選手がいるにもかかわらず DF のマークに対して強引にドリブルを仕掛け、相手に絡まれながらもシュートに持ち込み点を取ってしまったシーンです。試合後、監督の浅見先生からこっぴどく叱られているのを見ながらも、当時の私的にはエースストライカーと言う奴は、何が何でも自分で点を取ろうとするこういう奴を言うんだろうなと変に納得しました。

同期は 6 人と、人数が少なかった分仲が良く、オフには「スキー合宿」にもよくいきました。太一の「弾丸直滑降（要は曲がれない）」は見もので、足腰の強さを誇示していました。卒業前に全員で野沢温泉に出かけて、朝から日暮れまで滑りまくった後、民宿「モノミ荘」の温かいしるこをすすってから共同温泉浴場に出かけて、しこたま濁り酒をあおったのも良い思い出です。

太一は、同期の中で最初に結婚式を挙げた男です。奥さんの恵津子さんとは大学時代から付き合い合っていて、仲睦まじいのを羨ましく見ていました。ある時、一年先輩の茅野さんが卒業実験の土木工学科の水槽実験で悪戦苦闘していて、助っ人を頼まれたので行ってみると、既に太一と恵津子さんが一生懸命茅野さんの手伝いをしていて、このツーショットもまた微笑ましいものでした。

大学を卒業してから、同期は勤務地がバラバラになりましたが、集まれる人数で年に 1・2 度、飲み会やゴルフの会を続けてきました。また、在京メンバーは適宜 LB チームに登録して、其々継続的にゲームを楽しんできましたが、太一は一番熱心で、東京教育大付属高校 OB チームにも属して、奥様の話では殆ど週末はサッカー漬けだったようです。数年前、御殿下で LB と付属 OB と戦った時、彼は付属 OB で出場して、ドリブルで DF を交わして GK の私の脇にクリーンシュートを放って、転がった私を嬉しそうに見ていたのを思い出します。

驚かされたのは、60 歳を迎えた時です。あっさりと会社を退職して、第二の人生は再び「サッカーに賭ける」というのです。二人のお子さんを立派に育て上げた後、一度しかない人生の第二ステージをどう生きるか？ 彼らしい選択だと、同期で話したのですが、実際、暫くして会うと見違えるような逞しい肉体の男が蘇っていました。後から恵津子さんに聞くと、近くの川の土手でインタバルなど現役さながらのトレーニングを取り入れていたようです。

太一と一緒に最後の試合は、2016 年 2 月、幕張でのなでしこ OG とのマッチでした。2vs10 の完敗でしたが、彼はフル出場の活躍でした。試合の後私の車で北戸田のイオン・モールに行って試合の反省をしながら昼飯を食べ、西浦和駅まで送りました。「次回は茅野さんの上諏訪でゴルフだな。」これが元気な太一と交わした最後の言葉となりました。4 月中旬に体の痛みでゴルフはできないと連絡あった時は、サッカーやりすぎじゃないの？ 程度に軽く聞き流していたのですが、8 月 3 日にアッという間に逝ってしまいました。

とても短い第二のサッカー人生だったかもしれないが、愛妻恵津子さんと共に、最後まで、思うがままのドリブルで駆け抜けた、太一らしい生涯だったなあ。つくづくそう思います。

合掌



2016年2月、Zozopark Honda Football Area（海浜幕張）でのなでしこOGとのゲームにて。亡くなる半年前です。

## 同期 安秀和君 追悼文

高木 智（昭和 58 年卒）

2018.4.25 記

2018 年 1 月 7 日、安秀和君が 58 歳の若さで永眠した。会社を立ち上げて経営し、まだまだこれからバリバリと仕事をするはずだったのに、非常に残念でならない。

安君は、大学入学前にサッカーで膝を壊したが、サッカーが大好きで膝が治らないまま 2 年の時に入部してきた。結局 4 年の最後まで膝は完治しなかったが、非常に我慢強くサッカーをしていた。金属の入ったごつい膝サポーターをつけてグラウンドの周りをジョギングしてリハビリをしていたのを覚えている。4 年の時は 2 軍の面倒を見ていたが、彼の穏やかな性格と面倒見の良さで後輩によく慕われていた。

5 年ほど前にひょんなことから彼の母校である西高のシニア OB チームに参加させてもらい、一緒にプレーしたが、サッカーをしている姿として最も覚えているのかもしれない。

1983 年に大学を卒業して日商岩井（現 双日）に入社し、花卉などの園芸関係の輸入を行う部門に入り、オランダなど世界各地を飛び回り仕事に励んでいた。1995 年に、日商岩井が園芸関係から撤退することになり、世界各地で築いた人脈を基に、園芸関連の商社であるアンコーポレーションを単身立ち上げた。

安君が会社を立ち上げたとの連絡をもらい、私

は大丈夫かと思い会社の様子を見に行った。吉祥寺のビルの屋上にある小さなオフィスで 2 人ほど人を雇っていた。オフィスは小さいながら屋上は使い放題なので園芸関連のものを置くにはとても都合がよく、良い物件を借りたな、しっかり準備したんだな、安らしいなと思った記憶がある。会社を辞めてまで続けたいほど好きな仕事を持つことが羨ましくもあり、また本当にやめる決断力には敬服した。また社員の人たちが私の訪問をとってもフレンドリーに迎えてくれ、安君が社員に愛されているように感じた。安君が小さな会社は社員の質が全てなので雇うときは自分の会社でやっていける人をしっかり選んでいると言っていた。会社は順調そうだったのできっと人を見る目があったのだろう。

安君が会社を立ち上げた次の年から、母の日の花を安君に頼むようになった。彼から会社の取引のある信頼できる花問屋に安くきれいな花をたっぷりと送ってもらった。彼のおかげで毎年ささやかな親孝行ができた。母の日の花の代金を届けにいった毎年飲みに行った。ある年からついでだからと彼が同期のみんなにも声をかけるようになり、毎年恒例の吉祥寺での飲み会となった。中谷や和田がほぼ毎回出席して、他の同期も日程が合えば来てくれて、楽しい飲み会となった。そういった意味で、同期の中で一番人の世話ができるし頼りになる友達だった。

昨年も、いつものように母の日の花のお願いと飲み会を行い、「たまには吉祥寺以外で飲もう、11 月頃は出張が空くのでメールするよ」とのこ



4 年生の冬、現役引退直後に、同期 15 人中 13 人で日光へ。

中列右端（中腰前かがみ）が安君、後列左から 4 人目（顔だけ）が筆者、高木。

とになっていた。12月になってもメールが来ないと思っていたら、奥さんから、彼が入院してかなり具合が悪くなっていて高木に会いたいと言っているとの電話を頂いた。翌日、中谷と和田と一緒にお見舞いに行くと、いつもの穏やかな彼がそこにいた。その後同期の多くもお見舞いに行き最期にみんなに会えたことは彼にとってもよいことであったと思う。

この追悼文は4月に書いているが、この時期にはいつも彼に母の日の花のお願いのメールを出して、飲み会いつごろにしようかといったことをメールでやりとりしていた。この時期に彼がいないと、悲しいしさびしいし、とても戸惑っている。

彼が残したアンコーポレーションの発展を祈り、彼が続けてくれた同期の飲み会を、今後も彼のことを思い出しながら続けて行きたいと思っている。

## 追悼 今井勝典君(昭和63年卒)

伊藤 洋(昭和60年卒)

2018年4月24日、今井君のお通夜に行った。参加者がとても多くて受付からお焼香まで1時間もかかった。彼のこれまでの活躍ぶり、交友関係、人柄を十分に偲ばせるものだった。お通夜の帰りに利重(63年卒)から今井の追悼文を東大サッカー部の100周年記念誌に書いてくれないかと頼まれた。今井の思い出は沢山あるが、伊藤さんたちが4年生の時の夏合宿の今井が一番印象

に残っているから、とのことだった。

昭和59年(1984年)、前年の東京都1部8位、2部へ自動降格という結果を受け、1部復帰を目標に僕はシーズンをスタートした。数年前から、東大を受験しそうな進学校の有力選手にアプローチする新入部員勧誘策を平林コーチ(以下、バヤシさん)の発案で始めており、前年には鈴木修二(62年卒)が入り、この年は清水東の久保田、読売クラブのユースにいた利重をはじめ、外野、鹿園、そして広島学院から今井と有望新人が目白押しであった。

春のシーズンは、東京都リーグ1部・2部合同の春季対抗戦(当時、リーグ戦は秋のみ)で、関東2部からの降格組である慶應、明治学院を破って優勝。京大戦も2対0で勝利し、4連勝。とてもいいスタートを切った。

夏の合宿は山中湖で1回、検見川で4回。今井はディフェンダーとして同じポジションの僕や山本昇(61年卒)と同部屋だった。今井はスタメン候補として期待されていたが、グラウンドではバヤシさん、僕、山本等の指示を消化しきれず、本来のプレーが出来ないようであった。プラス、1年生の雑用もこなさなければならず、同室の僕らが色々うるさいことを言うのも負担になったのだろう。ある日突然、「耳が痛(いと)うて、痛うて。」と大声の広島弁で言い出して、練習が出来ないという。病院で診てもらったところ中耳炎との診断であったが、仲間内では、バヤシさんや伊藤の言うことが聞きたくない、聞きたくないと思っていたら耳が痛くなって、聞こえなくなった



1985年7月の京大戦後の懇親会(検見川合宿所の食堂)  
一番右が今井君。

というのが専らの診たてであった。

秋のリーグ戦は3連勝と出足は良かったものの結果は3勝2敗2引分の4位。目標の1部復帰はならず、当時、東大サッカー部史上で最悪の結果を残して4年生の僕らは卒業した。

しかしながら、その後3年間の東大は強かった。その中心に常に僕らが4年生のときの1年生、今井たちがいた。彼らは東大サッカー部の黄金世代だったと思う。2年生になった昭和60年は東京都2部で優勝、1部への復帰を果たす。3年生の時(昭和61年)には東京都1部で3位となり、関東大会に進出。しぶとく勝ち上がり関東2部との入替戦まで駒を進めた。結果は学習院と0対0の引分けで関東2部への昇格はなかったが、翌年に大いに期待を抱かせる見事な結果であった。

今井たちが4年生となった昭和62年は前年の主将であった鈴木修二も選手として残り、関東リーグ復帰の可能性は十分と思われた。東京都1部リーグでは2位。迎えた関東大会の1回戦、相手は千葉大。東大は圧倒的に攻め、何本ものシュートをあげせながら、相手の唯一のシュートから失点し、まさかの敗戦。彼らの4年間は早すぎる幕を閉じ、関東リーグ復帰の夢は呆気なく潰

えてしまった。

今井のプレーはダイナミックさが特徴だったと思う。身体が頑丈で、しかも軽快に動き、ボール奪取からロングパス、前線へ一気に駆け上がる。そんなプレーが思い出される。そして素晴らしいスタミナ。労を惜しまないディフェンス。グラウンド外でのひょうきんな表情と言動。

今井が卒業して警察に入ると、僕は後輩たちから「伊藤さん、今井に謝っておいた方がいいよ。復讐されるよ。今井、警察なんだから。」と言われた。ずっと会う機会が無かったが、3年前(2015年)の京大戦の時に御殿下グラウンドで本当に久しぶりに会った。結局それが最後の機会になったのだが、その時、今井は東京オリンピックの組織委員会へ警備を担当するために出向になって、「色んな人と一緒に仕事が出来て、すごく楽しいんですよ。」とニコニコしながら話していた。

2018年4月、63年卒の鹿園から突然、今井の訃報が届いた。驚き、とても悲しかった。すぐに「今井にまだ謝ってなかった。」と思った。そして「耳が痛うて。痛うて。」という検見川の夏合宿のかん高い広島弁が聞こえて来た。

今井君のご冥福を心からお祈りします。



## 卒業生・現役の寄稿 コーチへ寄せる

### 林健太郎コーチへ

宮川啓輝（平成24年卒）



林健太郎コーチ（『YEAR BOOK 2012』より）

「林健太郎がア式のコーチになる。」森元（同期主将）からその知らせを受け取ったのは2011年元旦の国立競技場で、例年のごとく、天皇杯決勝の運営アルバイト（通称センターサークルシート）のため、競技場内で待機していた時のことだったと思う。

\* 林健太郎氏はヴェルディ川崎やヴィッセル神戸などで活躍し、日本代表経験もある元Jリーガー。

記憶が定かではないが、共にアルバイトをしていた白井先輩（2011卒）が、健太郎さんの名前を聞き非常に驚いていたような気がする。恥ずかしながら、当時、私自身も健太郎さんの名前は知らなかったため、Googleに「林健太郎 サッカー」と打ち込み、検索をかけた。ゲームメイカータイプでボランチやCBとしてプレーしていたこと、マエストロと呼ばれていること、元祖コロコロPKの使い手だということなど、色々と事前情報を手にいれることができたが、とりわけ目を引いたのは、日本代表合宿にて、当時の代表監督であ

るフィリップ・トルシエに本気の体当たりをかまして肋骨を骨折させたという情報だった。この時私は、今までの人生で関わったことのないような変な人が来るのではないかと、恐れおののいた。

というのは冗談だが、かくして健太郎さんがコーチとしてア式にやってきた。初めの1、2週間こそ不安を感じたが（おそらく健太郎さんも緊張していたのだと思う）、健太郎さんは想像よりもはるかに気さくでコミュニケーションの取りやすい人だった。部員が健太郎さんのモノマネをしたり、健太郎さんが鈴木宏樹（2013卒）のことを「ドゥリ」と呼ぶようになるまで、それほど時間は必要なかった。これなら、試合中にミスをしてでもスタンドから「相変わらずへたくそだな」とやじられることはなさそうだ。

健太郎さんが来る以前、私は恐れを抱いていたと書いたが、実際は肋骨を折られることを恐れていたわけではない。新しいコーチが来ることで、前年までスターティングメンバーとして出場していた自分のポジションが白紙に戻り、結果としてポジションを失うことに恐怖していた。この年は新入生として加入予定だった添田（2015卒）や、当時天才と呼ばれていた東野（2014卒）の存在も、私の焦りを助長する要因だった。拍車をかけるように、1月のオフ期間中に自主トレーニングで怪我をしてしまい、健太郎さんがコーチに就任して1か月間をリハビリ生活からスタートしたことでさらに私は焦っていた。

シーズンが始まって約1か月後の検見川での合宿中、ようやく復帰した私に健太郎さんが声をかけてくれた。「やっと復帰したのか、待ってたよ。期待してる。」と（詳細は覚えていないが、このようなニュアンスだったと思う）。健太郎さんにとっては、深い意味はなかったのかもしれないが、私にとってはこの言葉が救いになったし、大きなモチベーションになった。この人の期待に応えたいと思うようになった。

私が健太郎さんの指導を受けたのは、1年間にも満たない短い時間ではあったが、これまでのサ

サッカー人生の中で最も濃い時間だったように思う。特に、オフザボールでのボールの受け方についての指導は、「なぜ」そうすべきなのかということも含めて、それまでの20年弱の期間、どれだけ自分が何も考えずにピッチを動いていたのかということの思い知らされた。健太郎さんの指導は、決して無理難題や高等技術を求めるものではなく、ひとつひとつのプレーの選択やポジション取りの意味を考えさせられることが多かった。それはチームの共通理解を高め、ア式のサッカーは前年までのそれから大きく飛躍を遂げた（と思う。）それまでア式のサッカーの攻撃の形は、前線のタレントを頼りにしてロングボールを送ることだった。しかし、この年からロングボールだけでなく細かいパスワークで相手を崩す形が見え始めた。前年にチーム得点の半数以上を挙げた久木田紳吾（2011卒）の抜けたチームが、東京都1部で優勝を成し遂げることができたのは、そのことによるところが大きく、間違いなく健太郎さんがいなければ達成できなかったことだろう。

最後にこの場を借りて、健太郎さんへの感謝を述べたい。

健太郎さんから指導を受けたのは1年に満たない短い時間でしたが、本当に多くのことを学ばせていただきました。そして、私のことを信頼して試合で使い続けてくれたことに本当に感謝しています。私は、飛びぬけたスピードやフィジカルがあるわけでもなく、かといって特別な技術を持っているわけでもありませんでした。スタメンとして試合に出ることに自信はありましたが、健太郎さんではない他の誰かがコーチであれば、東野や添田がスタメンに選ばれていた可能性も高かったと思います。そんな私にとって、健太郎さんの指導を受けられたこと、目立たないプレーの一つ一つまで見ていただき、スタメンとして使い続けてもらえたことには感謝しかありません。関東昇格という最大の目標を達成できなかったことは残念でしたが（産業能率大学戦での健太郎さんの「ミヤガワ後ろ！」という声はいまだに夢に出てきます笑）、それも含めて本当に幸せな時間でした。ありがとうございます。いつか健太郎さんが、Jリーグのクラブを率いて指揮をとる姿を観ることを楽しみにしています。

## 健太郎さんとの思い出

有山大樹（平成25年卒）



林健太郎コーチ（『YEAR BOOK 2012』より）

H25卒の有山と申します。林健太郎コーチ（以下、健太郎さん）に関して寄稿させて頂けるということで、私は特にスタメンというわけではありませんでしたが、僥越ながら健太郎さんについての思い出を語らせて頂きたいと思います。もう一名の記事が恐らく戦術的な話になると思われるので、私は、人物であったり感覚的な部分にフォーカスした思い出を綴らせていただきます。

### トルシェの肋骨を折った男

健太郎さんがア式のコーチに就任したのは私が2年から3年に上がる、2011年のことでした。福田さん（現東京ユナイテッド監督）がツテをたどって元プロを連れてくるらしいという噂が流れ、それが健太郎さんらしいということを知り、Wikipediaで調べたら「トルシェの肋骨を体当たりで折った」というエピソードが書かれていて、「終わった」と思ったことを覚えています。

最初の印象は「でかくて怖そう」でした。「でかい」と「怖そう」が4：6くらいだったと思います。話し方も訥々としており、「怖そう」が7くらいまで上がりました。

後で小耳にはさんだ話ですが、健太郎さんも指導者としてのキャリアは浅く、当初は我々学生とどう接して良いかわからなかったとのことでした。

このように、実は若干緊張感のあるスタートを切った健太郎さんとの関係性ですが、時間と共に和らいでいきました。忘れもしないのが、亜細亜大学で行った練習試合で、いつものように作戦板を使って試合前のミーティングを行っていた時のことです。戦術の解説をしていた健太郎さんが唐突に「ドゥリがこのタイミングで上がるな？」と言いついたのです。知らない人にとっては意味不明かもしれませんが、ドゥリというのは私の同期である鈴木宏樹のあだ名であり、健太郎さんはそれまで「ヒロキ」と彼のことを呼んでおりました。そこからの唐突なドゥリ。当然ミーティングはざわつき始め、健太郎さんも「ドゥリだよな？」と恥づかしそうに笑っておりました。これはひとつの小さなきっかけに過ぎませんが、細かいところで健太郎さんの方から我々の方に歩み寄ってくれていたのだと今思います。こうして、春ごろにはもう「愉快で親しみやすい人」という印象に変わっておりました。

### 緻密なサッカー観と 正確に伝える論理性

健太郎さんの人間性としては上記のように、とても愉快で親しみやすい方ですが、指導者としての側面について、僭越ながら少し触れさせていただきます。

まず、健太郎さんは元プロ選手で、日本代表監督に体当たりをかますまで上り詰めた方なので、当然サッカーを誰よりもよく知っていますし、練習の引き出しも豊富です。しかし何より、それを我々に論理的に伝える能力がとても高く、我々に何が必要か、どう動けばどうなるのか、そうした「サッカーの力学」を咀嚼して伝えてくれました。正直、もう少し粗野な方が来るのかなと思っていたので、緻密に積み上げられたサッカー観、それを正確に伝える論理性に衝撃を覚えました。

また、健太郎さんは強烈なモチベーターでもありました。我々以上に成功も挫折も味わい、日本サッカー界のピラミッドを駆け上がったという経験は我々の誰もを持ちえないことで、そうした経験からくる言葉の一つ一つには、確かな裏付けや重みがあったように思います。ジダンがリアル・マドリードで結果を出せているのは、キャリアに由来するモチベーターとしての能力・説得力がずば抜けているからだ、という記事を読んだことが

ありますが、健太郎さんも同じように、勝つためには何が必要かということ、時に厳しく、時に優しく伝えてくれました。（ちなみにですが、健太郎さんはヴェルディ時代にジダンと対戦した経験があるのですが、うまかったそうです。）

最後に、当たり前すぎて失礼なのは承知ですが、とてもサッカーがうまかったです。健太郎さんは、引退してまだ間もなかったこともあり、積極的に練習に混ざるタイプの方でした。私はリザーブチームのボランチだったので練習でよくマッチアップしていたのですが、姿勢がよく、キックが正確で、自分の領域を完璧に把握していました。実践されるプレーから学ぶことは多く、上述の2つの特徴も相まって、とても質の高い練習を提供してくれていたように思います。

ア式で指導者としてのキャリアをスタートした健太郎さんは、その後東京ユナイテッド（旧 LB-BRB TOKYO）のコーチとして、チームを関東1部まで昇格させました。しかし、実はこの間に半年間ほど東大LBに所属しており、私も一緒にプレーさせて頂きました。短い期間とはいえ、一緒に選手としてプレーできたことは私の密かな誇りでもあります。東大LBをやめユナイテッドのコーチをされている間にも、私とグラウンドで会うと「まだやってんのか!」と良く話しかけてくれました。私に「まだやってんのか!」と言ってくれるのは、親と健太郎さんくらいのものです。

取り留めのない話に終始してしまい恐縮ですが、健太郎さんとの出会いは本当に大きな意味があり、サッカーをより好きにさせてくれました。そして、そういう部員は当時多かったと思います。

健太郎さんにはこのまま順調にキャリアアップし、是非ともJリーグ、日本代表の監督になって頂きたいものです。そして選手に体当たりされ、肋骨が折れた際はご連絡ください。Wikipediaを更新しておきます。

## 星貴洋コーチのこと

酒井加里武（平成29年卒）

### 自分の戦術を実践できず、 結果に対する責任は負う

星貴洋さんが僕らのコーチとして就任したのは、私が2年のとき（2014年）であった。当時は、前



星貴洋コーチ（『OFFICIAL  
YEAR BOOK 2015』より）

年までコーチを務めていた林健太郎コーチ退任以降、コーチはいなかった。ピッチ上でプレーヤーが主体的に試合展開を読んで判断する力をつけることを目的に、真に学生主体の新チーム活動を始めた。自分たちが勝利するためにどのようなサッカーをすべきか、その戦術を実践するための練習をどう考えていくかも大きな関門の一つであった。

そのような試行錯誤をしていきリーグ戦の準備を進めていた3月ごろであったと思う、新コーチ就任の話があり驚いた。

それまで様々な試行錯誤を重ねリーグ戦に対する準備をしてきたというのに、今から新しいコーチが就任し新たな戦術を練習されても間に合わない。リーグ戦直前すぎる。当時はそのような印象を持った。

ただ、その時のコーチ就任にあたっては、コーチは「補佐役」という条件がついていた。つまり、学生が考えた戦術やプランは変更せず、コーチに戦術的なアドバイスをしてもらう。サッカー指導経験や戦術を実践した少ない学生だけでなく、経験のあるコーチにアドバイスをもらうことで、より良い強いチームが作れるだろうということであ

った。

そんな都合の良いコーチはいるものかと最初は疑問に思った。コーチが自分の実践したい戦術をできず、結果に対する責任は負わなくてはならないというのは利点が少なすぎると思った。

星さんはそのような状況でコーチを引き受け、難しい役回りの中で僕らア式蹴球部と関わりを持ち始めた。星さんは僕らに技術的戦術的なアドバイスを与えると共に、星さん自身も、この難しい状況で得られるものがあるだろうという挑戦的なコーチであった。

### 足りない基礎を 徹底的に、情熱的に

星さんに指導していただいたことは99%が基礎的なことであった。逆にいうと、ア式蹴球部が強くなるために足りていないことは、どこまでも基礎的なことであった。基礎が重要でそれができれば応用などいくらでできると言ったものだが、基本的な技術・戦術レベルがはるかに低かった。特に指導されたのは、ゾーンディフェンスとボールを正確に止めること蹴ることであった。星さんはこれらを徹底的に繰り返し練習に取り入れ、できていない人には何度も何度も指導し続けた。できていないことが指摘され続けた人の中にはもう懲り懲りだと思った人もいるだろうが、それでも星さんは指導し続けた。止める蹴るなどの基礎的なことは地道に繰り返すしかないし、ゾーンディフェンスも悪いポジショニングをこまめに刻一刻修正するしか方法はなかった。一次関数的には上達しない僕らに対してそれらをめげずに指導していただいたことは感服しかない。

星さんはまた情熱的な人であった。リーグ戦のある試合、前半不甲斐ない試合内容であった僕らに憤りを感じた星さんは、自らの時計を投げつけ、使い物にならなくしてしまった。

その時は流石にやりすぎだとも思ったものだが、星さんはそこまで僕らを信頼し、要求したことができるはずだと考えていた。できると信じているからこそその行動であり、そこまでの情熱があったからこそ僕らに対して何度も何度も基本的な重要なことを指導してくれたのだと思う。

星さんには自分のサッカー選手としての私生活面での甘さも厳しく指摘された。リーグ戦中にはコンディションを整えるために練習の量や強度を

調整していたが、オフ・ザ・ピッチでちゃんと栄養を摂取し休息を取れているのかということを何度も言われた。部活で管理できる練習だけでなくオフの部分での管理は個人に任されており、当時も栄養指導や食事調査などで栄養面での部員への管理は行われていたが、睡眠などは管理できていない部分であった。勉強や課題で夜遅い人もいただろうが、そうではなく夜更かししていた人もいるだろう。そこに対して星さんからは厳しく指導をされたし、その体調管理に対する意識レベルは低かったのだと思う。練習や試合でベストを尽くすのはもちろんだが、そこでベストを尽くすための準備の重要性、その認識の自分の甘さを再認識させられた。

### 貴重な経験を これからの人生に

星さんにコーチとして指導していただいた2年間において、自分は一番信頼をおかれていた選手の一人だと思う。授業のため十分に練習に参加できない時も、練習においてミスが多く調子が出ない時も、リーグ戦ではずっと出場させてもらった。自分にとってリーグ戦という緊張感のある試合に出場することで学べたことの多くは、コンディションにかかわらず出場機会を与えてくれ、試合においてチームの結果に関わる重役を担わせてくれた星さんのおかげである。心から感謝したいし、その貴重な経験はこれからの人生に必ず生かしていきたい。また、東京ユナイテッドFCにおいて新たな挑戦を続けている星さんのご活躍を祈っている。



## 野口桂佑 GK コーチへ

石川悠吾（平成 29 年卒）



野口桂佑コーチ  
（『OFFICIAL YEAR BOOK 2015』より）

2014 年から GK コーチに就任した野口さん。3 年間で GK 陣に技術・メンタル面ともに大きな成長をもたらしてくれただけでなく、チーム全体にとっても大きな存在だった。常に明るく、ときに厳しく指導いただき、個人的にはサッカー人生を変えてくれた恩師だと思っている。改めて野口さんとの出会い、指導、そして残してくれたものについて振り返ってみたい。

### まずはキャッチングから

「キャッチングを意識すればトップになれる」。2 年生の初夏、野口さんが掛けてくださった言葉が僕のサッカー人生を変えたと言っている。GK にとって大事なものを見失いかけていた時期に野口さんと出会い、GK として、人間として、大きく成長し、そして何よりこのポジションの面白さを改めて実感することができた。本当に感謝しかない。

それまで継続的に GK コーチの指導を受けた経験がほとんどなかった僕にとって、野口さんの指導は衝撃的だった。特に最初の練習で行ったキャッチング練習。基本中の基本で、新たに教えてもらうことなどあるのかと正直思った。野口さんは「キャッチは絞るように」、と教えたが、いまいち要領がつかめなかった。すると僕たちの頭をボールに見立てて自ら実践して感覚を覚えさせてくれた。とてもわかりやすい教え方だった。結局このキャッチングこそが、冒頭の言葉につながったし、

ア式GK陣全体がいつも立ち返ることができる原点になった。

### 最先端

常に最新の理論を取り入れようとする姿勢も持ち合わせていた。コーチとしても素晴らしいし東大ア式のコンセプトにもとてもよく合っていたと思う。たとえば、「フットワーク」と呼ばれる技術。シュート前に小さくはねる「プレジャンプ」は、タイミングがずれるため良くないというのが日本でも常識になっていたが、それを細かなステップとして取り入れタイミングを合わせるフットワークは、いまでは欧州のトップレベルのGKはほとんど実践している。しかし日本ではプレジャンプと混同され敬遠されがちで、ア式も例に漏れなかった。野口さんは部室にGK陣を集め、ノイアーなどのセーブ集を見せ、そのメリットを説明してくれた。GK陣のセーブ率向上の要因の一つになったことは間違いない。

そのほか「ステイビッド」など少しずつ新たな技術を導入してくれたが、その一つ一つがなぜ良いのか、また実際の試合のどのような場面で使うシーンが出てくるのかということを、しっかりと説明してくれた。常に根拠を示してくれたおかげで、僕たちは野口さんを信頼して、迷いなく練習に取り組むことができた。

### 安心感

GKというポジションは、経験のない人にとってはなかなか理解しにくいポジションだ。果敢なチャレンジも、うまくいかなければ集中を欠いたプレーだと見なされがちだ。僕たちは、野口さんがこちらの意図を理解してくれたおかげで積極性をいつも持ち続けることができた。時には、チームに対しGKとしての考えを代表して伝えてくれることもあった。意図のあるプレーなら必ず野口

さんが理解してくれる。そんな安心感が僕たちのプレーを支えていた。

### 道具

たびたび登場するアイデアグッズも野口さんの練習の特徴だった。木板で作った自作の台は、筋トレに用いたりボールをはね返したりと様々な用途に使うことができた。他にも理想的なキャッチングの手の形で手袋をプラスチック板にくっつけた、キャッチングフォーム強制ギブス（勝手に仮称）など枚挙にいとまがない。奇抜だけでなくどれも実用的だった。そうした道具を用いた飽きの来ない練習は、常に新しい刺激を与えてくれた。

### GK ファミリー

そして一番の遺産は「GK ファミリー」の文化ではないだろうか。当然ながらGK陣は、ただ一つのポジションを争う最大のライバルだが、それ以上に特殊なポジションの難しさを理解し合える数少ない仲間だ。野口さんを中心に、GKからチームを盛り上げることをモットーに、トップから1年生、OBまで一丸となってピッチ内外で一つのチームになることができた。きつい練習では声を掛け合い、公式戦のピッチでは皆の信頼を感じられた。チーム内でもGK陣は独特の一体感があつたはずだと思う。ア式GKの伝統としてこの空気感は後輩たちにも引き継いでほしい。

こうして振り返って、本当にいろいろなことを学んだと実感している。改めて感謝したい。そして、ア式を離れてからも野口さんはコーチとして、社長として、GK育成の様々なプロジェクトに取り組んでいる。きっとこれからも日本のGKのレベル向上に貢献してくれるはずだ。次はどんな挑戦をしてくれるのか、いつも楽しみだ。



## 卒業生・現役の寄稿 岩政新コーチと工藤副主将の対談

(LB 会報 NO.17 (2017 年 5 月) より転載)

岩政大樹 山口県出身。東京学芸大学蹴球部を卒業後、J1鹿島アントラーズに入団。Jリーグ史上初の3連覇に貢献するなど中心選手として活躍し、日本代表にも選出される。その後タイのクラブチーム、J2ファジアーノ岡山を経て2017年2月より東京ユナイテッドFC (<http://tokyo-united-fc.jp>) に選手兼コーチとして加入。同時に東京大学運動会ア式蹴球部コーチにも就任した。



工藤航 神奈川県立湘南高校出身、工学部システム創成学科4年。早くから公式戦で活躍し、昨年から不動のセンターバック (DF) としてチームを牽引する。また、昨年の後期リーグより副将を務める。

**岩政コーチ：**(工藤選手に) ア式に入った理由は？

**工藤：**ア式に入った理由はシンプルで、一番情熱を持って取り組めるのがサッカーで、サッカーが一番時間をかけることができ本気で取り組めるのはア式だったからです。他に迷いもせずここを選んだ。元々、難しいと思われることに挑戦するのは好きでした。東大のサッカー部が勝つことは難しいと思われるだろうと考え、そんな中、勝って、入部当初も部は関東昇格という目標を掲げていたので、関東昇格にコミットできたら、という思いがありました。

**岩政コーチ：**大学を受験する段階でサッカー部に入ると決めていたの？

**工藤：**そうですね。高校2年生の冬ぐらいから受験することを決めたと同時にサッカー部に入ってサッカーしようという風に決めました。

**岩政コーチ：**そうだったんだ。がっつり大学でもサッカーしたかったということだね。

**岩政コーチ：**サッカーをすることで工藤は何を得たいと思っているの？

**工藤：**一言で言うと、刺激のある生活です。公式戦があり、独特の雰囲気の中で闘うという機会が保障されているので、それに向かって努力する日々を送っていききたいな、というのがありました。

**岩政コーチ：**みんなそうなの？ (入部を) 迷った

りしないの？

**工藤：**周りの人には結構迷っている人もいました。

**岩政コーチ：**そうだよね、だって楽しい事は他にもあるしね。

**工藤：**そうですね。

**岩政コーチ：**苦しい事の方が多いしね、部活って。

**工藤：**はい。

**岩政コーチ：**大学に入ってから、(入部当初に抱えていた)気持ちが変わる事はなかったの？

**工藤：**変わるどころか気持ちは強くなっていきました。東大で勝ちたいという気持ちは年を追うごとにどんどん強くなっています。

——岩政さんはいつ、東京学芸大学のサッカー部に入る決断をされたのでしょうか。

**岩政コーチ：**元々は、高校卒業後は普通に地元・山口でプレーしようかなと思っていて、山口や広島大学の大学に通って、サッカーはサークルくらいでやろうかなというくらいに考えていました。

しかし、高校3年生の最後の試合に足を骨折して出られなかった。本気でサッカーをする最後の花道にしようと思っていた大会が突然なくなってしまい、大学でもサッカーを(本気で)する方に(方針を)変えまして。そこで進路を変えるという決断がそもそも、学芸のサッカー部に入るとい

うことだったので、学芸に行くということがサッカー部に入ることとセットでした。

——大学サッカーの魅力について

**工藤**：大学ならではの魅力を考えてみると、高校までの環境と比べて自分たちで考え、自分たちで環境を整えなければならない点でしょうか。高校までだと、顧問の先生がグラウンドを取ってくれて、他校の監督と話をして練習試合を持ってくる、それが当たり前だった。でも大学に入ってみると、学生がグラウンドを取ったり、(相手チームの、同じく学生の担当者と話して)練習試合を持ってきたりしてくれる。そうして学生が試合を組んでくれる人であったり、学生トレーナーであったり、テクニカルスタッフであったり。プレーヤー以外の道でチームに貢献する道を自分で探している人たちがいて、そういう中で、自分の手で環境を作ることの大切さを学べるのが一番の魅力かな、と思います。

**岩政コーチ**：自主運営という点でしょうね。大学の部活は、部の仲間という時間が長いので、その中で自分たちでサッカー部を作り上げていくという感覚になる訳ですね。自分たちで作る環境というのはあまりないでしょうね。高校までももちろんですし、社会人になってもなかなかそういう意識は持ちにくい。自分たちのものだという意識がやっぱり大学サッカーならではのですね。

——大学サッカーで得たこと

**工藤**：前と比べて格段に、ピッチに立つことの重みというか、チームを代表して試合に出ることの重みを受け止められるようになりました。試合自体は90分間で終わってしましますが、その90分の試合のためにトレーナー、テクニカルスタッフ、グラウンドを取ってくれる人、色んな人が動いてお金も動くんですね。試合に向けての練習にも選手やスタッフのみんなが時間を割いて本気で取り組んでくれている。日々の活動でそれを肌で感じられる。ピッチに立つことはすごく重い意味のあることなんだな、と実感しました。

**岩政コーチ**：僕の場合は単純にプロへの道が開けましたからね。高校まではノーチャンスだったのが、道が開けた訳ですから得たものは大きかった。日本サッカーの場合は、高校で芽が出なかった選

手にもうワンチャンス残されているというのは良いな、と思います。あとは、大学サッカーをやると(サッカーをする時間が)4年間確保されますから、自主的なサッカーへの関わりによって考えの部分も変わりますよね。主体的に動く時と流動的に動く時とでは、頭の使い方・考えることが違いますからね。それによって戦術的にも、あるいは個人戦術、チーム戦術あるいはサッカーへの取り組み、いろんな面で変化が起きたのだと思います。

——(岩政コーチに)ア式に来て2ヶ月半、感じている手応えや課題などがありますか。

**岩政コーチ**：ア式は、勝てばいいという話ではないじゃないですか。一つの試合に勝ったからといってそれから先の人生が豊かになるわけではないでしょう？部員たちが積むア式での経験が、それぞれの未来に活かされてほしい、今というのが。未来に繋がってほしい訳ですよ。ということは目の前の試合に勝つ方法論を一つ教えたところで何も将来には結びつかない。やはりサッカーによって彼らに学んで欲しい。手応えというのは最後まで得られないのだと思いますし、彼らの将来の顔を見た時にわかることだと思いますからね。何を彼らに伝えるべきで、何を伝えないのかなど、ちゃんと判断しながら付き合わなければならないと思っています。

——自分の目標は？

**岩政コーチ**：まずは僕が彼らとの付き合いの中で成長すること。そこがまず第一にある。彼らには、サッカーも上手くなってほしいですし、人間としても色んなことを学んでほしいです。そういうことをどうすれば伝えられるかということ自分をしっかり判断できるようになること。それが目標でしょうね。

**工藤**：今年のチームの目標は東京都一部に復帰することですが、それに付随して自分の目標も決まってくると思っています。その中で、副将というチームを率いる立場の一員として、岩政さんも仰っていましたが、人間的にもっと成長する必要があると感じています。自分の目標は、抽象的ですが、人間的に成長して昇格に貢献することです。

——岩政コーチにこれから特に学んでいきたいこと



**工藤：**岩政さんが来られた当時、「サッカーの楽しさを教えてやる」と仰っていたことがすごく印象に残っています。関わった時間はまだ短いですが、岩政さんが来られてから、「最近サッカー楽しいな」と前より思えるようになりました。もっと先にもっと楽しいことがあると思っているので、サッカーの本当の楽しさ、それを一番教わりたいなと思っています。

——副将（部及びチームを率いる人間）に期待すること

**岩政コーチ：**率いる立場の人間は、人の心をどこまで想像して接することができるかが大切です。率いる立場になるとどうしても自分の考えに固執しがちになってしまう。例えば後輩と接する時、「この子をどのようにすればチームにより貢献出来る選手・人間に出来るか」を考えること。どこまで深くその人間に入っていけるかが大切。「がんばれよ、こっち来いよ」と言うのではなく、その人の身になり、「頑張れよ」という言葉をかけ

るのがいいのか、もっと冷静に語りかけるように喋ればいいのか、彼の性格、生い立ち、育ってきた環境などを踏まえ自分の中で考えて落とし込んでいくと相手への伝わり方がまったく違ってくる。そういうことをどこまで考えられる人間になるかということは大学サッカー部の4年生にとって、副将にとって貴重なことだと思う。上に立つ人間、というより役割を与えられた人間というのは他の人たちのパフォーマンスをどうマックスまで持っていけるかを、彼ら一人一人の深いところまで入っていけるかを考えることが大切だと思いますよ。

**工藤：**ありがとうございます。

——新入生への一言

**岩政コーチ：**本気でサッカーをやりたい人だけ来てください。

**工藤：**本気でサッカーをやりたい人にとって心地よい環境を常に目指してやっておりますので、志ある人は是非共に闘いましょう。



## 卒業生・現役の寄稿

# 現 役



小尾真里奈  
(女子部 4年)

LB会の皆様、男子部の皆様、ア式蹴球部創立100周年誠におめでとうございます。また平素より多大なるご支援ご協力を賜り、誠にありがとうございます。女子部2期生で昨年主将を務めました小尾真里奈と申します。歴史あるア式蹴球部の一員として100周年を迎え、女子部としても5周年を迎えることができ、嬉しく誇りに思います。

女子部は私が1年生の時は先輩が4人しかいなかったため、現在部が存続して無事活動できていることを感慨深く感じております。当時人数が足りなかったにもかかわらず、私は試合ができないのではないかと、といったことを何も考えずにこの世界に飛び込みました。自分でもなぜ入部したのか論理的な説明はできませんが、今思うとサッカーの魅力と先輩方の魅力に惹かれ、直感で決めるという不確実なものでした。そんな私にとってア式女子は、今では練習中以外でも何をしていても、ふと考えてしまうほど、生活の一部と化しています。ア式女子にかける思いがいつのまにか強くなり、この部活をより良くしたいという思いで日々活動に取り組んで参りました。

時々この部の未来について、数年後には余裕で11人揃い、リーグ戦ではスタメン争いが起きるようなチームになっているのだろうかと思いを馳せたりします。現在は11人程度で活動していますが、そんなことを考えてしまうのも例年新歓活動には苦勞をしており人数が少ないことでの大変さも沢山経験しているからだと思います。

なでしこジャパンがドイツW杯で優勝したのもう7年前となり、女子サッカーブームは影

を潜めています。新歓活動では「サッカーは無理です。」と門前払いされてしまうことも多々あり、学校の授業で抱いてしまった苦手意識を塗り替えることはかなり難しいです。また、メジャースポーツであるからこそ競技に目新しさがなく、新しいものや珍しいものが好きな女子には響きにくいということもあります。そんな中でも、体験練習に来てくれて他の部に入る決意を捨てて入部してくれた子、そして東大ア式女子に入ることを考えて東大を受験し入部してくれた子もあり、今ではかけがえのない仲間となりました。その喜びを感じ、部を存続させるためにも新歓活動には毎年かなりの時間と労力を費やしています。

それでも人数の少ない私たちの今の活動において重要なのは、先輩方が中心となって立ち上げた文京LBレディースの存在です。自分の親よりも歳の離れた方と「ナイスプレー」の声を掛け合う。小学生のお子さんを持つママさんとプレーについて真剣に話し合う。年下の中高生のプレーから学ぶ。そんな世代を超えたスポーツでの繋がりは、なかなか貴重な経験だと感じております。サッカー歴は様々ですがお互いに刺激し合い、楽しく活動させていただいています。今後部が多少大きくなってもこの繋がりを大切にしていきたいと思います。

部を成長させるため、新入生に魅力的に思ってもらうため、周りの方々に応援してもらうために私たちがやるべきこと、できることはまだたくさんあります。例えば、リーグ戦でより良い戦績をあげること、高校女子サッカー部との交流では憧れてもらえるようなカッコいい姿を見せること、自分たちの活動に誇りを持てるように各自が精一杯取り組むこと。少人数とは言えなくなり、当事者意識が薄れてしまいがちな今の時期だからこそ、各自が気を引き締め主体的に動くことが必要だと思います。私自身昨年は新歓代表と主将の任務を果たすことで必死でしたが、今年は最上級生としてピッチ外では下級生をサポートするとともに、冷静に俯瞰して課題解決に取り組み、ピッチ内で

はプレーや声で引っ張っていけるよう努めたいと思います。

素晴らしい環境で素晴らしい仲間と夢中になれるものを見つけることができ嬉しく思うとともに、今までア式蹴球部の活動を積み上げてきて下さったOB、OGの皆様には頭が上がりません。今後日々学び成長し、ア式蹴球部の名に恥じないよう皆様への感謝の気持ちを忘れず活動して参りたいと思いますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



主将 水谷優香  
(女子部 3年)

平素は多大なるご支援、ご声援を賜り、誠にありがとうございます。1月から女子部主将を務めております、3期生(3年)の水谷優香と申します。

ア式蹴球部100周年、女子部も5周年という節目の年ということもあり、身の引き締まる思いで主将を引き継いでからはや4カ月。任期の3分の1が終わろうとしている中、あらゆる場面で部員たちに支えられ、改めてその頼もしさを感じています。

しかし一方で、頼もしい部員たちに囲まれ、ふと主将としての存在感の薄い自分に気づくことがあります。ア式の女子部は、人数は少ないもののしっかり者が多く、特に前の主将の小尾さんはいろいろな場面でうまく目を配れるタイプであるため、うっかりしていると私よりも先へ先へとチームを引っ張っていきます。

もっと私中心に部が回るような、そんな主将になりたい。これが、最近強く思うようになったことです。まずは基本的なことですが、サッカーやア式に、誰よりも真剣に向き合うこと。そして、辛いから、忙しいからなどといって妥協することなく、練習でもタスクの面でも部全体に目を配りながら、積極的な姿勢を示し続けること。歴代の主将がやってきたように、私もチームを導く存在、辛くてもう一步頑張ろうと部員全員に思わせるような存在になれるよう、日々精進していこうと

思います。

また、OBの皆様をはじめ多くの方の支えで実現しているこの素晴らしい環境に深く感謝しつつ、これを存分に活かす方法をしっかりと考えていかなければならないと感じています。新部室でのミーティングや試合分析、文京LBレディースの立派なコーチ・トレーナーやチームメイトへの技術・戦術・体力面での相談、そしてこれらをもとにした、週4回与えられたグラウンドを最大限活用できるようなメニュー組みなど、やろうと思えばできることがいくつでもあります。これだけの環境が整っている今、勝つためにできることは何かを部員全員で考え、行動できるようなチームになりたい、そして勝ちたい。今年は昨年よりもさらに初心者中心のチームとなりますが、リーグ戦に向けて、勝利への想いは強まるばかりです。

ア式のために、もっとやれる、もっと頑張れる。まずは私自身が常に上を目指し、部を鼓舞し続ける存在でありたいと思います。そして、男子部のように女子部も末永く続くよう、このチームをより良いものにして、5年目に受け取ったこのバトンをしっかり次の代へと受け継いでいきたいと思っています。

今後とも末永く、応援のほどよろしくお願い致します。



主務 平田佳織  
(女子部 3年)

平素は多大なるご支援、ご声援を賜り、誠にありがとうございます。今年1月より主務を務めております、女子部3期生、3年の平田佳織と申します。ア式蹴球部の一員としてア式蹴球部100周年という節目の年を迎えることができ、心より光栄に存じます。

ア式蹴球部女子はア式蹴球部創立100周年となる今年、5周年を迎えます。現在、現役部員の多くは大学からサッカーを始める初心者でありながらも、サッカーに熱意を持って真剣に取り組んでおります。また、活動の半分は文京LBレディ

ースと共にを行っています。文京LBレディースは文京区の社会人女子サッカーチームで、文京区にゆかりのある中学生以上の選手が50名ほど在籍しております。年齢やサッカー経験、価値観も多様な部員が日々の練習や公式戦、合宿や地域のイベントなど幅広く活動しているチームの在り方は、女子サッカーチームのモデルとして挙げられることもあり、初心者が多いア式蹴球部女子の部員にとってもサッカーはもちろんのこと、様々なことを教えてもらえる、欠かせない存在となっております。

さて、ア式蹴球部女子の一年間には二大イベントがあります。

まず一つ目が、「関カレ」です。関カレとは関東大学女子サッカーリーグのことで、8月末から11月末にかけて毎週末、公式戦が行われます。関東大学女子サッカーリーグは3部から成っており、1部には全国大会優勝常連校である早稲田大学などの私立大学が多く所属しています。現在、東京大学は他の国公立大学と共に3部に所属し、大きく実力差のある私立大学との苦しい戦いもありますが、ア式蹴球部女子が参加している唯一の公式戦として全力で戦っております。

昨年までは、先述した文京LBレディースに所属する他大学に在学する部員と共に関東大学女子サッカーリーグに参加していましたが、ルールの見直しが行われた結果、今年からはア式蹴球部女子の部員のみで参戦することが決まりました。

ここで、二つ目の大事なイベントが「新歓活動」ということになります。リーグに参加するためにはア式蹴球部女子の部員を十分に揃えることは不可欠です。しかし、ただでさえ女子の学生数が少ない東京大学には、大学以前サッカーを経験したことがある学生はほとんどおらず、スポーツ志向の学生もそれまで続けてきたスポーツを続ける、あるいはラグロスなどのカレッジスポーツや武道に憧れを持っていることが多く、女子サッカー部は選択肢として候補に入れてもらうことすら容易ではありません。サッカーという競技が未だに女子スポーツとして認識されていないということを痛感します。

では、これらのイベントで良い成果を上げるために大切なことは何か。それはチーム力だと感じています。チーム力とは、集団の構成員一人一人が、共有する一つの目標を達成するために考え、

実際に取る行動の内積の総和と言い換えることができます。

私自身、これまでア式蹴球部女子で過ごしてきた2年間を振り返ると、リーグ戦で勝利という目標を達成するために、新歓活動で一人でも多くの学生にア式蹴球部女子やサッカーという競技の魅力を伝えるために、自分にもできたにもかかわらず実際に行動に移せなかったことがたくさん思い浮かびます。OB、OGの皆様のおかげで今の素晴らしい環境があるということに感謝し、伝統を引き継いでいけるよう、気を引き締めて積極的に行動していく所存でございます。今後とも未永く見守って頂ければ幸いです。宜しくお願い致します。



小倉優香  
(女子部 2年)

日頃より私たちの活動へのご支援、誠に感謝いたしております。4期生で2年の小倉優香です。ア式蹴球部創部100周年という節目の年に、まだ新しい女子部の部員としてですが、ア式蹴球部の一員であることを大変光栄に思います。皆様に女子部のことをより知っていただけるよう、私なりのア式女子への想いを述べさせていただきます。

ア式蹴球部女子と私の関わりについて述べるには、高校時代に遡らなければなりません。小中学生時代にサッカーをやっていたものの高校でサッカーから離れていた私は、また大学でサッカーをやりたいという想いを抱いていました。しかし当時志望していた大学には女子サッカー部がなく、男子サッカー部のマネージャーをやることになるのかな…と漠然と考えていました。そんな時、ふと新聞で東大に女子サッカー部ができたという記事を目にし、東大を目指すという選択肢が自分の中に生まれたのです。もちろんその後学部を調べたり自分の成績が目指せる位置にあるのかを確かめたりと検討は重ねましたが、ア式蹴球部女子が私が東大を目指すきっかけとなったことは間違いありません。

しかしこんな経緯を持ちながら、入学後にア式女子入部を考え直したこともありました。東大でしかできないことがほかにもあるのではないかと、時間がたくさんある大学生のうちに海外経験などを重ねる方が自分の人生にとってプラスになるのではないかと、などといった考えが頭を巡りました。

それでも入部を決めたことを今では全く後悔していません。やはりサッカーが好きで純粋に楽しみたいですし、サッカーをやりながらでも自分のやりたい活動ができる。こんな素晴らしい環境は私にとってほかにもありません。海外経験を積みみたいという想いが捨てられず、インターンなどのためインドやタイに行かせてもらいました。これはもちろん理解ある先輩や同輩のおかげです。ア式女子部員はとても個性的でありながら皆とても優しく仲が良く、居心地の良い集団です。だからこそ自分にできることは精一杯やろうと思っています。ただ、これまではその気持ちが足りなかった。

一年間の活動を経て、ここまでの自分の部活との向き合い方を反省することがあります。初めの頃はほとんど部活をサッカーをする場としてしか考えておらず、部活以外の時間は勉強やサークル、遊びなどで充実させようという気持ちが強かったため、チーム運営などに関しては振られた仕事をこなすのみでした。しかし、活動していく中で、自分が思い切りサッカーを楽しめる環境は当たり前ではないと気づきました。OBの皆様や男子部の方々、多くの仕事をこなしてくださっている女子部や文京LBレディースの先輩方など、多くの人の力によって整えていただいている環境です。3つ上の先輩方が引退し、自分の学年が上がり、責任が増した今年、おこがましいかもしれませんが、自分がチームを良くするくらいの気持ちを持って部活に関わっていききたいと思います。一年が経ち、サッカー愛もチーム愛も深まりました。今年はもっとチームに貢献していきます。

ここまでは部との関わり方について述べてきましたが、サッカープレイヤーとしても考えていることは多くあります。ア式女子では経験者が少なく、自分はプレーでチームを引っ張っていくべき立場にあります。これまではとても上手な先輩にほとんど頼り切ってしまっていたのですが、その先輩が引退してしまった今、私がこれまでの何倍も頑張らなければならないと思っています。守備に

も攻撃にも顔を出し、声でも仲間を鼓舞できるようなプレイヤーになりたいです。

偉大な先輩方を見てきているため、自分がチームを良くできるのか、プレイヤーとして十分な技術、体力、判断力を身につけられるのか、不安はたくさんあります。それでも自分なりに全力でチームと向き合い、精一杯頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。



副将 松坂大和  
(3年)

2018年をもって東京大学ア式蹴球部は創部から100周年を迎える。日本の大学サッカーの草分けとしての役目を果たし、その歴史を今日まで紡いできてくださった偉大な先輩方に、心からの敬意を払うとともに感謝申し上げたい。

そんな節目を迎えるにあたり、このクラブはその存在価値と、ここから100年のビジョンを改めて問われていると私は思う。というのも、日本においても、サッカーを含む大学スポーツがセミプロ化に向かい経済的価値を高めつつある中、東大ア式蹴球部は一公立大学の体育会団体、もっといえば一課外活動団体に成り下がりつつあると感じるからだ。

「それでいいじゃないか。東大サッカー部に特別な価値があろうがなかろうが世間的に大した問題じゃない」という意見もある。その通りかもしれない。世間からすれば東大サッカー部が強いかどうか、価値があるかどうかなんかよりも、日本代表がW杯でどこまで勝ち上がるかの方が大事で、冬の国立競技場でどの高校が高校サッカーの頂点に立つかの方が関心事だ。

けどそうじゃない。何らかの意志をもってこの大学の門を叩いたのなら、正当なリスペクトを集め、自分や自分が所属する集団が周囲に何か価値や影響を与えたいと思うもの（というよりそうあるべき）である。大学生活4年間で何をするか、無限に選択肢がある中で、サッカーで勝利を目指すことを選び、ありったけの情熱を注いだ私

たち部員が、ア式での4年間で周囲に何か影響をもたらし、卒業後も社会で活躍できる人財になること。そしてこのクラブが、このクラブに関わる人間全てが、4年間で注いだ情熱とかけた時間にふさわしいリスペクトを集めてほしいと率直に思う。

このクラブの持つ一部活以上の価値について、様々な考え方があると思うが、私の人生経験に基づいて得られた1つの自分なりの考えがあるので、少し個人的な話をさせて顶きたい。

高校時代、藤枝東という名門サッカー部での競争に身を置くなかで、自分の実力が到底プロには届かない事を遂に受け入れざるを得なくなり、サッカーにおける最大の夢がここで潰えた。この時点でサッカーに対する最後のモチベーションとなったのは、幼い頃から憧れていた藤枝東で後悔のないようにやりきること。そして高校卒業後を見据えて、純粋に学問の最高峰を目指して本気で東京大学を志すようになった。当然大学でサッカーは続けないつもりでいた。だから東大に合格し、散々悩んだ末にア式への入部を決めた後も、先輩方の、高校時代の自分たちにも劣らない勝利への情熱を目の当たりにしながら、今までと同じように学問との両立は可能なのに、東大を目指すことを決めた当時の自分が邪魔をして、結局ア式のために何かをしたいという意識や本当の意味での勝利への情熱を持つまでに1年近い時間を要してしまった。その後本気でア式の勝利に何が必要か、体にも頭にも汗をかけた2年間で学んだ事や成長できた事を鑑みても、最初の1年間は3年間のア式生活で最大の後悔である。そして同じ後悔を抱えている部員は少なくないのではないかと感じている。

もし自分と似た経験をしている高校生が多くいるのならば、それはア式にとって大きな可能性だと思う。つまり、プロとは別の道を歩む事を決めた全国の高校生に、学問を極めるかたわらで、最後にもう一度好きなサッカーに情熱を捧げて勝利を目指すことで、人として成長できる場所として東京大学のこのクラブが認知され、憧れや目標となりその輪が広がる事。これが私が考える今後100年のこのクラブの存在価値でありビジョンである。そしてそんな未来のア式を作るのは、今ここにいる部員一人一人の責任ある行動だという事を忘れてはいけない。

部員一同未来を見据えつつ、ひたすらに勝利を目指して愚直に進んでいきます。読んで頂きありがとうございます。



副将 大谷拓也  
(2年)

今年の二月から副将を務めさせていただいております、二年の大谷拓也です。

まず初めに、副将に就いてからこれまで改まった機会がなかったので、この場を借りて簡単な決意表明をさせていただきたいと思います。

副将にならないかというお話を幹部の方からいただいた時は、素直に光栄に感じました。まだ大学一年で成人してすらいな文字通りの未熟者でしたが、又とない機会だと思い、引き受けさせていただきました。もっと適任な部員がいる中で、「次世代の育成」という意味も込めて、僕を選んでくださったのだと勝手に理解していますし、おそらくそうなのでしょう。しかし副将という役職は言うまでもなく、個人のための成長の場ではないですから、自分の若さに甘えることなく、自ら先頭に立ってこのチームのために尽力していきたいという所存です。現状、副将に就いてからのプレシーズンは、些細な怪我を積み重ねて、殆どピッチに立つことは出来ませんでした。自身の情けなさを思い知らされる3か月間でしたが、リーグ開幕後は全身全霊をかけてプレーし、必ずやこのチームの勝利、そして一部昇格に貢献してみせます。

さて、自分の話はここまでにして、そろそろ本誌の主題である「東大ア式蹴球部 100 周年」に関して思うところを書きたいのですが、この部の長い歴史に関して知っていることは指折り数えられるほどで、正直に申しますと語れることはあまりありません。

胸のエンブレムに刻まれた“since 1918”の文字を見て「本当に100周年なのか、なんだかっこいいな」と漠然と感じたり、100周年を迎えたこの年に部にいられることをなんとなく光栄に

思ったり、新歓活動の際に「100周年」を謳い文句にしてみたり。僕が「100周年」に対して抱く感情は、長きに渡ってア式蹴球部に関わってこられたOBの方々がそれぞれ抱いていらっしゃるであろう様々な感慨には、到底及ばないというのが正直なところでは。

しかし最近になってようやく、現役部員の先輩やOBの方々から、ここ2、3年のア式蹴球部のことを少しだけ聞き、自分がこの部の歴史の片鱗すら知らなかったことを痛感いたしました。「過去」を知らないことは当たり前と言えば当たり前ですし、それを知ったところで「今」と向き合うことに一切変わりはありません。ただ、それを知らずに今のア式を見るのと、知ってから今のア式を見るのでは、全く意味合いが違うことに気がきました。なぜなら、僕達が当然として受け入れているア式の姿が、数々の先輩方が創り上げ、守り抜いてきたものだとなれば、それがより価値あるものに見えてくるからです。「今」のア式のために尽力したいという熱意が湧いてくるからです。

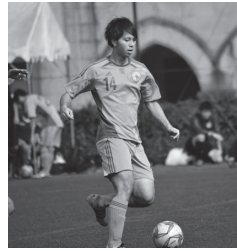
そして、おそらく、僕が知らない世代の先輩方も同様に、100年という長い歴史の中で、ア式のために考え、闘ってきた。ア式を守り、変え、創り上げてきた。その結果として、その系譜の中に今のア式蹴球部がある。実感の湧きにくいことですが、漠然とそう思います。

「伝統」という言葉は、良くも悪くも安泰をもたらします。ア式には100年という「伝統」があるからこそ、我々は成熟した組織の中で、OBの方々の手厚いご支援を受けながら活動できる。一方で、「伝統」という言葉に惑わされ、思考停止に陥り、組織にとっての最善を目指して変革をもたらすことを忘れがちになる。時の流れと共に、目指すべきア式の姿も刻々と移り変わっていくはずなのに。

守るべきところは守り、変えるべきところは変える。僕自身も、尊敬する先輩方に劣らぬ熱量と強い意志を持って、ア式蹴球部に向き合い続けたいと思います。

大それた話になりましたが、まず目指すは「一部昇格」です。100年分の想いを胸に、ア式蹴球部の名を背負い、チーム一丸となってなんとしてでも成し遂げます。

今期も変わらぬご支援、ご声援のほど宜しくお願い致します。



学生コーチ 山口 遼  
(4年)

ア式蹴球部が紡いできた100年の歴史の中で、数えきれないほどの部員一人一人にとって、この部はそれぞれの意味を持つ居場所であり続けてきたはずだ。創部100周年ということで、今から100年前、1918年に起きた出来事を検索してみると、「米騒動」だとか「第一次世界大戦」だとか歴史の授業でしか聞かないような言葉が目につく。100年という時間の持つ圧倒的なスケール感に圧倒されながらも、そのような激動の時代にもサッカーで泣き、サッカーで笑っている人がいた、そんな事実には、この国に確かに脈打つサッカーの鼓動を感じた。

創部から100年を迎えたときにたまたまこの部にいたというだけでこのような仰々しい文章を書くのは大変僭越だが、折角の100年だ。いつもより少しだけ背伸びをして、スケールの大きな話でもしてみようと思う。

「時間」という観点で言えば、サッカーはあまりスケールの大きな話に向いてないスポーツだ。トレーニングのサイクルは一週間単位で考えられているし、リーグ戦はせいぜい一年、近年では実際のプレーにおいても商業的な側面においても、サッカーを取り巻く「時間」の流れは、どんどん速くなってきているような気がする。ここから100年後のサッカーどころか、10年後のサッカーだってどうなっているのか、さっぱり予想もつかない。

サッカーはそんなスポーツになりつつあるが、この100年の歴史を振り返ってみれば、そこでは今も昔も変わらない「熱狂」で私たちを包み込んでくれていることがわかる。

ミュンヘンの悲劇やシャペコエンセといった悲しみも<sup>(\*)</sup>、フランス代表やスペイン代表のW杯初優勝のような喜びも、あるいはもっと身近な、バルやパブで地元チームの文句を言いながら酒を飲むファン達の姿まで、どのような時代、どのよ

うな場所においてもサッカーはそこに在り、たくさんさんの悲喜交々をその目で見てきたのだろう。

\*：いずれも多くのサッカー選手・役員が犠牲になった航空機事故。ミュンヘンの悲劇は1958年の事故で、マンチェスターユナイテッドの選手が死傷。シャペコエンセはブラジルセリエAのチームで、2016年の事故により首脳陣・選手を多く失った。

我々ア式蹴球部の試合結果がサッカー界や世界に与えるインパクトはどれほどのものか。おそらくそれは「誤差」というにふさわしく、まさしく身内以外は全く興味がない代物だ。世間的に見れば全く無駄であり、サッカーというこのあまりにも大きなスケール感の前には私たちのするサッカーなんて存在していないに等しいのかもしれない。でも、それでいい。

選手としての引退を決意した雨の日の御殿下を、私はきっと一生忘れない。福田さんや浅見先生なんかにそんな試合があったりするのだろうか。自分のちっぽけなサッカー人生は、自分の周囲にほんの少しは熱狂を与えられただろうか。東大ア式蹴球部の試合も、イングランド8部の試合も、少年団の時の試合も、世間は全然興味がなくても、少なくとも少しは、周囲の人くらいは熱くなってくれていたのならそれで充分だ。

そこに必ず「サッカー」がある。パルセロナにもマンUにも与えられない熱狂を、ア式蹴球部や自分は与えられるのだ。東大生がどうだとか機会損失とかは関係ない。そこにある「サッカー」を楽しむ、これだけで既に大いなる贅沢だ。



学生GM兼テクニカルスタッフ  
小坂 彩 (4年)

「私たちア式蹴球部は1918年に創部され、今年で100周年を迎える伝統あるサッカー部です。」

今年の新歓活動で、新入生に向けて幾度となく話したこの説明。たしかに100年も続く部活であれば、脈々と受け継がれる伝統が存在するように思われるが、改めて「ア式の伝統」とは何かと

聞かれると答えに窮してしまう。

私はこのア式蹴球部で「テクニカルスタッフ」というデータや映像を用いて戦術分析を行う役割と、「学生GM」という部全体の運営を取り仕切る役割を担っている。どちらの役割も、100年はおろか10年前にも存在しなかったものである。

サッカーのトレンドもヨーロッパを中心に日々移り変わっており、私たちア式蹴球部においても決まったサッカーの形があるわけではなく、毎年のように異なる戦術を用いてリーグ戦を戦っている。もちろん100年前のア式のサッカーと今のア式のサッカーでは、何から何まで大きく異なるであろう。

正直なところ、自分たちが在籍している間に100周年というメモリアルイヤーを迎えなければ、ア式蹴球部が創部何年かなんて気にも留めずに4年間を過ごしていただろうし、普段の活動においてア式蹴球部の伝統について意識する機会はないように思う。

では、100年という長い歴史を経てきたにも関わらず、ア式蹴球部には「伝統」がないのだろうか。そもそも「伝統」とは何なのかということから考えたい。

「伝統とは火を守ることであり、灰を崇拝することではない」

作曲家のグスタフ・マーラーが述べたこの言葉は、ア式蹴球部が100年に渡って存続することができた理由を示しているように思う。マーラーは、これ以上変化することのない「灰」、つまり過去に完成された音楽を崇拝するのではなく、先人がおこした音楽の火を絶やさぬように、先人の音楽の上に新しい音楽を作り続け、火を燃やし続けることを「伝統」であると述べている。

これをア式に置き換えて考えてみると、「伝統」とは過去に成功した戦術やピッチ外の活動を崇拝することではなく、常に新しいことに挑戦することで部を守ることであると言うことが出来ないだろうか。

サッカーを愛し、サッカーに情熱を捧げること。勝利を渴望し、一人の人間として成長すること。先人たちが燃やし続けてきたこの「火」を燃やし続けるためには、「継承」ではなく「変化」が求められている。

つまり、「テクニカルスタッフ」や「学生GM」といった歴史の浅い役職も、最新のサッカートレ

ンドに基づいた新しい戦術も、新しいからといって伝統的でないわけではない。むしろこの変化こそが、ア式がア式たる所以なのではないだろうか。

私がア式蹴球部の部員として活動するのは、100年の歴史の中のたった4年間に過ぎないし、私が4年間で築き上げたデータ分析のあり方やスタッフ制度などは、おそらく時代に合わせて変化していつてしまうのだと思う。今から100年後の2118年にア式蹴球部がどんな組織になっているのか、到底想像もつかない。

しかし、100年という歴史に甘んじたり過去の栄光にすがっていたりしても、「ア式の伝統」は守られない。挑戦すること、変化すること。これらによって守られた「火」は、「伝統」として必ずや100年後のア式の礎となるであろう。



スタッフ 森本和人  
(4年)

東大ア式蹴球部が百周年を迎える今年度の四年生で、チームの運営スタッフを務めさせてもらっている森本和人と申します。他の同期の寄稿者と違い主将やGMのような大きな肩書はないのですが、今回せっかく寄稿の機会をいただけたので、自分の仕事の内容や、それがこれからのア式にどのような意味を持ちうると思うかを少し書いてみたいと思います。

まず僕自身の仕事について、チームの運営関連の仕事にいろいろ携わってきましたが、その中で特に深く関わってきているのが、今の部内で「リクルート活動」と呼んでいるものです。具体的には、高校生との練習試合や高校生向けのサッカーフェスティバルの開催、それに四月頃の、一年生に対する新歓活動などいろいろなものがあります。これらの活動の目的は、能力とモチベーションのある選手にア式に入ってもらうことでチームを強くすることです。

新歓の活動はずっと昔からあったでしょうし、高校生と練習試合をすることも決して特別に新しい活動というわけではありません。僕自身高校生

の時にア式の先輩方と試合をさせていただいたことがありました。ア式の主催するサッカーフェスティバルは、すでに十年以上連続で毎年開催されています。ただ、これらの活動をバラバラにならずにやるのではなく、ア式にいい選手を入れるという統一された目的意識をもって取り組みたいという思いから、今はまとめて「リクルート活動」という言葉を使って括っています。

この活動に一年生の頃から深く関わり、主導するような立場にも立たせてもらってきた中で、これらの活動を通して高校生の時からア式を知りア式に入ろうと思っていたというような後輩部員も出てきており、また部員たちの活動への理解や協力も増えてきているように感じています。四年生となった今は、手ごたえを感じられるようになったものをいかにして後輩に引き継いでいくかということを試行錯誤しています。以上に述べたようなことが、自分が取り組む中では一番大きな比重を占めるものです。

次に、リクルート活動が今後のア式蹴球部にどのような意義を持つか、拙いながらも自分なりの考えを述べさせていただければと思います。

かつてのア式蹴球部は天皇杯で勝ち進むほどに強かったとかがっています。現在LB会の幹部として現役を支えてくださっているOBの方々の話を聞くと、関東リーグの舞台で活躍されていたころの話が多く出てきます。近年でも東京都1部リーグで優勝し関東昇格戦を戦った年がありました。しかしながら、百周年を迎える今年僕たち現役が戦う舞台は東京都2部リーグです。一昨年に1部リーグから降格し、昨年は昇格争いにも絡めず中位に位置し残留という結果でした。ちょうど明日が今年のリーグ開幕戦という日にこの原稿を書かせてもらっているのですが、部員はみな今年のリーグ戦も苦しい勝負になるという認識のもと、強い覚悟でこれからのリーグ戦に臨もうとしています。回りくどくなってしまうかもしれませんが何が言いたいかというと、今の自分たちは強くない。何もしないで勝てるような余裕は一ミリもないです。

日本でもサッカーの裾野は広がり、クラブチームのユース出身というようなサッカーエリートはそこら中にごろごろといます。そんな中で僕たちア式蹴球部が価値ある存在であるために、そして何よりも勝てるチームであるためには、ピッチの

上でのたゆまぬ努力とそれだけに限らない頭を使った工夫のどちらもが不可欠です。この両輪がうまく回ってはじめて今のア式蹴球部は前に進んでいくことができる。

自分が長く携わってきたリクルート活動は、そのような片方の車輪を構成する一部だと考えています。他にも今のア式が試みる工夫には、専門チームを作った試合分析、フィジカルコーチを中心にしたフィジカルトレーニングやコンディショニング、多くの人に支えてもらえる部を作るための広報活動など様々なものがあります。僕自身は徐々に卒部が迫ってきている身ではありますが、これからも前に進み続けることができる、そして勝って上へと行けるチームを作っていければと思います。



学生 GM 兼主務  
糸谷 歩（4年）

平素より多大な御支援、御声援を賜り、ありがとうございます。現役部員を代表して、改めて御礼申し上げます。記念誌という貴重な場をお借りして、ア式蹴球部への想いを記したいと想います。

入学直後の僕にはア式蹴球部という選択肢はなかった。大学生になり選択肢が広がった中で、今までずっと続けてきたサッカーではなく、新しいことに挑戦したいという気持ちがあったからだ。そんな僕をア式へと導いたのはサッカー愛だったと振り返って思う。先輩に誘われて練習に一度参加して、やっぱり本気のサッカーがしたくなった。選手として過ごした最初の一年半、下手くそで練習で怒られて練習が辛いと思ったことは何度もあったけど、サッカーを嫌いになったことはなかった。どんなに疲れていても試合の映像を見るのは楽しかった。スタッフになってたまにサッカーやると、随分下手になったなあと感じるけど、やっぱり楽しい。

そんなサッカー好きの僕でも、この4年間は辛いことばかりだった。特にスタッフになってからの2年半は一難去ってまた一難、毎日が闘い

だった。中学高校と部活のキャプテンをやらせてもらって、それなりにチーム運営もできるだろうと思っていた自信はすぐにへし折られた。考えても答えの見つからない問題、途中で辞めていった仲間、そんな状況とは無関係に淡々と近づく公式戦やイベント。本当はもっとやりたいこと、やらなければならないことがあるのに、目の前の仕事をこなすことに追われる毎日。突きつけられた無力感。最初の一年は本当に辛くて自分の存在意義を見失うこともしばしばあった。

そんな毎日が変わったのは3年になって少し経ったくらいであったと思う。特にこれといったきっかけがあったわけではないが、この頃から自分のやっていることが面白いと思うようになった。今考えると東大サッカーフェスティバル（高校生大会）やカイザー杯（文京区の少年サッカー大会）など自分が責任者を務めたイベントなどが終わり、全体を見渡す余裕が出てきたからなのだと思う。責任者を務めている間はそのイベントが無事終わることだけに頭がいていたが、終わってからそのイベントが部としてどういう意味を持つのか、なぜ行うのかを自分の中でしっかりと消化出来た。

3年の夏、代替わりに伴って学生GMと主務という二つの大役を任せてもらえることになった。学生GMの仕事の具体的な何かと問われるとなかなか答えにくいものがある。ざっくり言えばピッチ外の統括なのだが、他の部員からは聞こえのいい使い走り程度に見えているかもしれない。1年間、学生GMとして色々活動してきたが、未だに学生GMの正解は僕にもよくわからない。ただ、福田さんに言われた「常に全体最適を見ろ」という言葉はなぜか今も強く耳に残っている。それはAチームだけでなく育成チームも選手もスタッフも、男子部も女子部もLB会の方も保護者の方も、このア式蹴球部に関わる全ての人たちのことを常に気にかけてほしいということだったのかなと思う。自分が学生GMとして何を残せたかわからないが、学生GMというポジションは多くのことを僕に残してくれた。上手く言葉にできないが、色々な人に会って、色々な話をして、色々な事を一緒にやって、色々な経験をさせてもらえた。この経験の恩返しはこれからの人生の中で少しずつしていきたいと思う。

この1年、本誌の編集作業をはじめとして多

くの場面でア式蹴球部が歩んできた歴史に触れる機会を多く頂いた。その中で感じたのはこのア式蹴球部には良くも悪くもはっきりとした「伝統」がないということだ。チームに代々伝わるスローガンのようなものもなければア式らしいサッカーというものもない。100年という歩みの中でそういったものがないのは正直驚いた。僕が過ごした4年間の間にも色々なことが変わった。カテゴリー編成、運営体制、指導体制、志向するサッカー。一年として同じ年はなかった。傍から見ると、ころころと色々なことが変わって一貫性がないと言われるかもしれないし、事実回り道もたくさんしていると思う。しかし、僕はそれが悪いことだとは決して思わない。「前はこうやっていたから」とか「先輩にこう言われたから」などと慣習を盲目的に踏襲するより、今いる部員が常に何がベストなのか考えて行動することの方が尊いことであるはずだ。

しかし、それはただ闇雲に新しいことをするのではなく、良いものは時代に合わせて変化を加えながら継続してきた。49年前、浅見先生が始められた御殿下サッカースクール。当時、地域で気軽にサッカーを楽しめるスクールは斬新だったそう。そしてそのスクールは来年50周年を迎える。選手を獲得することが出来ないア式が出来る高校生へのリクルーティング活動として始まった東大サッカーフェスティバル(旧進学校リーグ)も、今年で14回目となる。僕自身がそうであったようにこの大会に参加した現役部員、OBは僕の知る限りで20名弱いる。

100年の長い歴史の中で、常にその時の現役部員は先人の知恵に敬意を払いつつも、決して変化を恐れることなく前に進んできたように思う。はっきりとした形では表現されていないが、この挑戦を恐れない精神こそが、ア式蹴球部に脈々と受け継がれる「伝統」なのかもしれない。

少しだけ自分の将来の話をしたい。この一年、学生GMとして様々な経験をする中で将来は日本のサッカー界、スポーツ界のために働きたいと思うようになった。日本版NCAA(全米大学運動協会)の設立など身近にスポーツ界の変革を目の当たりにしたことと、これまでの人生を振り返ってもスポーツに育てられてきていつかその恩返しをしたいと思っていることが理由である。はっきり言って今の日本のスポーツ界は「伝統」という

見えない強力な力で色々なことが支配されているように感じる。身近なところ言えば数年前、ア式の公式戦ユニフォームにスポンサーを入れたいと大学に問い合わせたそうだが、前例がなく判断が出来ないと言われ計画が頓挫したそう。学連関連でも今季、各大学の下承をとることなく理事の一声で審判に関するルールが変えられたという事実もある。大学スポーツだけでなく、ある競技のトップリーグで働いている友人に聞いたところ、その運営は決してプロリーグとは言えないほどずさんなものだそう。これまで多くのことを教えてくれたスポーツの現状を目の当たりにした時に、とても悲しくなった。何とかしてこの惨状を変えたい。本気でそう思っている。いつ、どんな形になるか今は全く見当もつかないが、必ずサッカー界、スポーツ界の力になりたいと思う。

最後にこの文章を読んでいる現役部員、また未来のア式部員に向けて。

ア式での4年間は毎日を通すだけで大変で辛いことばかりかもしれない。一生懸命頑張っても報われないことばかりかもしれない。自分の努力を周りは評価してくれないかもしれない。でも、部にとって必要なものだと思うのなら、報われないかもしれないその努力をどうか続けてほしい。ア式蹴球部がより強くより魅力的なクラブとなるために何が必要か、自分で考え行動に移してほしい。そして、その努力をもってア式蹴球部の歴史を前に進めてほしい。

